

メイド・オブ・レンゴク

鈴近

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

煉獄家ガチ勢オリ主と煉獄家のほのぼのライフときどきロマンス  
(不成立)

溜火さんは死ぬ。煉獄さんも死ぬ。

目次

|         |        |    |
|---------|--------|----|
| 幼少期 1   | 人生の岐路  | 1  |
| 幼少期 2   | 約束     | 16 |
| 幼少期 3   | 慶事     | 35 |
| 幼少期 4   | 翳り     | 49 |
| 原作時間軸 1 | 出稽古    | 63 |
| 原作時間軸 2 | 秘密     | 84 |
| 終       | 無限列車乗車 | 97 |

## 幼少期Ⅰ 人生の岐路

黎明の頃が一番空は暗い。真っ黒だった夜空が少しずつ青へ表情を変えていき、太陽が光を連れてゆつくりと顔を出す。

空が白む朝方、夕映はぱちりと目を開けて身を起こし、テキパキと布団を畳んだ。からりと障子を開けると、澄み切った早朝の空気が頬を刺す。夕映は寝間着姿のままぐつと伸びをし、冷たい朝の香りを胸いっぱい吸い込んだ。肺を空気が満たし、血がそれを取り込み、筋肉の繊維一本一本に血が巡っていく感覚を思い出す。体温が上がるのを感じて、夕映はぐつぱつと手を開き、閉じる。まぶしい光に目を眇めながら、彼女は開けた障子を音を立てずに閉め、着替えを始めた。また朝が来た。新しい一日が始まる。それがとても尊くて失われやすいものだと、心に刻みつけて、夕映は今日も朝を迎えられたことに感謝する。

木綿の着物を身にまとったら、まずは掃除、それから朝食の準備だ。たすき掛けをして、割烹着を着て、夕映は自室を出た。お仕えしている主人一家を起こさないよう、足音を殺しながら小走りで移動するという器用な真似をしながら、彼女は台所へ飛び込んだ。庭へ繋がる扉を開け、土間を掃く。次に水汲み。桶片手に井戸へ向かい、台所と井戸を往復。米を研いで浸水させ、みそ汁を作るためにマッチで火を起こす。

（杏寿郎坊ちゃん、今日は何時ごろのお帰りかしら）

野菜を切りながら考えるのは、上の坊ちゃんのことだ。彼は夕方から夜にかけて働いていて、仕事が終わるのはいつも夜空が白く変わる頃。仕事で遠くまで出かけることもあるから、毎日この屋敷に帰ってくるわけではないけれど、帰るか帰らないかはいつもきつちり連絡をくれる。

ばさばさと羽音が庭から聞こえた。ぱつと夕映はそちらを振り向く。

「カアアアーツ！ 杏寿郎、帰還ハ一時間後オ！」

ちようどこんな具合に。

夕映は笑って、鏝鴉に「はあい、わかりました。今日もありがとうございます」と頭を下げた。

さて、一時間後なら米が炊けて握り飯を用意できる。あとは焼き魚に青菜のおひたしをつけようか。食事をしたらすぐに眠られるだろうから、部屋を整えて布団の準備をしておかなければ。仕事の算段をつけつつ、夕映はふにやりと微笑む。

今日も坊ちゃんが無事でなによりだ。

「ただいま帰った!」

「坊ちゃん! おかえりなさいませ、ご無事でようございました。朝ご飯できていますよ」

「うむ!」

「お着替え手伝わせていただきます。あ、そうだ、隣の小母さまが坊ちゃんに好きな人はいないのかと見合いの話を……」

「断っておいてくれ! まったく、夕映が俺の嫁になることを了承すれば縁談もぱたりとなくなるだろうに!」

「あらあ、坊ちゃんも懲りませんねえ。私が煉獄家の女中である限り、坊ちゃんと一緒になることはありませんよう? せめて旦那様を正面から説得してくださいませんと。ああ恐れ多い。緊張のあまり鳥肌が」

「ははは、冗談がうまくなったな!」

篝夕映は煉獄家の女中である。四歳のときにこの家に引き取られ、以降女中として仕えている。

煉獄家には三人の男がいる。父、楨寿郎。長男、杏寿郎。次男、千寿郎。皆赤毛交じりの金髪で、獅子のような髪質をしている。特徴的なのはぎよろっとした金の瞳だろう。煉獄家男児はほとんどこの顔だと幼い頃に楨寿郎が語っていた。

煉獄家の人々は鬼殺隊の隊員であり、この家系は、隊員たちの中でも最強を謳われる「柱」たちのうち、炎の呼吸を操る「炎柱」を代々輩出している。十年前は家長の煉獄楨寿郎が柱を務め上げ、現在は長男の杏寿郎が柱だ。

鬼殺隊。千年前から鬼を狩るために存在する、政府非公認組織。隊員数は数百名、現在の柱は七名。隊士は関係者から鬼狩りと呼ばれることも多々ある。

鬼。人間から変質し、人の血肉を食らうようになった化け物。

すべての鬼の大本には鬼舞辻無惨という存在があるということだが隊員たちに周知の事実として伝えられており、その「鬼舞辻無惨」がどのような外見なのか、男なのか女なのか、年齢さえも杳として知れない。わかっているのは鬼舞辻がすべての始まりだということのみ。鬼殺隊の目標は鬼舞辻を抹殺することである。鬼舞辻を殺さなければ鬼は増え続ける。鬼を増やせるのは原則として鬼舞辻だけだからだ。

鬼にも柱に相当する十二鬼月という集団があり、柱が下弦を殺しては上弦が柱を食らうような状態が千年間続いている。その間にも無数の隊員が死んでいる。

鬼を殺す手段は限られる。日光の下に引きずり出せばどのような鬼でも身体が崩れて死に至るが、それ以外の弱点はほとんどないと言っている。腕を切ったところで瞬く間に再生するし、専用の武器でなければ頸を落としても死なない。

しかし、鬼殺隊は鬼とは違って、人間相応の肉体のまま鬼と戦わなければならない。腕がもげれば二度と生えてこないし、血を流しすぎて死ぬことも多々ある。そんな中で人間が鬼と渡り合うために編み出したもののひとつが、「呼吸」だ。特殊な呼吸法を習得することで心拍数と体温を上げ、人間の限界を超えた領域に進む。身体を鍛え、正しい呼吸を習得することで、鬼殺隊は人間の身にありながら岩よりも硬い鬼の頸を落とすことが可能になる。

しかし、それほど鍛えたとしても柱以外はすさまじい勢いで死んでいくのが現状だ。そんな状況でも隊員たちは戦う。鬼殺隊は何度も壊滅の危機を迎えたが、それでも鬼から人間を守るために日々戦い続けている。

「うむ、うまい！　しかし量が少なくはないか？」

不満そうに膳を見つめる杏寿郎の前で、夕映は新しい茶を湯呑に注

ぐ。彼女の眉は下がっていたが、顔には相変わらずふわふわしたわたあめのような笑みが浮かんでいた。

「もう、坊ちゃんたら。眠る前にお腹いっぱいまで食べてしまったら身体に悪いんですよ？ 千寿郎坊ちゃんが起きてこられるまで一眠りして、そのあとにまたたつぷり出させていただきますから、今は我慢してくださいな」

「むう……。それならば仕方がない、耐えるでしょう」

杏寿郎は大食漢だ。店で売っているような弁当だと一回の食事で十個はぺろりと平らげるし、夕映が食事を持たせるときは四段重ねの重箱にみっしり食べ物を詰めて渡す。米粒一つ残さずきれいに返ってくるのが常である。

というか、鬼殺隊に所属している隊員は強ければ強いほどよく食べる。杏寿郎の弟子であり、今ぐんぐんと階級を上げている甘露寺蜜璃嬢などは、関取三人よりよく食べる。なので、先ほどまで用意していた食事では到底腹が満ちないことなど、夕映には織り込み済みだった。当然である。満腹になるまで食べさせるつもりなどなかったのだから。

不満を漏らしつつも、食べ方や箸の持ち方は非常にきれいなので、両親からの厳しいしつけが垣間見られるところだ。夕映はにこにこと笑みを絶やさずに、ただ見守る。

うまいうまいと言いながらもくもくと口を動かし続け、杏寿郎は二杯目の茶をすすりながら夕映に声をかけた。

「そうだ、留守の間なにか変わったことはあったか？」

「いいえ、いつも通りです。毎日千寿郎坊ちゃんと私で修行をして、旦那様は日がな一日お部屋に籠られて。蜜璃さんは暇を見てはいらっしゃって、それはもう目覚ましく成長なさっていますね。ああ、昨日蝶屋敷にお邪魔して働いてきたくらいでしょうか？ なほちゃんたちがお菓子を分けてくださいましたよ。お八つ時に出しますね」

「うん、わかった！ いつもありがとう、夕映」

「いえいえ！ 皆さんのために働くのが夕映の仕事ですし、それが一番の幸せですから！」

夕映は笑って言った。杏寿郎は眉を下げ、噛みしめるように苦く笑った。

坊ちゃんのこういう表情を見ると、夕映はいつも困ってしまふ。本当だ。嘘ではない。今言ったのは心からの言葉だ。いつだって夕映は杏寿郎たちに尽くすことを無上の喜びとしている。本当に、皆様のために動けるのなら、役に立てるのならばなんだったっていいのだ。しかし、杏寿郎がなぜ苦々しい顔をするのかを、本当は夕映も理解していた。理解した上で、口をつぐんでいるのだ。

目覚めた鳥たちが木の上でチィチィと鳴いている。柔らかな光が庭を照らしている。とても、静かだ。

口を開いたのは夕映が先だった。

「……。坊ちゃん、先にお休みください。部屋は準備できていますから」

一瞬杏寿郎は言葉に詰まったが、すぐに取り繕って微笑む。

「ああ、そうさせてもらう！ ではまたあとで」

「はい」

杏寿郎は腰を上げ、居間から出ていった。

自室に戻った杏寿郎は、布団に身を横たえてため息を吐いた。瞼を片手で覆い、考えるのは先ほどの会話。夕映の表情。自分が犯した間違。未だ改められずにいるそれについて。

「はあー……」

もう一度、深いため息が口からこぼれた。

現在夕映は十五だが、彼女は四つの頃から杏寿郎と一緒に榎寿郎から剣の指南を受けてきた。九のときに、鬼殺隊に入ってから杏寿郎の役に立ちたいと発起し、渋る杏寿郎を半年かけて説得して、最終選別を通過し無事に生き残っている。その程度の実力はある。順当にいけば、今頃夕映は鬼殺隊の隊士としてばっさばっさと鬼の頸を胴体から飛ばしているはずだ。

杏寿郎の一存で、夕映に選別の合格を辞退させた。彼女は今も女中として屋敷の中で働いている。



「無傷で帰ってきたら隊に入れるか考える」と言った彼は、夕映を隊に入れるとは決して明言しなかった。その結果がこれだ。本当に考えるだけで、考えた結果、杏寿郎は夕映を隊士にしなかった。騙し討ちじゃないか！ と夕映は大変立腹したが、結局最後は折れてくれた。弟の千寿郎は当時まだ四つ、さらに母の溜火の喪が明けて半年経つたばかりで、家の労働力が必要だったのだ。母を亡くしてからすつかりふさぎ込んでしまった父には、千寿郎を育てることすら危ういだろう。杏寿郎は任務があるからなおさら厳しい。

「だから、夕映には家を守ってほしい。お願いだ」と頼まれてしまえば、坊ちゃんの「お願い」にことさら弱い夕映が断れるはずもない。ましてや己は正座して頭を下げようとまでしたので、恐縮して縮こまった夕映は慌ててぶんぶんと首を縦に振ったのだ。まったく、杏寿郎は夕映がなにに弱いか熟知している。

卑怯な真似をした。自分でもそれがわかっていた。それでも、もつともらしい言葉を並べて彼女を戦いから遠ざけた。

話は変わるが、鬼殺隊は常に人員不足だ。選別から帰ってきてきて晴れて隊士となる人間は平均二、三人だし、その三人も最低限しか育てられていないので、よほどの才能があると見込まれて、柱の内弟子こと継子に選ばれ、しつかりとした指導を受けられなければ三か月も生き残れない。継子になっても運が悪かったらすぐに死ぬ。柱になるために必要な期間が二年から五年という短さからも、その死亡率の高さは推して知るべし。

夕映は現炎柱である杏寿郎の妹弟子だ。選別を受けたときにはすでに全集中の呼吸・常中は習得していたし、入隊を辞退させられたあとの今でも千寿郎を指導して、自分の修行も続けている。実質、杏寿郎の継子であると言っても過言ではない。

本人には戦いへの覚悟と意志がある。隊に入りたての平均的な隊士よりは確実に強いという自負もある。杏寿郎も夕映の強さは保証する。そこまでわかっているのに、夕映を女中として家に縛りつけて隊に復帰させないのは、鬼殺隊への裏切りに等しかった。戦わせれば鬼に殺される人を減らせるとわかっていながら、強さを有した剣士を

徒に遊ばせているのだ。裏切り以外のなんと云えばいいのか。

これは杏寿郎の我儘であり、エゴイズムであり、傲慢であった。

彼女が治らぬ傷を負うかもしれないと思うと手が震えた。自分を守ろうとして死んでいく彼女を夢に見た。彼女が死体になってこの家に帰ってくることを思うと身の毛がよだつ。

杏寿郎は、夕映を失うことが恐ろしくて仕方がないのだ。篝夕映は煉獄杏寿郎が持つ弱みのひとつだった。

彼女を想うときはいつも、己はこんなにも矮小で、愚かで、弱かつただろうかと胸が苛まれる。

夕映がもつと弱くて、もつと彼女自身の命を優先するのなら、杏寿郎とていつものように「俺が守ればいいだけだな！」とうんうん頷いていただろう。しかし、悲しいかな、夕映には才能がそれなりにあり、努力し続ける根気強さがあり、煉獄家の人々を自分の命より大切なものだど認識していた。そうでなければ、いくら杏寿郎たちの役に立ちたいと主張するにしても命までは懸けないだろう。

鬼殺隊への入隊を阻止したところで、彼女はスパツと頭を切り替えて「剣士でなければいいですよねえ」と笑う。放っておけば隠になっていただろう。杏寿郎の伝手を使って蝶屋敷に出入りするようになり、彼への支援手段を医学に変えた。胡蝶姉妹と共に、町医者を相手にして勉強と実践を繰り返していたのは記憶に新しい。もちろん、「家を守ってくれ」という約束も果たすために日々あくせくと働いている。いったいいつ休んでいるのかと呆れたのは数度のことではなかった。

そこまでしてなぜ、こんなにも自分たちに尽くすのか。夕映が盲目的なまでに煉獄家を慕う気持ち杏寿郎にはわからない。杏寿郎はただ、夕映が自分の帰る場所で待っていてくれるだけで十分なのだ。愛しい女が安全な場所で自分の帰りを待っていること以上の幸福を、彼はうまく想像できない。

だというのに肝心の本人は杏寿郎に見合いを勧めてくるし、苦肉の策で家に縛りつけても杏寿郎のためを思って間接的に鬼殺に関わる。後者は献身的とも受け取れるが、前者は杏寿郎にとって夕映が自分と

結ばれることを一切考えていないという証左なので、毎度毎度腹の底が重たくなるばかりである。今日は改めて口に出されたので、ひっそり杏寿郎は落ち込んでいた。顔や態度には出ていなかったと思うけれども、堪えるものは堪える。

頭を悩ませる杏寿郎は預かり知らぬところだが、もし夕映がこの思考を聞いていたら、間違ひなく腹を抱えて笑っていた。

「あつはははは、ああおかしい。坊ちゃんが強きものの義務・天命と定めて弱く善良な衆生を守るために全力を尽くすように、私も煉獄家の皆様に尽くすことが使命だと思っただけですよ。だからいっただって全力です。そのために身に付けた技術で、他の人のことまで助けられるのは僥倖ですねえ。情けは人のためならずというのはこういうことかしら。え？ 違う？ ま、私のような目に遭う人々は少ないに越したことはありませんし。細かいことはいいじやありませんか、ねえ？」

と、まろい頬を林檎のように真っ赤にして、夕映はころころ笑っていただろう。とはいえ、これは杏寿郎が苦々しい胸の内を打ち明けた上で彼女に尋ねなければ、決して明らかにならないことであったが。結婚云々はそもそも女中の自分とお仕えする坊ちゃんが結ばれるということの小指の爪の先ほども考えたことがないので論外である。笑うしかないほど脈がない。死体も同然であった。

まったく、いつからこうなったのか。杏寿郎は、まどろみながら彼女がこの家にやってきた頃へ思いを馳せた。

夕映が四つ、杏寿郎が七つの頃。もう十年近く前のこと。

彼女は目の前で鬼に親を殺されて、楨寿郎によって煉獄家へ引き取られてきた。

「篤家はなんの変哲もない、平凡で平和で、その刺激のなさが退屈ともとられるような街で、細々と鍛冶屋を営みながら父、母、娘の三人で仲良く暮らしていた。特別金持ちというわけでも雨漏りのない家に住み、飢えることなく、金に困窮することもない。父の鉄郎は日々鍬や鍬を直し、破れ鍋をちよいちよいと直していた。母のあさ

はいつもおっとり微笑んでいる人で、しつけ以外では滅多に怒ることがなかった。その二人の間に生まれた夕映は赤い目をしていたから、火の神に祝福された灼眼の子だ、縁起がいいと喜ばれたものだ。

だから夕映は、自分の目の色を気に入っている。

「か——さま——！！ 今日るかおねえちゃんきてるって本当——!?」

ふわふわのくせ毛を振り乱し、ばたばたと着物の裾をはだけさせて、夕映はすぱんと障子戸を開けた。中には「あらあら」と小さく漏らした溜火が微笑んでいて、対照的に母は垂れた目を三角に吊り上げている。「あつ」と夕映は亀のように首を引つ込めたが、それよりも早く母の叱責が飛んできた。

「こらっ夕映！ またそんな大声を出して！ それに廊下を走るんじゃないませんよ。姉さんが来ているのが嬉しいのはわかるけれど、もっとお行儀よくなさい」

「ごめんなさいー！」

ぴしやりと叱られて、夕映は目に涙を溜めながら縮こまる。大好きなるかおねえちゃんの来訪が嬉しくって、はしやぎすぎた。乱れた裾をごまかすように整え、膝について静かに戸を閉める。手についていた土があちこちにくっついた。それにも気づかず、夕映は正座をして、しよん……と塩を振られた青菜のようにしよぼくれている。

乱れた髪を手櫛で整えてやりながら、溜火が笑みを浮かべたまま母に語り掛けた。切れ長の目は優しく細められている。頭を撫でられた夕映は顔を赤くした。

「まあまあ。あさ、夕映もまだ四つなのだからあまり厳しくしなくても。元気なのはよいことではありませんか」

「そんなこと言って、姉さんは杏寿郎ちゃんのことを厳しくしつけているでしょう」

「あの子は煉獄家の長男だもの。いずれ家を背負う以上、家の名に恥じない人間に育て上げなければなりません」

「うちの子だって長女よう！ 立派な大人になるよう育てたいのよう——！」

ふう！ と頬を膨らませる母は少女のようだ。姉のように慕う溜火を前にすると、どうしても妹としての振る舞いが抜けきらないらしい。一方で、その言葉は溜火には柳に風だった。うちはうち、よそはよそという言葉が言外に聞こえる。あしらわれたことがわかって、なおさら母はへそを曲げるわけだ。それなのに、ぽんと話題を変えると瞬く間に機嫌が転がっていくのだから、本当に二人は仲がいい。

かあさまこどもみたい。夕映は心の中でこっそり思いながら、口に両手を当ててくふくふ笑っていた。

母のあさには実の姉妹のように仲のいいはとこがいた。それが溜火だった。彼女らは頻繁に手紙を送り合っていたし、互いの結婚や妊娠の際は誰よりも喜び、励まし合っていたという。溜火は涼やかな目元が美しい人で、夕映のことも娘のようにかわいがってくれていた。彼女には息子が一人いて、娘はいなかったから、なおさらそうやって慈しんでくれていたのだろう。

夕映は彼女の息子に会ったことがないが、きつと溜火のようにぴんと背筋を伸ばして、芯が一本通っているしつかりした男の子なのだろう。溜火が嫁いだ煉獄家は剣術道場を営んでいるらしいから、剣が得意かもしれない。でもきつと、その男の子、きょうじゅうくんは裏の良太よりずっと紳士的で溜火に似た素敵な人に違いないのだ。裏の男の子は自分をいじめてくるので夕映は苦手だったが、大好きなおねえちゃんの子供がかっこよくないわけがないと彼女は信じ切っていた。

「あのねえ、るかおねえちゃん、きーてきーて。今日ね、ゆえね、きれいなおはな見つけてきたのよう。おねえちゃんとかあさまにあげる」「あらー！ ……根の土ごと持ってきたの？」

「おはなもちよんぎられるのは痛いとおもったの」

「まあまあ、優しい子に育ちましたね、あさ。夕映、ありがとう。手を洗っていらつしやい」

「あらまあ……あなた、よく見たら着物にも戸にも土がついてるじゃない……。でも、ありがとうねえ。姉さんが言う通り早く手を洗っておいでなさい、爪まできれいに洗うのよ。ちゃんと石鹸を使ってね」

「うふふ、はあい！」

「そういえば、お父様の分はないの？」

「とうさまはおはなより、丸くてつるつるの石の方がよろこぶのよう！ だからぴかぴかにみがいた石をあげるの」

林檎のように頬を赤く染めて、夕映は笑った。笑ったまま、楽しそうに、井戸の方へ駆けて行った。

夕映は父が大好きだった。母が大好きだった。溜火が大好きだった。いつまでも、夕映が大人になってもみんな一緒に笑い合っている、無邪気に信じていた。

「お嫁に行くときは私の婚礼衣装を使ってちょうだいね」と、頬を撫でてくれる溜火を前に目を細め、夕映の将来の夢には「お嫁さん」が輝いていて。その隣では「お父様が聞いたら想像して泣いてしまうから話してはダメよ」と、母の、よく働くせいで荒れた指がつんと夕映の額を弾いていた。父は寡黙で多くを語りはしなかったが、小さな夕映に恐々と伸ばされる手はいつも愛情であふれていた。彼の、皮が分厚くなった大きな手で頭をわしわしと撫でられるのが、夕映は一番安心する。

その幸せが、薄氷の上に作られたガラス細工だとは、知るはずもなかったのだ。

繊細で優美な芸術品は、呆気なく、儂く、粉々に砕けていった。

五月の終わり。夜だった。当時のことについて、夕映は記憶がすっぽりと抜けているせいで覚えていることが極端に少ない。

ただ、春先にしては夜が蒸し暑くて、寝苦しくて何度も寝返りを打っていた。子供だから眠くなるのが早くて、夕映は一人で布団に横になっていた。

うとうととまどろんでいたとき、誰かが家の前にやってきて。とん、とん、と。かあるく扉を叩いたから、母はご近所さんがいらっしやったのかしら？ 急ぎの用事？ と考えたのだろう。「はいはい」と返事をして、夕映の枕元から立ち上がり、玄関に向かった。

扉を開けてすぐに母は死んだ。首をポンと飛ばされて、胴体と泣き

別れになった。その脳はちぎれた身体から痛みを感じる暇もなかっただろう。驚きも苦痛もなく、人当たりのいい穏やかな笑みを浮かべたまま、母の頭は玄関に落つこちた。ぼんぼんと跳ねた頭は、きつと鞆のようだっただろう。

血の匂いに気づいた父は、不自然に途切れた妻の声と、次いで聞こえた物音にすぐさま異常を感じたようだった。夕映を家族全員分の掛け布団に埋めてから、仕事道具の槌を持って部屋を飛び出していった。

急に息苦しくなったから、夕映は短い悪夢を見た。溺れる夢だ。顔を川に突っ込まれて、がぼがぼと口から息を吐き出しながらもがく。頭を押さえつけられているせいで手足をどれだけ動かしてもまともな息が吸えない。次第に水は粘着性を増し、目や顔に張りつく。

ずる、ずる、ぺちやぺちや。ぼり、ぼり。ばきばき。めきめきめき。ぐちやぐちや！

異音。悲鳴。父が槌を振り下ろすときの音。濃厚な血の匂い。鉄臭くて、手や顔にべたべた張りつく赤い水。

布団を引きはがされ、はつと目覚めた夕映の目の前にいたのは、口を真っ赤に染めて血を滴らせた大きな牙。そして、その牙の持ち主めがけて振るわれた真紅の太刀筋だった。

びしやりと、顔に、髪に血がかかる。首を落とされたそれはなにか、ぎやあぎやあとわめいていたが、夕映はその音をきっちり言語だと認識することができなかった。

痙攣したように目がぐるぐると回る。

父は？ 母は？ 二人はどこへ行った。なにが起きた。どこまでが夢でどこからが現実だ。顔をぬぐうこともできずに布団から這い出し、燃えるように赤い刀を持つ男から逃げる。鉄さびの匂いが強い。転んで膝を擦りむいたときの比ではない。顔にかかった水がべたついて鬱陶しい。いろいろな非日常が重なって、すっかり夕映は混乱していた。父と母さえいつも通りなら、二人でぎゅっと抱きしめてくれたら、ああ、自分は悪い夢を見ただけなのだと言き出すこともできただろう。

蹴破られた障子戸。一層濃くなる匂い。膝に力が入らない。濃すぎる匂いで頭がくらくらする。

悪い予感ばかりが頭を支配する。

赤ん坊に戻ったかのように腕だけで這って、闇夜にじつと目を凝らす。そこに二人がいると信じて。

「見るな」

不意に足が床から浮いた。夕映は目を剥いて、ばたばたと手足を動かす。しかしその抵抗は抵抗らしいものにもならなかった。脇に差し込まれた手のひら二つがぐるりと夕映を反転させ、尻が木の幹のようにたくましい腕に乗せられる。手拭いでごしごしと遠慮なく顔を拭かれ、「うぶ」だの「やえて」だの抗議をしたが、手は止まらなかった。頬がひりひりする。

そのまま、頭に布をかぶせられて、男の胸元に顔を押しつけられる。男はこのまま夕映をどこかに連れて行こうとしているらしい。我慢しきれず、全力で手足を動かしながら夕映は叫んだ。

「はなして！　とうさまとかあさまは!?　どこにいるの……!?　どうしてへんじをしてくれないの!?!」

腹を蹴ったし、ぼかぼかと肩を殴った。男の体幹はびくともしない。ますます夕映は泣きそうになった。

この男はきつと人攫いだ。夜中に人の家に入り込んで、子供の自分を攫おうとしている。このままだと自分はどこかに売られてしまう。父と母は無事なのか。血の匂いだけが濃い。自分と男以外に生きているものの気配がしない。呼吸の音すら聞こえない。

夕映を運ぶ男の足音だけが夜に響く。耐え切れないほど恐ろしく、血を吐くように夕映は絶叫する。

「たすけて！　だれか！　はなして!!　るかおねえちゃん、るかおねえちゃん!!」

誰も来てくれない。これだけ叫んでいるのに、近所の人すら来てくれない。縫れるのはもはや大好きなおねえちゃんだけだった。

錯乱しきった夕映はぼろぼろと涙を流しながら溜火の名前を呼ぶ。力の限り暴れても男にはまったく効いていない。それがますます夕



映の精神を追いつめる。しかし、子供の体力はあつという間に使い果たされ、すすり泣くことしかできなくなったのはすぐだった。

そこで、ようやく男が口を開いた。

「夕映、だったな。篝鉄郎と篝あさの娘の」

「……………」

「俺はまだ君に顔を見せることはできない。子供に見せるものではない光景が広がっている。君の精神衛生に関わるくらいの、ひどい光景だ」

「とうさまと、かあさまは……………」

「…………。二人は死んだ。彼らを殺したものを、俺が殺した」

「しぬ？ しぬって、なに？ もう、あえない？」

「そうだ。——すまない。俺がもっと早く着いていれば、こんなことにはならなかったかもしれない」

苦渋に満ちた声が頭の上から聞こえた。夕映は、見えもしない男の顔を見ようと顔を上げた。ぎゅつと痛いくらい抱きしめられる。ぎりり、と歯ぎしりの音。

「妻の親類をみすみす殺されるとは。屈辱だ…………！」

妻。親類。るかおねえちゃん。煉獄家。剣術道場をしている。きょうじゅろうくん。

ぱちり、となにかが噛み合った。確信を持って、夕映は尋ねる。鼻をすすりながらも、不思議と自分が冷静さを取り戻しているのがわかった。

「るかおねえちゃんの、だんなさん？ きょうじゅろうくんの、おとうさん？」

「——ああ。俺は煉獄槇寿郎。瑠火の夫で、杏寿郎の父だ。君を助けにきた。…………今はおやすみ」

締めつけるようだった腕の力が緩み、今度は優しく抱きしめられる。背中をさする手は、夕映の父そっくりだった。泣いて暴れていただけの疲れがどつと身体を襲い、寝ぼけ眼はとろとろと落ちていく。押しつけようと力を込めていた両手はだらりと落ち、たくましい胸板にもたれかかる。そのまま、彼女の意識は夢の底へと落ちていった。

規則正しい寝息を立てるようになった幼い頭をもう一度撫で、榎寿郎は月を見上げる。

憎たらしいほどに丸く、明るい満月だった。人々は今夜起きた惨劇に気づかぬまま、この月を見て幸せな気持ちに浸っているのだろう。

あさと鉄郎の遺体は、これから隠たちによって隠蔽される。夕映の行方も同じように隠される。一家は忽然と姿を消すだろう。一晩のうち。

(この娘が鬼を見てしまった以上、鬼殺隊の監視下に置いた方がいい。それはわかっている。しかし、これでは人攫いさながらだ、まったく笑えない)

苦々しい気持ちを抱きながら、榎寿郎は眠ったことで少し重みを増した少女を抱え直す。

「——うちに来なさい、夕映。君がどんな選択をしても、俺は君を尊重しよう」

無力を噛みしめながら吐き出された宣誓を、月と、榎寿郎の鎧鴉だけが聞いていた。

夜は更ける。無慈悲な朝は平等にやってくる。

## 幼少期2 約束

あれだけ明るい月光が差していた空は、時間が経つにつれて次第に霞がかり、夜明けが近い頃には薄い雲が一面を覆っていた。

柱の警備区域の範囲は広い。そのため、榎寿郎は一時的に夕映を近くにいた隠に預け、夜通し鬼殺を続けた。太陽が雲の向こうから薄い日差しを覗かせると同時に、彼は再び少女を懐に抱いたのである。

「ぐっすり眠っていましたよ。濡らした手拭いでふいてやりましたが、髪はいくらか固まってしまったようで」

「そうか……。帰ったら妻に整えさせる。君、ありがとう。助かった」「いえいえ！ 炎さんもお気をつけてお帰りください」

頭を下げる隠に手を振り、榎寿郎は歩き出した。

空気はじつとりと湿り、肌と髪にまとわりつく湿気が、雨雲が近づいていることを知らせてくれる。濃い土の匂いが鼻をくすぐる。

煉獄邸からの箒家の距離は、子連れではいささか厳しいが、溜火が頻繁に通う通り女性でも難なく行き来できるぐらい。大人の男——それも、極限まで鍛え上げられた柱であれば息を切らすことなく走っていける。なんなら足音を立てずに全速力で走って往復もできる。

「ん……おいちゃ……？」

「もう少し眠っていなさい」

一度開きかけた瞼をその手のひらで覆ってやり、数時間前と同じように彼女の顔を自分の胸にもたれかけさせる。夕映は少しむずがって、額をぐりぐりと押しつけていたが、すぐに健やかな寝息を立て始めた。杏寿郎もこれくらいの年頃のときはこうだったな、とうっすら口許に笑みを浮かべ、榎寿郎は夕映を抱え直す。家までもう少しだ。揺らして起こさないよう気を遣いながら、歩き出した。

夕映を保護したあと、すぐに鴉を家に飛ばした。溜火にはもう連絡が行っているだろう。妹のようにかわいがっていたはとこ夫婦がむごたらしく殺されたと聞いては冷静でいられない。せめて、彼女らの形見であるこの娘を早く届けてやらねば。榎寿郎はできる限りの早足で家路を急いだ。

ごろごろと雷が遠くで鳴っている。

煉獄邸の門前で、溜火は夫と、妹分の一人娘を待っていた。鴉が知らせを持ってきたあとは一睡もすることができず、今も、夜明けまで夫は帰ってこないとわかっているのに落ち着かなくて、寝巻に羽織りものだけをして門の前に立っている。震える手を何度も握り込んだ。顔は強張りきって、あまりの硬さに面を張りつけているのかと錯覚してしまうほど。

溜火の足元で、榎寿郎の鎧鴉もそわそわと跳ねている。彼が帰還を伝えてくれたから、もうすぐ着くはずなのだが……。胸の底から湧いてくる不安を振り払うように、溜火はかぶりを振った。

今にも泣き出しそうだった空が、とうとう涙をこぼし始める。ぽつり、ぽつりと地面に点ができ、空気の重さが増していく。傘を取りに行くこともできず、溜火はじつと前を見たまま立ち尽くしていた。

次第に雨は勢いを増していく。

「榎寿郎様！」

遠目でもわかる、炎を模した赤い羽織が目に入った瞬間はつとして、溜火は駆け出す。雨が降っていることを気にかける余裕もない。もつれるように走ってくる溜火を見てか、榎寿郎は足を速めてすぐに溜火の前に表れた。

「あさは、鉄郎さんは」とこぼれ出てきそうな無為な問いを、ぐつと口をつぐむことで押し殺す。

榎寿郎は幼い子供を抱いていた。見覚えのある子供だ。よく知っている子だ。つい先日、彼らの家に行つて、根と土のついた花を溜火にくれた女の子だ。彼女が生まれたときの頃から、溜火は彼女を知っている。

震えが止まらない指先で、彼の懷に抱かれた子供へ手を伸ばした。

くせのついた長い髪は血がこびりついてあちこち固まっているし、着物は赤黒く染まっていけない場所を探す方が難しい。染め上げられた衣とは裏腹に、いつも子供らしく赤い頬からは血の気が抜けて青白い。その柔らかな頬に触れて、あたたかさを感じることで、ようやく彼女がまだ生きていることを実感できた。

気づけば奪うように榎寿郎から夕映を取り上げて、胸に掻き抱いていた。目の奥がかつと熱くなる。ぼろぼろと涙があとからあとからあふれて、雨粒と混ざる。嗚咽が喉を焼くようだった。もはや頬を濡らしているそれが涙なのか、雨なのか、この場にいる人間には誰にもわからないだろう。

雨がひどくなる。ざあ、ざあと吹きつけるような風と共に、空から叩きつけられる水の勢いがさらに増す。

たまらず榎寿郎は妻の肩を抱いた。

「溜火、ここについては身体が冷える。中に入ろう」

「ええ、ええ……」

慟哭を宥めようとしているのだろう。何度も深呼吸を繰り返し、二度三度目尻を拭う。最後にひととき大きな息を吐いたあと、溜火は榎寿郎の目をはつきり見つめ返した。

「湯を沸かしてあります。榎寿郎様も汗を流して、身体を休めてください。本日もお務めお疲れ様でした。無事のお帰りを、嬉しく思います」

「ああ、ありがとう」

呼吸を整えて顔を上げた溜火は、いつも通り凜としたたずまいを取り戻していた。その目は痛々しく赤色に染まっていたが、榎寿郎は内心ほっと胸を撫で下ろす。そのまま、二人は夕映を連れて屋内に消えていった。雨は激しくなるばかり。太陽が大地を照らすのはもう少し先のことだろう。

ここまで取り乱す溜火を榎寿郎が見たのは、今日が初めてのことだった。二人は連れ合つてそれなりの年数を経ているけれども、彼女はいつとも冷静かつ気丈で、よく榎寿郎を支えてくれていた。杏寿郎を産んでからも、子育てで頭を悩ませることは何度かあれど、涙を流す顔など一度も見たことがなかったのだ。

榎寿郎とて、溜火が懇意にしているはとこ夫妻が鬼に殺されたと聞けば彼女も普段の冷静さを保てまいとは思っていたが、いざ泣き崩れ嘆きをあらわにする溜火を前にするとその予想がどれだけ浅はか

だったのかを痛感したか！

この世の大多数の人間は、親しい人間を亡くすとしたらその原因は老衰、病氣、不幸な事故のいずれかである。他人から殺されるとか、鬼に殺されて遺体を食い散らかされる死に方は全体から見れば少数なのだ。溜火も今までは大多数の側だった。鬼狩りの家に嫁いでも、奇跡的に親しい人間を食われたことはなかった。

しかしそれも昨夜までのことだ。溜火は大切な妹分とその夫を失い、夕映は両親を失った。二人は、当たり前前に明日のことを信じられた昨日から、理不尽はいつ大切なものを奪うかわからない今日へと、境界を越えてしまった。

ああ、と榎寿郎は嘆きの吐息を口の端からこぼす。

こんな思いをする人間が一人でも減れば、と願いを抱いて刃を振るい続けているというのに、よもや己が間に合わなかったせいで妻があらんな顔をする羽目になるとは。これもまた己の不徳の致すところ。より一層修行に励み、より多くの鬼を殺さなければ。

榎寿郎は固く誓う。いくら強くなっても、すべての人を守るなどという大言壮語は口が裂けようが言えまい。けれど、手中に収めた宝だけはなんとしてでも守ってみせなければ、なんのために身につけた強さだ？ その瞬間が来たとき、榎寿郎が積み上げてきたすべてが榎寿郎に牙を剥き、自分は自分でいられなくなるだろう。しっかりと二本の足で立ち上がることが、できなくなるだろう。不思議とそういった確信があった。だから榎寿郎は今よりももっと強くならなければならない。守るべきものを守り、決して後悔しないために。

この手がどんなにちっぽけだろうと、大切に握りしめた宝玉だけは、砂のようにこぼれ落ちていってくれるな。榎寿郎はそう願うばかりだ。そのために、さらなる強さへ手を伸ばす。

煉獄邸の敷居を跨いでから三日間、夕映は懇々と眠り続けた。溜火が風呂に入れても、返り血で固まった髪を切って整えても、両親から事情を説明された煉獄家長男・杏寿郎が足繁く様子を確認しに部屋に顔を出しても、あさと鉄郎のひっそりとした葬式が終わっても、目を覚まさなかった。終いには熱を出してうなされたものだから慌

てて医者を呼ぶ始末。医者 of 診断は「心因性のもの」ということで、大した薬ももらえず溜火が夜通し側についていた。

そして四日目。とうとう彼女は目を覚ましたが、すっかり元の活発さを失っていた。

近頃、杏寿郎は一人の時間が増えていた。

朝家族揃って食事をしたあと学校へ行き、昼から夕方にかけて父から稽古を受ける。夕食をとったあとに父を見送り、母の仕事をいくらか手伝う。湯を浴びる前に少し自主修行をして、ほどよい疲れを感じる頃に就寝……という生活は、大半が変わっていない。

変わったのは、篝夕映という母方筋の少女がこの家に来たから、彼女に関わる部分だけだ。母と過ごす時間は確実に減ったし、ひとつ習慣が追加された。

「おはよう！ 夕映、朝だぞ！ 起きているか!？」

そして杏寿郎は、それにほんの少しだけ、ささやかな不満を抱いている。いけないことだと、わかっているけれど。

問答無用でスパンと障子戸を開けると、布団の上に座り込んでいた少女の顔がのろのろとこちらを向いた。くせのついた黒髪はぼさぼさ。赤い瞳は光を失って久しく、返事をしないのもいつものことだ。彼女は部屋の外から声をかけたところで部屋から出てこないし、声を発することもしない。だから杏寿郎は兄弟でもない異性の部屋にずかずかと上がりこみ、自分のことはほとんど自分でできるはずだった四つの子の着替えも手伝う。本当は母の溜火がやった方がいいのだが、彼女は楨寿郎の妻であり杏寿郎の母である以上、家のことを取り仕切らなければならぬ。ただでさえ朝はやることが多いのだ。夕映一人のために母の負担を増やすのは、杏寿郎は嫌だと思った。ただでさえ日中の夕映は母にべったり張りつくように側にいる。真実母がとられてしまうのではと思ったのは、本当にちよつぴりだけである。本当に本当だ。

そういうわけで杏寿郎は夕映の世話を買って出ている。

ところどころざんばらになった髪を櫛で梳いてやり、立たせてぱつぱと寝間着から着替えさせたら、布団を畳む。今まで自分より年下の

人間を世話したことの中かつた杏寿郎がここまでできるようになったのは、ここ二週間ほどのことだ。生まれたときから妹がいる兄には到底敵うまいが、自分でもそれなりに夕映の世話が上手くなったという自負がある。

「さあ、朝食を食べにいこう！」

自分より一回り小さな手をぎゅっと握り、部屋を出る。

母が言うには、夕映は元気で活発、少しお転婆な、愛されて育ったのならどこにでもいるような、そんな子だったそうだ。摘まれる花が痛いだろうと、根と土ごと花を持ってくるような、優しい子だったと。

それがたつた一晩で反転するように変貌したというのだから、なんて哀れな子だろうかと、杏寿郎は嘆息を禁じ得ない。そして父が自分に言い含めたように、彼女のような悲しい存在をできるだけ生み出さないよう、強くなって鬼を狩らなければと心が掻き立てられるのだ。それが、自分がこの家に生まれてきたために発生する使命だと、杏寿郎は考える。

杏寿郎がそう思っている間にも、夕映は「立て」と言えば立ち、「座れ」と言えば座るだけ。自分の意志というものをすっかり忘れ去ってしまっている。一番困るのは彼女が一切しゃべらないことだ。今の夕映は首を振ってはい、いいえの返事をするこゝとさえできない。声をかけたときに音のした方向を見るようになったのも、目覚めて四日経ってからようやく。しつこくそう教えてやらなければ、夕映はそれができなかつた。

それまでの三日間は本当に、ただ生きているだけの屍のようで、おぞましかつた。「赤ん坊よりひどい」とは再び夕映を診た医者のお談である。赤ん坊ならば本能に基づいて不快を泣いて伝えてくれるから、親が気付けば餓死をすることはないし、排泄の世話が必要なきもわかる。最初の頃、夕映はその最低限さえできなかった。腹が減つても意思表示をしないから、いつまでたつても食することはないし、食べないから排泄の必要もない。起きていても寝ていてもずっと布団の上に横たわっているだけで、ぴくりとも動かない。

実のところ杏寿郎は、夕映が昏睡して生死の淵をさまよっている間



よりもずっと、この頃が怖くて仕方がなかった。本当にこれは自分と同じ人間なのか？ と、根源的な恐怖が、彼女を視界に入れるたびにぞわぞわと全身を駆け巡ったのである。

悪夢のような三日間の最中、彼女は口に差し込まれた水差しから生命を繋ぎとめられるだけの水しか身体に取り込まず、目を開けているときはまばたきのひとつさえしなかった。

瑠火はいつ夕映まで死んでしまうかと常に空気を張り詰めさせて戦々恐々としていたし、杏寿郎は夕映の人智を超越した姿に怯え、楨寿郎は妻と息子、そして少女の様子を心配していたがその間にも鬼殺の任務にかなければならず、家の中の空気は最悪だった。たった一人の少女によって、煉獄家は混沌の坩堝に叩き込まれたのである。

三日。数えれば片手で足りる、ごく短い期間。けれど、杏寿郎は余裕のない母を見たのが初めてであったし、心が折れた人間を見たのもまた初めてのことであった。このまま、夕映がひっそりと息を引き取るまで、嫌な時間が永遠と続くのではと背筋が冷える未来を想像してしまっても已むを得まい。この悪い夢がずっと続いてしまうくらいなら、特に思い入れのない少女一人。夕映が死んでしまった方がまだましだ。ふと魔が差して、杏寿郎はそんなことを思った。

あとからその思考がどれだけ人でなしであったかを思い返すと、顔から火が出そうになる。なんてひどいことを自分は考えたのだろうか。自分自身が恐ろしくて、たまらなくなつて、杏寿郎は父にこれを打ち明けたとき、ひつくひつくと泣きじやくっていた。そんな息子を楨寿郎はぎゆうと抱きしめ、「お前には酷なことをした」と謝るものだから、「どうして父上が謝るのですか、俺の心が弱いからいけないのです、でなければこんなおぞましいことを考えるはずがないのです、煉獄家の子失格です」と言い連ね、ますます泣いた。

だってこれはあまりにも正しくない。杏寿郎はひどく自分を責めた。

「そうだな、正しくない」

父は身体を離して頷いた。けれども父は言うのだ。それは特段珍しいことではないのだと。

「人の心は弱い、追い詰められればすぐに簡単に残酷な方へ思考が転ぶ。どれだけ鍛えようと、時間を重ねようと、それは決して変わらな  
い。だから人は己を律して、正しくあろうと自覚的でならなければなら  
ない」

楨寿郎は杏寿郎の涙を指の腹で掬い、己と同じように広くて丸い額  
を優しく撫でる。

「お前は夕映の存在を疎むことを『正しくない』と判断できた。なお  
かつ己を恥じて責めている。だからまだ大丈夫だ。なにかを間違え  
たと思ったとき、大事なものは己を省みたあと、次にどうするか考える  
こと。夕映のことは、夕映の生きる力を信じるしかない。だがあの子  
を手助けすることは杏寿郎にもできるぞ！ 心が恐怖で怯え固まっ  
てしまったあの子に、ここは安全で優しいところだと教えてやればい  
い。あの子はかわいそうだからと憐れむのではなく、隣人を愛しな  
さい。どんなにみじめでも、悔しくても、恐ろしくても。生きている限  
り人は生きていくしかない。夕映も、心の奥底ではわかっているはず  
だ。それを受け止めきれないから、ああしてうずくまってしまってい  
るだけで。——大丈夫！ 直に夕映も元気になる！ 俺は信じてい  
る！」

楨寿郎は、父は、太陽のようになっこり笑った。杏寿郎は、父がそ  
う言うのなら、もう少し夕映のことを信じて、歩み寄ろうと思った。  
父はいつも自分に正しい方向を教えてくれる。だから今度もそうだ  
と思ったのだ。それに、自分が夕映を手助けしてやれば母の心労もい  
くらか軽減されるに違いない。杏寿郎は気合を入れて、「はい！」と  
元気よく返事をした。

（でも、きつと、俺は死ぬまであるとき思ったことを忘れはしないのだ  
ろうなあ）

夕映の手を引きながら、杏寿郎は朝の陽射しに目を細めた。

それからまた一週間経った。夕映は以前と比べて意思表示ができ  
るようになり、今まで一言もしゃべらなかつたせいでかすれきつた声  
だったけれど、簡単な受け答えをできるようになるまで回復した。食

事も自発的に食べるようになり、排泄も一人で行える。ようやっと、肉を持つ人形から幼児返りした子供まで進化した、と言えるだろう。地道に回復していく夕映によって、彼女を見守る煉獄家の面々の張りつめていた空気も少しずつ緩んでいった。それでも未だ彼女の目は無感動なままでも映し出さないし、放っておくとぼんやりしたまま転がっているのだが。

日中、杏寿郎が小学校に行っている間は溜火が夕映についている。今は願掛けを兼ねて、溜火は写経をしているそう。夕映には手習いを教えているとか。溜火が家事をしている時間だけはつきつきりで見ていることができないため、夕映はもっぱら縁側でぼうつと日光を浴びている。杏寿郎が出ていったときとまったく変わらない位置でぼうつとしているのを目撃したときは、びっくりして毛を逆立てる猫のように飛び上がったしまった。あれは心臓に悪い。ぴくりともしない彼女は、最初よりずいぶん回復して、確かに生きているのに、それに反してあの悪夢のような三日間を思い出させる姿と重なり、どうしても気味が悪かった。

「ただいま帰りました！」

ひよこつと母の部屋へ顔を出すと、溜火が面差しを和らげて「おかえりなさい」と返事をくれる。夕映は溜火の近くに座っており、杏寿郎の方向を見て、じいと彼の顔を見つめていた。それに近づいて、わしわしと頭を撫でる。

「夕映も、ただいま！」

抵抗も反応もしないせいで、力の入っていない首ががくがくと揺れる。ただ、垂れ気味の眼窩に収まった赤い目が、にこやかに笑う杏寿郎を映していた。気が済むまでわしわしと彼女の丸い頭を撫で回して、うむ！ と頷いてから、杏寿郎は「では稽古に行つて参ります！」と部屋を出ていった。

この三週間、ずっと続いているやりとりだ。溜火は二人の様子を見守りながら、ふふと小さな笑みをこぼす。夕映の頭は好き勝手撫で回されて鳥の巣のようになってしまっていた。整えてやらなくては、と

瑠火は腰を浮かせて手を伸ばす。正確には、伸ばそうとして、止めた。瑠火が近寄るより先に夕映が動いていた。ゆつくりと、膝で瑠火ににじり寄り、ちよんと彼女の袖をつまんで、頭を胸元にくっつけたのだ。甘えるようなそぶりだった。かつて彼女が母親にそうしていたように。

「夕映——」

呆然。そうとしか形容しがたい声が己の喉から出る。名前に反応して、夕映は瑠火の顔を見上げた。その目には、この家に連れてこられたときから変わらず光はなかったが、しっかりと瑠火の顔を映し出していた。

言葉にならない感情が胸の内からあふれ出て、瑠火は夕映を引き寄せ、ぎゆうつと強く抱きしめる。腕の中の身体はあたたかくて、また泣いてしまいそうだった。すり、と己の胸に額をすり寄せた彼女は、夢見心地のような現実感のない顔をしていて、その唇がわななくように動く。

「おねえちゃ」

かすれた小さな声は、聞き間違いだと言われてしまえばそれまでだったが、しっかりと瑠火の鼓膜を揺らした。瑠火はますます腕の力を強めた。唇を強く引き結ぶ。優しく聞こえるよう、目いっぱい気を張りながら、瑠火は声を発した。

「ええ、瑠火お姉ちゃんですよ。少しずつ、少しずついいですからね。あなたのことは、絶対に守ってみせますからね」

よくわからない、と言いたげに夕映は眉をひそめた。その表情のなんと人間らしいことか！ 気を抜けば緩みそうになる涙腺を必死に引き締めながら、瑠火は夕映の顔に頬ずりをする。絶望一色に染め上げられたあのときとは違う涙だとわかっていても、子供を不安にさせては敵わない。そう何度も泣くのははばかりられる。母とは家庭の太陽なのだから、できる限り澁刺とした笑顔を湛えていなくては。そう思っ、瑠火は涙を呑んだ。

雨の気配は遠い。庭に、燦々と日が差して、小鳥たちがピイチイと戯れている。部屋の外から、杏寿郎が指導を受ける声が聞こえる。

やっと日常が日常らしい姿を得た。指通りのよいふわふわの髪を梳くように撫でながら、溜火は神仏に感謝した。

「よく頑張りました……本当によく頑張りましたね、夕映……」

「おねえちゃ？」

「はい、はい、ここにいますよ。ここにいます……」

その日の夕飯時に、夕映が感情と言葉を取り戻そうとしていることは一家に共有された。それからもう、杏寿郎が躍起になって自分の名前を呼ばせようとしているし、槇寿郎が午睡に夕映を抱えていくこともちらほら見受けられる。抱き枕かつ湯たんぽにちようどいいそ  
うだ。

夕映自身、何事にもまったく興味を示さず死んだように眠るかぼんやりしているかだった状態から一転、周囲へ興味を示すようになり、大きく変化した。手習いで書く文字にも感情や個性が見て取れるようになった。人間性というものを着々と再獲得していつているのが見て取れる。元の彼女に戻るまであと少しだろう。

そうしたら、彼女の意識がはつきりして、きちんと彼女の意志で選  
択できるまで回復したら、このままこの家の一員となるかを尋ねたい。溜火はそう考えている。

それにしても、杏寿郎の構いようはことさらすごかった。もう彼女は一人で難なく着替えをできるくらいに回復したというのに、彼が家にいて、予定がない時間は、ほとんどつきつきりで甲斐甲斐しく世話を焼いている。朝は起こしに行き、夜は布団に入るのを見守ってから自身も眠りにつくというありさまだ。その上稽古の様子も近くで見させている。暇さえあれば家の中を連れ回しているようで、この間は屋敷全部を使って隠れ鬼をしていた。

初日はいきなり担ぎ込まれた見知らぬ少女に目を白黒させて戸惑っていたというのに、今やすっかりよき兄そのもので、一人息子で上げ膳据え膳だった状態から目立った不平不満も漏らさずに、よくひどい状況だった夕映へ接してくれたものだ。溜火と槇寿郎は息子の姿勢に大変感服し、たいそう褒めた。

もちろん、楨寿郎だけは打ち明けられた彼の苦しみを知っているけれど。内緒話で「父上が隣人を愛せよとおっしゃったので、夕映のこゝとをたくさん知ったら好きになれるかもと思ったのです」とはにかなだ息子はとてもいとおしかった。これならば二人目が産まれてもなんの問題もなく家族は続いていくのだろう。夫婦は同じ感慨を味わい、こつそり二人で頷いた。

今日も今日とて、小学校から帰ってきた杏寿郎が夕映の手を引いて連れ回している。

「見ろ、夕映！ 昨日までつぼみだったしろつめくさが咲いているぞ！」

屋敷の裏のところではつととなった杏寿郎がてつと走り出したかと思うと、ぱつとしゃがみこんでそれを指差した。夕映はなんとか転ばずに済んだ。同じように杏寿郎の隣でしゃがみこみ、花と杏寿郎の顔を交互に視線が行き来する。

「おはな」

「そうだお花だ！ 整えられた庭もいいが、こういう野の花も素朴でいい！ かわいらしいな！ そうだ、俺がもつと幼い頃母上に習ったのだが」

すつと彼の手がしろつめくさの莖に向かったので、夕映はそれを凝視していた。

「……ちよんぎつちやう？」

小さな口が吐息のように小さく呟いた。その声がかすかに震えていて、杏寿郎はぴくつと手を止める。夕映の顔を見ると、ちよつと、本当にちよつとだけ、眉間に皺が寄っていて、眉が力なく下がっていた。

「む？ ……ああ！ 花も切られるのは痛いという話だな！ ううむしかし、これをやるには根は邪魔になるからなあ」

うーむ、と顎に手を当て、杏寿郎のぎよろりとした目が中空をさまよう。夕映は彼に倣って空を見た。雲が流れ、鳥が左から右へと横切っていく。杏寿郎が黙るととても静かになる。けれど、彼はすくぽんと手を打ち、夕映へ快活に笑いかけた。

「よし、ぐめんなさいをしよう！」

鳩が豆鉄砲を食ったようにきよとまばたきをする夕映を尻目に、杏寿郎は花に向き直った。そのまま、土に手をつけて花に語り始める。

「お花殿！ 君には痛いことをするが、どうか許していただきたい！ 君を使って夕映に作ってやりたいものがあるんだ！ ……これはどうだろうか」

「……。ゆるしてくれるかなあ」

花に向いていた顔が夕映へ向けられる。彼女は相変わらず不安げに瞳を揺らしていたが、杏寿郎が「大丈夫だ！ 誠意を込めて謝ればきつとお花殿も許してくれる！ 俺を信じて！」と背中を叩いたので、数秒逡巡してから夕映はそろりと頷いた。

これだけ自信たっぷりと言われると否が応でも頷かされてしまう。杏寿郎のほとぼしる熱意で説得されて反論を述べられる、もしくは提案を断ることができる人間は存在するのだろうか？ 上手く言葉が出てこない頭でも、夕映の感覚は杏寿郎の勢いに押されている自分をしっかりと把握していた。

竹刀だこだらけで硬く、夕映よりも一回り大きな手のひらがそつとしろつめくさに添えられ、親指と人差し指が茎を挟んだ。ぷつりと爪が食い込み、呆気なく根と茎が離れる。先ほどまで裏庭の片隅に根差していた一輪の花は、あっという間に摘み取られて杏寿郎の手に収まっていった。

夕映の赤い目は、吸い寄せられるようにそれを見ていた。彼が花を手折る姿。それに釘付けになって、まばたきもせずに見つめていた。

夕映が彼の横顔を見つめたままぼうつと呆けている間にも、杏寿郎は「ここをこうして……こうだったかな？」と呟きながら、なにやら手をもにもよもによ動かして、花の茎を曲げたり輪を作ったりしている。作ってやりたいものがある、とは言っていたが、なにを作っているのだろうか。夕映は杏寿郎をじいっと見ながら、胡乱げに首をかきげる。

彼女は野の花で遊ぶということをしたことがない。母と一緒に遊

ぶのは部屋遊びが多かった。おはじきやお手玉、手遊びはよくやったけれど、今の杏寿郎がしているような遊びは終ぞしないままだった。

真剣に指先を動かしていた杏寿郎の表情がぱつと輝く。どうやらうまく事が運んだらしい。にこにこ笑いながら夕映の方を見て、視線がぱちつとかち合った。杏寿郎が一瞬ぎよつと目を剥く。ずつと凝視されているとは思っていなかったようだ。彼の笑みの種類が苦笑いに変わった。

「ほら、できた。手を出すといい」

夕映の返事を聞く前に杏寿郎が左手を引つ張り上げる。彼女は流されるままに従った。杏寿郎が自分にひどいことをしないということとは、初めて会った日からわかっていた。

煉獄家の人々は太陽のようだった。彼らが笑っているのを見ると、夕映の胸は、ぽつと火が灯るようにあたたかくなる。ぎゅつと抱きしめてもらったり、手を握ってもらえたりすると、彼らのやさしい体温が夕映にも移る。夕映を信じて見守ってくれる姿は植物を育てる日の光そのものだ。

今も、杏寿郎に握られた手があたたかい。その熱が心地よくて夕映は目を細めた。そして、彼の手から夕映の指に、彼が作ってくれた「いいもの」が通された。

「うん、我ながらうまくできたな！」

杏寿郎が夕映から手を離し、腕を組んでうんうん頷いている。あっさり離れてしまった体温を名残惜しく思いつつ、夕映は己の指先を見た。

「ゆびわ……?」

左手の人差し指の根元。そこにしろつめくさの花が咲いていた。ぱちりぱちりと夕映はまばたきを繰り返す。手の角度を変えてみたり、顔に近づけてみたり、遠ざけてみたり。太陽に透かしてみたりして、何度も何度もそれを確かめている。

黙ったままその動作を行うものだから、次第に杏寿郎の自信満々だった顔が怪訝なものへと変わり、少しずつ眉が下がっていった。「嬉しくなかったか？」



眩くような弱々しい声にはつとした。杏寿郎の明るい顔が曇るのは嫌だ。その気持ちだけはすぐさま頭に浮かんで、否定しなければと彼女は焦る。もつれる舌。それでも、夕映は小さいながらも声を張った。

「う、うれしい！　ありがとう！」

瞬間、顔が歪む。大声を出し慣れていない喉は適切な音量というものを覚えていない。喉がカツと熱くなってかゆくなる。俯いて、数回咳き込んだ。杏寿郎が慌てて背をさすってくれる。

背中に触れた手のひらから伝わる熱は、どうしていつも、泣きそうになるくらいあたたかいのだろうか。

「嬉しい」がどういう感情だったか、まだ夕映には思い出せていない。でも、それがほわほわしたあたたかい気持ちの名前だとするのなら、きつと今、自分は「嬉しい」のだ。杏寿郎が夕映の心を尊重したうえで、手ずからこの花の指輪を作って、自分に与えてくれたことが「嬉しい」。杏寿郎たちが笑っているのを見ると「嬉しい」。抱きしめてもらえたときのこと。手を繋ぐことも。全部全部、きつと、「嬉しい」だけで表せる。この家は喜びと優しさでいっぱいだ。極楽のようだった。

言葉で定義することで、より心の動きを実感する。それは世界が急に色鮮やかに見えるような、鮮烈な体験だった。

叶うならこの瞬間を引きのばして永遠にしたいくらいなのに、時間というものはままならない。この指輪もいずれ花がしおれ、茎は腐り溶けていくだろう。記憶だって。どれだけ網膜に、耳に色と音を焼きつけたって忘れてしまう。

「うう……」

それがどうしても悲しかった。切なかった。

「ややつ!?!　どうした夕映！　なにが悲しい!?!　やはりさっきのは嘘で本当は嫌だったのか!?!」

「ちが、ちがうう……」

感情が入るいれものがいっぱいになって、決壊する。泣くのは弱い証拠で、疲れるから嫌いなのに、一度あふれた涙はそう簡単に止まっ

てくれない。それがますます嫌で、自分が嫌いになる。

目を何度もこすっていると、杏寿郎にがっつと両腕をつかまれ、動きを封じられた。「こすると腫れるからな！」とのことらしい。でも、これで流れる涙を外から無理矢理落ち着けるのが余計難しくなった。また感情に波が立つ。涙が頬を濡らす。杏寿郎が見ている。夕映の唇から、また、うう……とうめきが漏れた。

「せ、かく、くれたツ、のにい、なくな、ちやう、し、ひぐ……わすれ、ちやう、から……やあ、で……！」

鼻をすする。目が溶けそう。涙が流れ落ちていった頬がかゆい。今すぐ顔をこすりたい。それなのに杏寿郎の腕の力が強い。視線が熱い。そんなに見つめられては、身体が燃えてしまう！

しゃくりあげながら夕映はか細い悲鳴を上げた。その間にも感情の嵐は彼女を千々に乱し、ばらばらにひきちぎっていく。杏寿郎がどんな表情をしているかさえ、にじむ視界では不明瞭だ。

自分の荒れた呼吸音とどくどく刻まれる鼓動以外が遠い。彼は黙っている。呆れられてしまっただろうか。こんなことで身も世もなく泣く自分が嫌でしょうがなかった。泣き虫毛虫と夕映をからかった、近所の男の子たちを思い出す。

こらえきれずに俯き、ぐうつと彼女は唇を噛んだ。ひときわ大粒の涙がぼろりと落ちた。

感情が一定の境界を越えると、どんなに我慢しても泣き出してしまふところは、常日頃夕映が恥じる欠点のひとつだった。顔が赤いのは涙だけが理由ではない。今、夕映は猛烈に恥ずかしい。隠れられる場所があるなら隠りたいし、それが穴の中でも埃っぽい納戸でもいい。今すぐ透明になれるのなら、夕映は喜んでそうなっていただろう。

それもこれもこの涙が止まらないのがいけないのだ。こんな醜態をさらして。早く止まれ！ そう念じながら、気持ちとは裏腹に夕映は変わらずそをかく。

杏寿郎は驚くほど静かにうろたえていた。驚きすぎて声も出ないとはこのことである。まず夕映が泣き出したことにびつくりしていたし、目をこすってはいけない！ と思つて両腕を拘束したはいいも

の、これからどうすればいいかてんでわからなかったのだ。

杏寿郎は小学生であるから、級友が泣いている場面に出くわしたこ  
とくらいある。たいていは何々くんが自分の鉛筆を取った、意地悪を  
する、だとか、転んだ痛みで泣いてしまった、だとかだ。それらは原  
因を取り除くことで対処できるということ、杏寿郎は短い人生の中  
で学習してきた。鉛筆を取られたのなら取り返して相手を反省させ  
ればいいし、転んでけがをしたのなら消毒して絆創膏を貼ればよい。  
自分だって、うんと幼い頃に転んで泣いたことがある。母は己の身体  
を抱き上げて、足をさすりながら慰めてくれた。杏寿郎が抱っこして  
もらっていたのは四歳くらいまでの話である。温かい母の手のひら  
の感触も、着物に焚き染められた甘い香の匂いも、大事な思い出だ。  
(うむ、夕映にもああしてやればいいのだろう)

ここがかつて父に叱責されたように「男児たるもの容易く涙を見せ  
るな」と檄を飛ばしたところで、夕映は泣きたくて泣いているのでも  
ないし、そもそも彼女は女の子だ。その対応は見当違いもいいところ  
だろう。それに、怒られたらその衝撃でますますびっくりして気持ち  
の混乱が激しくなるかもしれない。そもそも自分でも制御できなく  
て困っていることで怒られるのは悲しい。杏寿郎は自分の経験と今  
目の前にいる夕映の気持ちを重ねながら、彼女の感情を推測する。

鼻と目を真っ赤にして、先ほどよりもやや落ち着いた嗚咽を漏らす  
彼女。その姿をうろたえながらも観察した結果、杏寿郎の明晰な頭脳  
は判断を下した。

そうと決まれば行動あるのみだ。何事も迅速果断。巧遅より拙速  
を尊ぶべしとは父の言である。

杏寿郎は、夕映の両手首をつかんでいた手をぱつと離れた。目を瞬  
く彼女のまなじりからぼろぼろと涙の粒が落ちる。その手首にくっ  
きりと残った自分の指の痕に眉を下げ、今度はことさら気を付けて、  
そつと彼女の手を引き寄せた。

「え」

引つ張られて、重心の均衡を崩した夕映が杏寿郎の胸に飛び込んで  
くる。そのまま、彼は自分より一回り小さい背にぎゅつと腕を回し

た。大丈夫だ、と言う代わりに、背中を優しく叩いてやる。小さく震える背。肩に乗った頭は驚いているようで、ずっと続いていた嗚咽が止まった。

母がかつて自分にそうしてくれたように、きっと夕映の母が彼女にそうしてくれたように。ぎゅうつと少し痛いぐらいの強さで抱きしめて、熱を分け合う。そうしているうちに、少しだけ肩口は湿っぽくなったものの、彼女は泣き止んだ。

ゆつくり身を離して、杏寿郎はにっこりと笑う。

「俺が何度でも作ってやろう！ この指輪が枯れたら次の花を、しろつめくさが咲かない頃になったらまた別の花を探して！ そしていつかは枯れない指輪をあげよう！ うん、それで解決だ！」

夕映は真つ赤になった目を見開く。鼻も頬もまだ赤みが引いておらず痛々しさが残っていたが、鳩が豆鉄砲を食ったように呆けている姿には先ほどのような悲愴さはどこにもない。杏寿郎はにこにここと笑みを絶やさずに続ける。

「ワハハ、それにしても泣いている顔は初めて見た！ 夕映もずいぶん人間らしくなったなあ、よいことだ！ よしよし！ 俺は君の笑った顔の方が好きだが!!」

「……す、きょう。」

「ああ！ 夕映の笑顔が大好きだ！ だから泣き止んでくれてよかった！ 実は結構困っていた……」

「……ありがとお……」

ゆえも、きょうじゅろうくん、すき。れんごくさんたちのこと、みんな、だいすきよ。

ここに来てから約一月。初めて夕映は笑った。青く頑なだった蕾が、ようやく綻んだ。

後年、篝夕映はこう語る。

ともしびをもらった。燻り、灰になって腐り果てるだけだった自分が、再び生まれるためのやさしいほむらを。

あの瞬間、自分は寸分の違いもなく救われてしまった。槇寿郎に

よって助けられた命、溜火によって癒された心が、最後の最後、ダメ押しのように杏寿郎に救われた。人生を救われたとき、返礼として夕映が杏寿郎たちに捧げられるものもまた、人生しかあるまい。いや、一生懸けても返せないかもしれない。けれど、それに報いなければならぬ。幼心にもそれはわかっていた。その思いの触り心地しか知らず、それを明らかにする言葉がはつきりとわからなくても、夕映には理解できていたのだ。

彼らに報いることができるのなら立場、役目はなんでもよかつた。そのとき、これが最適だと感じたのが女中という役職だった。だから夕映は女中になることを決意する。一生を、煉獄家の皆様に尽くすことに使うつもりで、その選択をした。

たとえ命を投げ捨てることがあつても、惜しくはなかつたのだ。この屋敷は夕映にとって極楽同然であり、そこに住まう彼らがかみさまだった。彼らに向ける好意は大切な人への愛情を飛び越えて、畏れ敬う信仰へと変わる。強烈な体験だった。それまでの想いを初恋とするなら、夕映が再び産声を上げたとき恋は死んだのだ。

だって、かみさまとは愛し合えない。それは夕映が抱く真理だった。

### 幼少期3 慶事

この家の子にはならない、でもこの家で恩を返したい。夕映からそれを聞いたとき、瑠火は傍目にはわからない程度に冷静さを取り繕っていたが、目玉がこぼれ落ちそうな衝撃を受けた。療養のために預かり、世話をしている間に、一家の間では彼女がこの家の一員となることは暗黙の了解のように浸透していたのである。杏寿郎も、無意識のうちには彼女が妹になると思っていたが故の世話の焼きようであろう。それとは別に、近々彼には兄弟が増えると思われるが。そのとき夕映にも姉という存在になってもらいたいと、少しばかり思っていたところがある。

それがまさか本人に断られるとは。

(いえ、しかし)

ふらつと傾きそうな身体を立て直し、瑠火は額に片手を当てた。

「……あさと鉄郎さんのためですか？」

「うん、じゃなくて、はい。おねえちゃ、るか、さんと、おじさまの子になったら、とうさまとかあさまのことを忘れてしまうかもしれない……それはやなの。……です」

「無理をしなくてもよいのですよ」

「だめ！ です!! 夕映は立派に恩を返す！ です!!」

むん！ と口を一文字に引き結んだ夕映は、拳を握りこんで脇を締めた。両目はしつかりと開かれ、瑠火を見据えている。意志が堅いと見て取れる。それに、彼女が決めたのなら瑠火はそれを尊重したいと思う。家の労働力になりたいと言うなら使用人の仕事をあてがい、主人としてきちんと学をつけさせようではないか。

それでも寂しいものは寂しい。意地悪を言うようだが、と思いつつも、ほんの少し笑いをにじませて瑠火は言葉を紡いだ。

「もうお姉ちゃんとは呼んでくれないのですか？」

「う!?! え、えと、えつと……」

「確かにこれからは夕映の要望通り、姉でもなく母でもなく、雇い主となりますが……雇い主たつてのお願いですからね。そう、二人きりの

ときだけならどうです?」

「んん!? うー、うー、い、いいのかな……でも……」

逡巡で、意志が堅かったはずの夕映の目がぐるぐる渦巻き始める。今にも頭を抱えそう。悪いとは思いつつ、こんな姿を見られるのはこれが最後になるだろう。溜火はもうひと押しだと唇を開く。夕映は自分が間違っているのかとますます目を回した。ものの見事に乗せられている。

「溜火、その程度にしてやれ。からかうにしても可哀想だ」

障子の向こうで待機していた榎寿郎は、思わず口を挟んだ。ぴたりと二人の動きが止まり、片や残念そうに、片や愕然として、それぞれ表情を変える。

「からかわれていたです!?!」

「榎寿郎様、もう少しだったのですよ!」

「それはすまないと思う。だがあまり遊んでやるものでもないだろう」

真面目な顔で溜火をたしなめ、榎寿郎が部屋に入る。そのまま洗練された所作ですたんと障子を閉めた。着流しの裾を捌いて溜火の隣に着席する。自然、部屋の空気がぱりつと切り替わる。夕映の背筋は伸び、溜火の雰囲気も普段と同じ静謐なものへ戻った。

「さて」と榎寿郎は口火を切り、夕映が女中として勤めることに許可を出した。約束事としていくつか条件が述べられていく。身体が出来上がり、力がつくまでできる範囲の仕事にとどめること。仕事は溜火に習うこと、溜火は夕映に厳しく仕事を教えること。衣食住を保証する代わりにかかる費用は給金から差し引くこと。きちんと学校へ行き、学業を修めること。

「とはいえ君はまだ四つだし、まだ心身ともに健康とは言えないだろう。まずは溜火の手伝いをして、家事を学びながら回復に努めなさい。それから、この家に勤めると決めた以上私たちのことは主人一家と仰ぐこと」

「……?」

「そうだなあ……敬語を覚えて、旦那様、奥様、坊ちゃんと呼べばひと

まずはいい」

「はい！」

「それと、なににつけても体力は必要だ。君さえ良ければ一緒に鍛錬を……」

「槇寿郎様」

まさか鬼殺の剣士に育てる気か、と言わんばかりに溜火が尖った声を出したが、それよりも夕映が目を輝かせるほうが早かった。

「やります！」

びつと元気よく挙手。ふんすと噴き出された鼻息。きらきら輝く瞳。なによりも雄弁なやる気だった。槇寿郎がにこにこ頷く一方、溜火は若干の苦さを表情にたたえていたけれども。

それから夕映はずっと、よく食べてよく眠り、よく働いてよく修行した。

体力をつけるために野山を駆け回り、筋肉を鍛え、木刀を振り回そうとして夕映が振り回されたので、組み手に時間を費やした。投げられた数は百を超え、溜火の前でだけ打ち身の痛みを明かして少しだけ泣いた。

それだけ動けば腹も減るからよく食べるし、くたくたになってよく眠れる。子供の身体は疲労の回復が早くて、倒れるようにして眠った次の日にはすっきり目覚めることができた。朝早く起きて働く溜火の手伝いをしていると、早起きにも慣れてくる。修行でぼろぼろになって帰ってきたとき、夕飯の途中でうつらうつらと舟をこいでいて、いつの間にもやら布団の中で朝を迎えていたこともたびたびあった。

月日は矢のように過ぎていく。夏の盛りを終える頃には、夕映が痲癩を起こして泣くことはほとんどなくなり、杏寿郎との組み手でまれに白星をあげられるようになった。村の空気にずいぶん馴染み、友達も増えたし、一年前とは比べられないほど掃除と洗濯がうまくなった。

そうやって緑の葉は色づき、秋。

「うむ！ やはりさつまいもは秋が一番いい！ うまい！ うまい



！」

「……坊ちゃん、そんなに食べてはお腹が張ってしまいますよう……？」

杏寿郎がわっしよいわっしよい声をあげてさつまいもを食べる姿に目を丸くしていた時期である。

溜火の第二子懐妊が判明した。

当時のことを書き記すと、榎寿郎がわざわざ医者呼んだので、杏寿郎と夕映はすわ病かと気が気でなかった。その頃の溜火はやたらと眠そうでぼんやりとしていることが多く、気だるげにしていることも散見していたからだ。大いに心配していたところに喜ばしい報せが飛び込んできたものだから、杏寿郎はすっかり嬉しさを持て余して裏山のとっぺんまで走り出し、夕映は慌ててそれを追いかけた。彼が頂上で太陽に向かって、「弟でも妹でも一向に構わん！俺が守つてやろう!!」と宣誓したのは、あとからすればいい思い出である。

(坊ちゃんたら、ものすごく気が早いんだからア……)

当時の夕映はというと、杏寿郎のあまりの喜びように若干の苦笑いを浮かべていた。

赤子が腹にしていると判明してから生まれてくるまでに最低半年はかかることを彼女は知っていたし、出産は命懸けの行為で、母子共に無事の状態で子供が生まれてくるまで少しの油断もできないということとを、ぼんやりとだが理解していた。そのせいで杏寿郎ほど無邪気には喜べない。夕映も夕映なりに溜火の慶事を喜んではいたが、子供と一緒に家へ帰ってこられなかった母親を知っている以上、喜び半分憂い半分というところ。こればかりは経験と環境の違いであり、だからどちらの反応が正しいだとか、間違っているだとかではないのだ。きつと、溜火が元気に赤ん坊を抱いて屋敷に戻り、産後の肥立ちを健やかに過ごし終えたときにしか、この不安は拭いきれないのだろう。(でも、旦那様と奥様はとっくに覚悟されていらっしやるだろうし、私が不安に思っただって仕方がないわ！)

ぎゅつと手を握りしめ、睨むように陽光を見つめた。

杏寿郎が誓ったように、自分も誓おう。溜火と、その胎に息づく子

供が無事に出会うため、己にできることがあるのならなんだってやる、と。

絶対に支えてみせる。赤い瞳が炎のようにきらめいた。無論、村の煉獄家縁者の女衆や溜火の実家、産科の医者、産婆など、挙げればきりが無いが夕映より溜火を支えられる人間はあまたいることだろう。それでも、幼い自分にできることがどんなに少なからうが、気持ちで劣る理由などないのだ。煉獄家に仕えると決めた以上、彼らを影に日向に支えるのは自分の御役目である。

(なんだってやる、なんだってやるの。私にできることは全部)

彼女は誓いを立てた。明日の自分が、今この瞬間の想いに恥じぬように。

「うん、俺は早くあの子に会いたい！ 考えるだけでわくわくして、居ても立っても居られないぞ！ 夕映もそう思わないか？」

杏寿郎が満面の笑みで振り返る。夕映は目を細めて、ふにやりと微笑んだ。

「はい、本当に。私は無事に生まれてきてくれるだけで十分ですよ。坊ちゃんかお嬢様か、楽しみですねえ……」

さ、そろそろ帰りましょう。いきなり飛び出してしまつて、旦那様方も心配しているでしょうからね。

そう言つて、彼女はついと袖を引いた。杏寿郎は上機嫌のまま元気に頷く。そして元気いっぱい、二人は走つて帰つていった。

翌日からはとにかく溜火第一の生活である。屋敷にはしばしば村の母親たちが入れ替わりで出入りするようになり、溜火の家事仕事を手伝つてくれるようになった。つわりによつて食べられるものや耐えられる匂いが狭まるため、溜火が自分の食事を作り、小母らが楨寿郎たちの食事を作るといふ寸法である。夕映は相変わらず洗濯と掃除だ。

小母たちは溜火に、まったく仕事をしないと難産になるが、働かすぎては流れてしまうから塩梅が難しいのだと常々話していた。溜火も初産のときのことを思い出すようで、「でも、二人目だったら覚悟も決まります」と腹を撫でて笑う。

暇さえあれば彼女は夕映と杏寿郎に腹を撫でてくれと頼むので、杏寿郎はおつかなびつくりと、夕映は念を込めて、現在進行形で人間が造られているそこをさすった。毎日そうしているうちに彼女の腹は膨らんでいく。

「俺もこの中に入っていたのですね……」

しみじみと、杏寿郎が呟いた。今、夕映は外で仕事をしていてここにいない。榎寿郎は遠くの任務に出ていると同じく不在。帰ってくるのは来週になるだろう。

母と子、二人きりだ。いや、腹の中の赤ん坊も含めれば三人か。

溜火はずいぶん大きくなった腹のせいで、以前通り正座をするのが難しく、文机にもたれかかるようにして身を起こしていた。

「ふふ、信じられないでしょう？ 生まれてきたときは、杏寿郎も腕に収まるくらい小さかったのですよ。まあ、あなたは母のお腹にいたときから大きかったのだけれど。なかなか頭が出なくて大変でした」

「そうだったのですか!？」

ぎよつと目を剥く。その拍子に、母の腹を撫でていた手が止まった。

「ええ。数年後に夕映を抱いたときは、あまりの軽さに驚きましたよ……病院で体重を測ったとき、あなたは平均より大きいと聞いてはいましたが、いざ育てていると自分のところが基準になりますからね」

「そういうものですか……」

くすくすとかすかな笑みを漏らしながら、溜火がこっくり頷いた。

「それに、あなたがあまりに榎寿郎様の写し身のようにだから、あの方、呆れたように笑って。ほら、この家の、特に男児は皆そっくりでしょう?」

「はい……どの代も瓜二つだと……」

杏寿郎が思い出すに、写真で見る祖父も父とよく似ていた。ということ、自分も祖父とそっくりだということである。溜火はいっそう笑みを深めた。その瞳は遠い昔を懐かしんでゆるりと細められる。

この子を産んでからもう七年。月日が経つのは本当に早い。昨日まで寝返りを打った、這い這いをした、と榎寿郎と一喜一憂していた

ような気がするのに、それが学校へ行く年齢になり、もう溜火が片手で抱き上げることができないくらい大きくなつた。楨寿郎が言うことには、剣術の腕も年々上達しているそうだ。男子三日会わざれば括目して見よと言うが、そうでなくとも子供という生物は夏の朝顔のように目まぐるしく、するする、すすくと育つていく。その様子を近くで見守ることでこんなにも愛しく思い、幸せを感じるなんて。杏寿郎が生まれた直後には考える余裕すらなかったというのに、今ではすっかり自分は「母親」だった。

腹の奥の胎動を感じながら、溜火は話す。

「一回きりでしたが、『少しは君に似てくれていてもよからうに』、と……ね。義父上も同じことを義母上に仰つたと聞きますから、この子もきつと、楨寿郎様やあなたにそっくりの顔をしていると思いますよ。賭けをしてみますか?」

「む……」

ぴくぴくつと杏寿郎の立派な眉が動き、その眉尻が天井を向いた。

「ここで領いては賭けになりません! 俺は母上似の子が産まれる方を選びます!」

「あ、今蹴りました」

「ええっ!?!」

「ほら、触つてみなさい。あらまあ、元気なこと。あなたがいることにはしゃいでいるみたい」

呼んであげて、と促されて、杏寿郎は腹にぴったり耳をくつつけた。どく、どく、と母の血流の音に混ざつて、そこにあるはずの心臓に耳を澄ます。ぼこつと動いた。また蹴つたのだろうか。そう考えると、杏寿郎はたちまち笑顔になつてしまつて、顔のゆるみを抑えることが難しくてしようがない。

耳を離し、もう一度、ことさら優しく溜火の腹を撫でる。

「……兄上だぞ! みんな、君を待っているから、安心して生まれてくるといい!」

「母も父も、兄も、姉やも待っていますよ。会える日が楽しみです」

次第に臨月が近づき、溜火は実家へ里帰りをする事になった。生家にいる方が彼女がくつろげるというのもあるし、かかりつけの病院はあちらの方が近い。通院のしやすさなども考慮しての決定である。陣痛や破水が始まってしまったなら、医者を呼んで実家で出産しても構わない。心構えはできるとのことだ。

杏寿郎は一緒に行くかと誘われたが、その間に修行ができないことを理由に断った。「自分がいては母上の気が休まらず、出産に集中できないのではないか」とも思っていたので、遠慮をしたのだ。自分が着いていくと、楨寿郎が任務に出ている間、屋敷に夕映が一人きりになるというのも気にかかる。ならば、と夕映と杏寿郎を連れていこうとしたら、今度は楨寿郎が明かりの灯らない家に帰ることになり、元の木阿弥だ。というわけで、子供二人と主人は留守番となった。

今日は溜火の出立の日である。本当なら夕映が荷物持ちをすることでだが、未だに小さな身体で抱えられるものは着替えくらいだ。それに、力がついたとはいえ、身重の溜火が万が一でもつまずいたとき、夕映だけでは支えることすらできない。泣く泣くお供を断念し、代わりに杏寿郎が行くことになった。ついでに祖父母に顔を見せてくるつもりである。それが済めば、杏寿郎は一人で煉獄邸に戻ってくる。名残惜しさが尽きず、夕映は両手でぎゅつと溜火の手を握った。

「元気な赤ちゃんと一緒に帰ってきてくださいね。入院されるのですから、生まれたとき伺いますから」

「ありがとう。そうですね、陣痛が始まったら、母上からあそこの工場の方に電話してもらいましょうか。二人ともわかるでしょう?」

「はい! 皆月さんのところですね!」

「ええ。電話がかかってきたら、杏寿郎はおばあさまのところへいらっしやい。夕映はどうしますか?」

えつ、と目を丸くして、夕映は少しまごついた。なんとか返事をひねり出す頃には、眉は下がり、困りきった表情が出来上がっていた。「そのう、行ってもよろしいのでしたら、坊ちゃんを見送ってから、戸締りや火の始末をして……伺わせていただきます……」

もじもじと両手の指先を絡めながら、上目遣いで溜火を見上げる。

そうすると、彼女はぴかぴか光るお日様のようにふわっと微笑んだ。それがまぶしくて、夕映はぽつと赤らんだ頬を手で隠しながら目を細める。杏寿郎もニコニコ快活に笑っているものだから肩身が狭い。夕映は少し小さくなった。

「奥様には敵わないわア……まさか、知っていてわざと……？」

遠ざかる二人の背中を見送りながら吐き出されたひとりごとは、口に含んだ砂糖のようにとろとろ溶けて、他の誰の耳に入ることもなく消えていった。

それからしばらく。病院にて、とうとう陣痛が始まったと連絡が来た。この日を想定して何度も打ち合わせをしていた二人の行動は早い。まず、杏寿郎が「先に行っているぞ！」と断って弾丸のように屋敷を飛び出していった。その一方で夕映は近隣の女性に洗濯ものの取り込みを手伝ってもらい、屋敷中の戸という戸をすべて閉め、電灯類と火の元を確認してから、彼のあとを追う。

（難産じゃありませんように！ 赤ちゃんが生きて生まれますように！ それから奥様があんまり疲れませんか！ あと、あと、えーと）

心配事が多すぎて、頭の中がしっちゃかめっちゃかこんがらがってしまう。さらに一度しか行ったことのない家を目指して走っているものだから、途中で曲がる道を一本間違えて、ちよつとだけ迷子になった。通りがかった顔見知りのおかげで無事に到着することができたので、道に迷ったことはこのまま秘密にしておこうと思う。

家の中、彼の祖母と一緒に待っていた杏寿郎は、思わず笑ってしまいそうなくらいカチコチに固まっていた。正座した膝の上で両手の拳がきつく握りこまれ、眼力がありあまるばかりにどこを見ているかわからないと称される目玉はせわしなく、うろうろと空中をさまよっている。ついでに、今にも脂汗が額に浮かびそうだ。口角だけがいびつにきゅつと上がっていてなおさらおかしい。一目でわかるほど、彼は緊張のあまり強く動転している。

ちらりと傍らに座す彼の祖母に目をやると、すっかり目が笑ってい

た。さもありません。袖で隠されている口元も弧を描いているに違いない。夕映は小さなため息を吐き、杏寿郎の一步後ろに座ってから、彼の背中をつんとつついた。ぎよるんと彼の首が回る。その様子を見て、笑いを通り越し呆れてしまった。もう一度ため息を吐く。

「もお、坊ちゃんがそんなに変になつたつてどうにもなりませんよう。ほら、深呼吸してください。旦那様が教えてくださった息の仕方をするると緊張がほぐれますから」

「だが、だがない夕映！ 俺がこうして手をこまねいている間にも母上は！」

「腹を決めてくださいいな。坊ちゃんつて本番に弱かつたんですねえ……旦那様がご覧になつたらお腹が引きつるくらい笑われるんじゃないですかあ？」

「そうだろうか!? そんなに俺は変か!?!」

いつものからかうようなやりとりをしていたら、みるみるうちに杏寿郎が調子を取り戻していく。夕映は内心ほつと安堵し、視線を大奥様にやった。釣られて彼の目も自身の祖母へ向く。溜火よりもいくらか面差しの柔らかいこなれた女性は、柔らかく微笑んでいた。

「ごめんなさいね、杏寿郎。その子が察していた通り、私、結構笑っていたわ」

「なんとっ!?!」

「ほらあ。大奥様が淑女の鑑でいらつしやるから、声を立てられなかったのですよ? もう、坊ちゃん、気配を読み取る暇がないくらい慌ててらつしやつたのね」

ぽくぽくちん。空でカアーツと鴉が鳴いた。池の鯉がぱしやりと飛沫を跳ねさせる。

ボンツ！ と音を立てて杏寿郎の顔が朱に染まった。

「よもやよもやだ！ 俺もまだまだ修行が足りんな……!」

いつも通りの快活な表情のまま、顔色だけが真っ赤である。あらわになつている額や、耳殻、そして首元。そのすべてが赤みがかつていて、先ほどとは異なる汗をかいているようだった。それでも口をつぐんで俯くのではなく笑い飛ばすところがらしいというか、なんとという

か。大奥様が優しく目を細めて彼を見つめる姿を視界に収めつつ、夕映も頬を緩めた。

太陽が空の中央に来て、昼食をぐちそうになる。まだ連絡は来ない。

腹ごなしに袴を穿いて組み手をする。今日は夕映の猛攻が通るばかりだ。八つ時に熱い茶とまんじゅうを頂いた。まだ連絡は来ない。

日が暮れていく。影は伸び、鳥たちが巣へ帰っていく。……まだ連絡は来ない。さすがにみんな口数が減ってきて、表情は心配の色が濃くなってきた。振り子時計の歯車の音が嫌に耳につく。

杏寿郎は何度も立ったり座ったりを繰り返して、外に目を向けるたびにぎゅつと唇を噛みしめている。いつも緩やかな眉間には深い溪谷ができていた。片や夕映はと言えば、到着したときの杏寿郎を笑えないほどカチカチになっていて、縫れるもの全部に片っ端から祈りを捧げていた。組んだ両手は力が強すぎて、手の甲にくつきりと指のあとがついてしまっている。けれども、家にいるもの全員が不安におかされていたので、誰一人として、他人に気を配る余裕は残っていなかった。ともすれば些細なことに苛立って、八つ当たりをしてしまいうでもあつたので、自分の不安と向き合い続けるのはある種賢明とも言える。

(父上がいてくださったら、俺もまた落ち着いていられたのだろうか……)

難しい顔をしながら、部屋の中をうろろと動き回る。じつとしてみると、頭がどんどん悪い方へ転がっていきそうで怖かった。

「夕映、夕食の前にもう一度組み手に——」

「おおい！ 生まれたぞー！」

耐え切れず、また集中できないとわかっていて夕映に誘いをかけたとき、祖父——溜火の父が、部屋に転がり込んできた。ぱつと部屋中の視線が彼に集中する。病院から全速力で走ってきたのだろう、額に汗を浮かべて肩で息をしている。

老いてなお矍鑠としていて、健脚、強心臓を誇る祖父がこうも慌て



るとは珍しいなあ。杏寿郎はまるで他人事のように考えていた。考えていた以上に現実感がなかったのである。生まれたって、誰が。誰を？ そんなことを言い出してもおかしくなくらい、呆けていた。「溜火と赤子は無事ですか!？」

「私、旦那様の鴉に伝えてきます！」

祖母がつかみかかるようにずっと祖父に近づき、夕映は風のように部屋を飛び出していく。

いやはや、人間は女性の方が肝が据わっていると巷で頻繁に言われることであるが、杏寿郎はこのとき、つくづくこれを痛感した。ぽかんと口を開けて間抜け面を晒し、ふわふわしたことを考えていた自分より、なんと立ち直りの早いこと。その様子を見ていたら嫌でもはつとさせられる。杏寿郎もあとに続き、祖父のところへ駆け寄った。

必死の形相を浮かべた妻を前にして、少しだけ老人の顔が曇る。

「……難産だったからな、溜火は少し衰弱している。赤ん坊の方も平均より小さいみたいでなあ、ありやあ少しの間入院だ」

「っ、そうですか……」

祖母の顔に苦み走った感情が浮かぶ。なんてことだ、変わってやれるものなら変わってやりたい。そう思っていることが、子供の自分にも手に取るようにわかった。しかし彼女はすぐに洗面をきりつとしたものへ切り替え、質問を重ねる。男子か女子かとか、必要なものはなにかとか、家から持っていけるものかとか。

どうやら、杏寿郎には弟ができたようだ。それを理解する頃には、祖父の呼吸は整い、額できらきら光っていた汗も消えていた。「兄としてよく導いてやりなさい」と、祖父の骨ばった手が頭を撫でてくれる。杏寿郎は甘んじてそれを享受した。そして内心、首をかしげて唸り声を上げたのだ。

（ううん、困った。あんなに早く会いたいと思っていたのに、まるで実感が湧かないぞ！俺は本当に兄になったのだろうか……）

それから、報告を済ませた夕映が戻ってきてても、「もう遅いから」と母の実家に急遽泊まることになっても、暗い部屋で布団に潜り込んで目を閉じても。杏寿郎は雲の上を歩くようにふわふわと覚束ない心

地で、ずっと夢現だった。現実を現実だとなかなか認識できなかったのは、過度な緊張から急に解き放たれた反動もあつたのだろう。スコンと落ちるように入眠し、ぱっちり目覚めてもまだ、彼は「本当に弟は生まれたのかな？」と、相変わらず地に足つかない心情であつた。しかしながら、翌日病院で母に抱かれたその子に対面したとき、それらは一気に吹っ飛んで、「現実」は濁流のように杏寿郎を飲みこんだ。

頭の、父や己と同じ色の金色の産毛。うっすらと生えた、けれども主張の強い眉毛。よく磨かれた林檎のようにつやつやとあかいほつぺた。ちよんとついて、むにむに動く小さなくちびる。杏寿郎の手のひらで覆ってしまえるような大ききさなのに、生真面目に揃った薄桃色の爪。

一目でわかる。寸分の間違いもなく、この小さいいきものは、自分と血を分けた弟なのだ。

理解した瞬間、様々な感覚が杏寿郎を襲った。落雷に打たれたような、びりびり震える衝撃。ふわりと花が開くような多幸福感。目の前でちかちか光る火花。そして――燃えさかるようにずきずき熱い心の臓。

「お、おや？ これはおかしいな、少しも悲しくなどないのに……むしろ、とても、とても……」

気づけば、杏寿郎はぼろぼろと涙をこぼしていた。手のひらでぐしぐし拭ってみても止まる気配がない。なんで？ 頭が疑問符でいっぱいになる。男児たるもの、易々と涙を見せるな！ と叱責する父を思い出して、「はい！」と力いっぱい返事をしてみても、てんでだめだ。全然止まらない。困り果てて母の方を見ても、彼女はすべてを理解しているようにやわく微笑んでいるし、妹分は「あらア」とだけ漏らし、それ以上なにも言わない。ますます杏寿郎は困ってしまう。その間にも、ぼろぼろ、ぼろぼろ。終いには鼻が垂れそうだった。

「母上！ 俺は、俺はなにかおかしくなってしまったのでしょうか!？」  
「つふふふ！ なにもおかしくありませんよ。この子も、こんな祝福されて果報者ですね」

すどん、と腑に落ちる。

(そうか。俺は、嬉しくて泣いているのか……)

母の笑顔で、驚くほど簡単に気づかされた。自覚したら、止まらなくて困っていた涙がぴたりと止まる。そして、むずむずが全身に広がって、これ以上ないくらい笑顔でいっぱいになる。ずびつと鼻をすすり、杏寿郎は赤子の頬をそおとつついた。ふに、と柔らかいそれは、どんな細工より繊細で、神聖な宝に見えた。にっかりと杏寿郎は笑う。

「——やつと会えた！ 兄だぞ！」

「そういえば、楨寿郎様とあなたによく似た男の子ですから、賭けは母の勝ちですね」

「はっ!!」

「え、なんの話ですか……?」

## 幼少期4 翳り

瑠火の産褥期はなかなか大変であった。入院している最中に高熱が三日続き、やっと赤子を連れて家に戻ってきてても、乳房の痛みやら、貧血、憂鬱の気など様々な症状が彼女を襲った。ろくに布団から起き上がれないのが現状である。もっぱら食事をし、赤子に乳をやるのが彼女の仕事だった。

出産直前の頃と同じように、近隣の小母たちが手助けをしてくれるし、時折瑠火の母も煉獄邸を訪れるため、日常は日常として保たれている。夕映もきりきり働く毎日だ。杏寿郎は、父から留守を任されているため、より張り切って鍛錬をし、よく家の手伝いをしている。布団の中の瑠火だけが申し訳なさげだった。

「こんなになにもしなくて、本当にいいのかしら……食べて寝て、千寿郎にお乳をあげるだけなんて、罰が当たるんじゃない……」

「もう！ 奥様のお仕事はちい坊ちゃんを育てるためにしつかり精をつけることだって何度も言ったじゃありませんかあ！ 退屈なのはわかりますけど、一生分休むつもりで休んでくださいっ！」

赤ん坊を抱いた夕映がきっぱり言い切ると、瑠火は顔の下半分を掛け布団で隠して眉を下げる。少女の腕に抱かれた子はすうすうと健やかな寝息を立てていた。順調に肥え、大きくなっている。

今やこの子がこの家の中心だ。

赤子は「千寿郎」と名付けられた。伝令用鎧鴉を飛ばした翌朝に楨寿郎がとんぼ返りし、瑠火と次男に面会して、その足で役所に出生届を出してきたのである。

長男であり、ゆくゆくは鬼殺隊に入ることが生まれたときから決定づけられている杏寿郎には、魔除けの願いを込めてあんずの字を当てた。第二子は次男であるため、兄をよく支え、そして万が一楨寿郎と杏寿郎が志半ばで斃れたときには、煉獄家の血筋と炎の呼吸を次の代に繋いでほしい。それこそ、この千年、人の想いが絶えなかつたように。それゆえに楨寿郎は「千」の字を与えた。己が焚き木のように燃

え尽きるとしても、子らが次の世代に繋いでいってくれることを願って。

……連綿と紡がれてきた鬼狩りたちの業を我が子に背負わせることに、思うことがないわけではない。歴代煉獄家当主たちも、きつと同じ思いであったことだろう。そしてどの柱も、「自分の代でこの戦いを終わらせよう」と誓ってきたはずだ。そうやって繋いできたのだ。守るものが増えた槇寿郎の技はさらなる冴えを見せ、心はより一層ごうごうと燃えている。

今、間違いなく己は人生の最盛期にいる。自ずとそれを感じられるほど、槇寿郎は手応えを感じていた。

さて、赤ん坊の成長とは著しいもので、槇寿郎がその時々々の任務を終えて帰宅するたび、どんどん大きくなっている。溜火と夕映が日記をつけていてくれるので、留守が多い槇寿郎でも千寿郎の成長を身近に感じられている。平均より小さく産まれてきたときには、ちゃんと育っていけるか心配していたのだが、よく泣き、よく食べ、よく眠ると伝え聞けば安心できるものだ。溜火が言うには、杏寿郎のときより夜泣きが長いかもしれない、とのことだが、「しかし赤子は泣くのが仕事ですからね」というのも彼女の談だった。二人目の子育てであるし、なにより杏寿郎と夕映がよく支えてくれるのでとても楽だともはにかんで言っていた。それにまなじりを下げて槇寿郎もうなずいたものだ。一時はどうなるかと思われた少女も、元気に家の中でくるくる働いているし、長男には兄の自覚が順調にはぐくまれているという。

妻の隣、眠る次男を膝に抱き、長男と少女が修行に励むさまを見守るといふのは、とても穏やかで、この日常がどんなに尊いか、繰り返し槇寿郎に見せつけてくる。妻の肩を抱き、槇寿郎は囁いた。

「どんなことからでも、守ってみせよう。君も、息子たちも、あの子も。絶対に、だ」

「……ふふ、ありがとうございます。でも、あまり無理はしないでくださいね」

「うーん、確約が難しいな！」

「そうだろうと思いました」

おどけて見せると、妻がつんと顔を逸らす。その横顔が愛しかった。

いつまでもいつまでも、こんな日々が続いていけばいいのに。そう思わずにはいられない。人生には空模様があることを知っているから、なおさらに。

季節は刻々と移り変わってゆく。子供たちはすくすくと育ち、溜火も日に日に顔色がよくなつていく。あとは鬼さえいなければ、命の危機も減つただろうになあ。榎寿郎は心中、ため息を吐く。

未だに鬼舞辻の尻尾すらつかめない。上弦とも出くわさない。お館様はそろそろお隠れになられるだろう。そして次の当主に輝哉様が就かれる。この堂々巡りの輪が切れるのはいつたいつになるのだろうか？ 自分の代ですべてを終わらせたい、先人たちと同じようにそう願ったところで、なかなか思うようにいかないのが、歯がゆくて仕方がないのだ。

「父上！ 稽古をつけてください！」

「おお、いいぞー！」

自分そつくりの獅子毛を撫でてやると、杏寿郎は頬を赤くしてはにかんだ。妻によく似た笑みだ。その一步後ろで、木刀を抱えた夕映が二人を優しく見守っている。溜火に千寿郎を任せ、榎寿郎は「着替えてくるから、少し待っていなさい」と鷹揚に口角を上げた。

杏寿郎は、自分より圧倒的に弱いものと相対する術をよく知らない。つまり、赤ん坊のようにふにやふにやして、首が据わっていない生き物と関わるのが生まれて初めてだった。この村にわざわざ当主の子息に子守を頼む人間はいなかったし、杏寿郎の友人はたいていが同世代で、そのきょうだいと遊ぶことはそうそうなかった。当然と言えば当然である。実を言うと年下の異性と関わったのは夕映の件が初めてだった。

そのせいか、杏寿郎はだつこが下手だ。千寿郎を抱き上げるたびに泣かせている。過言ではない。最初は大人しく抱かれていても、次第

に不安を覚えて泣きながら母か妹分に手を伸ばすのが常である。そのたびに杏寿郎はひどく落ち込んだ。

自分よりも著しく小さな生物と触れ合う機会は今までほとんどなく、さらに赤ん坊は言葉を話せないため、とにかく感情表現から読み取るしかない。それを意識して、とにかく杏寿郎は千寿郎の顔を見た。彼を不安にさせる材料を分析し、適宜改善していけば己のだった。技術も上がるはずである。しかし、どうも杏寿郎の視線は千寿郎にとって怖いものようだ。じい……つとそのふくふくした顔からなにかを読み取ろうと覗き込むと、数秒と経たずに泣かれてしまう。緊張してだっこをしている上、全集中して千寿郎の様子をうかがっているというのに、まったくもってだっこが上達しない！これはおおいに少年を悩ませた。

そのくせ、母や夕映にひよいつと抱き上げられると、泣いた鴉がもう笑うような変わり身の早さで泣き止むか、子守歌で眠りに就く。思わず恨めしげな視線を向けてしまうのも致し方ないだろう。

「坊ちゃんも緊張しすぎですねえ」

「そうだろうか!? ……そうかもしれないな!」

「変に力が入った腕で抱いてらっしゃるから、ちい坊ちゃんも安定しなくて不安になるのでしょう。それに加えて、いつちい坊ちゃんが泣き出すかと鬼気迫るお顔をされていますもの！坊ちゃんたちは旦那様によく似て目力がありますし？一生懸命なのは伝わってきますけどね」

そう言いながら、夕映はゆらゆらと千寿郎を抱いた腕を揺らす。

千寿郎は一度寝付くとなかなか起きないので、その間にもちもちのほったたをおっかなびつくり、つんつんつくばかりである。夜泣きの主な理由は腹が減ったか、眠いのに寝付けなくてぐずっているかのどちらかだった。母がお乳をやると泣き声がぴたりと止むため、杏寿郎は千寿郎が家にやってきても今までと特に変わらぬ生活を送れている。

「しかし、君がいてくれてよかったなあ」

「ええ？ なんです、藪から棒に」

「いやな、母上が体調を崩されている間、君が家のことや千寿郎の面倒をよく見ていてくれるから、俺も父上もそう混乱せずに済んでいると思っただ！ もちろんおばあさまや村のみんなも手助けをしてくれているが、みんなにもそれぞれ生活があるからな！ 夕映がうちにいてくれて大助かりだ!!」

「……まあ、なんてもつたいないお言葉……坊ちゃんは人を焚きつけるのがお上手ですねえ……」

「ん!? どういう意味だ!?!」

「立派な方になられるだろうなあと思っただけですよ。私、ますます励もうと思いました。ちい坊ちゃんも兄上が頼もしくて幸せですねえ」

夕映が煉獄家男児らしい立派な眉をこしよこしよくすぐると、眠る千寿郎はふにやふにやと口をゆるゆるにする。気持ちいいらしい。

(なるほど、そこがいいのか！ 今度俺も撫でよう！)

杏寿郎はうむ！ と頷いた。

この子も、猿の子のように真っ赤で、産毛しかなかった頃から、すっかり人が想像する赤ん坊らしい見た目になったものだ。生まれたときから目元が祖父、父、己にそっくりだったが、髪や眉が生えそろうほどその瓜二つ具合に舌を巻く日々である。夕映曰く、「旦那様や坊ちゃんは凛々しいお顔立ち、ちい坊ちゃんはどことなく優しいお顔立ちだ」とのことだが、当事者である杏寿郎はよくわからなかった。母のように柳眉と切れ長な目をしていたら凛々しい、夕映のようにたれ目で人好きのする顔をしていたら愛嬌がある、というのは理解できるが、いざ自分やそれそっくりの顔となるといまいち筆舌しがたいものだ。

けれども、弟の顔を見ていると、心の底から湧き上がってくる思いがあつた。この子が笑っていると嬉しく、この子が泣くと心配でてんやわんやになる。気持ちよさそうに眠る表情はなによりも愛らしく——きつと、これが愛しいということなのだろう。二年ほど前に、隣の少女が初めて笑ってくれたときも、同じことを思った。

(俺が守らなくてはな)



あの山の頂上で誓ったように、指輪の約束をしたように。数秒彼は瞑目し、そしてすつくと立ちあがって、縁側に降りた。

「よし！… にはともあれ修行あるのみだ!!」

「坊ちやあん、そんな大声を出したら」

「……う、ふうう……あ——!!」

夕映の腕に抱かれた千寿郎が泣き出す。さつきまでやすやすや眠っていたのが嘘かと思うほど、火がついたような泣きっぷりだ。庭先の木に止まっていた鳥たちが一気にバサバサバサツと飛び立っていく。その音に驚いて、ますます千寿郎が泣く。

「ああ、ほらあ、言わんこっちゃない」

「なんと!？」

動転した杏寿郎の口からまた大声が飛び出す。彼の顔にはだらだらと冷や汗が浮かび、両手が忙しくもちやもちやと動いている。ついでに目はぎよろぎよろだ。それを見て、千寿郎の泣き声がより一層ひどくなった。地獄絵図である。杏寿郎の頭は完全に動きを止めた。

坊ちやん二人の様子に夕映は苦笑いを浮かべ、腰を上げる。

「ちよつと、ちい坊ちやんと一緒にお散歩に行つてきますね。日暮れ前に帰りますから」

「ああ……二人とも、すまない……」

「そんなに落ち込まなくつたつていいんですよう！ ちい坊ちやんがおしやべりできるようになる頃には笑い話になってますつて。それではいつてまいますね〜」

ふぎやあああ！ と雄々しい泣き声をあげながら、千寿郎は夕映の胸に頭をぐりぐりと押しつけている。「よしよし、姉やがいますよ、大丈夫ですよ」と千寿郎をあやす声が聞こえる。次第にそれらが遠ざかっていき、杏寿郎は一人、静かな庭に取り残された。

「ううん……やはり俺はまだ、父上のようにどつしり構えるということができんなあ……」

手持無沙汰な左手がわしわしと後頭部を搔く。いつもはきりつと上を向いている眉も、すっかり困りきって情けなく下がっていることだろう。ひとつため息を吐いて、杏寿郎は修行のために移動を始め

た。

乳児の成長速度というものはとんとすさまじい。杏寿郎は日々、それを実感するばかりである。

溜火が回復していくにつれ、千寿郎はどんどん人間に近づいていく。喃語をよく話すようになり、きやつきやと笑うことも増えた。この頃には溜火の妊娠がわかった日から一年ほど経っており、いやはやまさしく光陰矢の如し。次第に首が据わり、一日飲むか寝るかだったのが嘘のように周囲へ興味津々だ。榎寿郎が任務に当たっている間に寝返りをし、自力で座れるようにもなった。簡単な言葉を話せるようになり、さらにハイハイを覚えてからは、お気に入りの相手に突進していく。この風景が日常となつて久しい。今のところお気に入り的一位が溜火で、二位が夕映だ。兄と父が最下位争いをしているという現状は、なんとも言えない物悲しさを二人に味わわせた。

さらには初めて話したはつきり意味のある言葉が「ね！」で、夕映の顔を見ての言葉だったため、男二人は眉を下げるやら、当の少女は恐縮して縮こまるやらで、楽しそうに笑っていたのは溜火だけだった。

自力で移動できるようになると行動範囲も増え、全体的な運動量が増えた結果体力もつく。要するに、気に入らないことに対して泣いて暴れるようになった。杏寿郎のたつこ技術は努力のすえ大きく向上し、寝ているのを抱き上げて運んでも起こさない領域まで届いていたが、問題は榎寿郎である。仕事柄毎日顔を合わせる事ができず、柱ゆえの担当区域の広さから家を空ける日も多い。そして駄目押しのよう千寿郎の人見知りが始まった。結果、抱き上げれば海老反りをして大泣き、父上の「ち」の字もその口からは聞けず、それどころか顔を見せただけで誰かの後ろに隠れられる始末。

これは、父親として認識されていないに違いない。榎寿郎は落ち込んだ。ものすごく落ち込んだ。寝室で二人きりのときに、妻に甘えるくらい落ち込んだ。

自分が父だと千寿郎に教えるためにも、毎日一度は帰宅しなくては

なるまい。榎寿郎は腹を決めた。副次的に榎寿郎の技は冴えに冴え、彼が毎朝家に戻るために多くの鬼が露と消えたことをここに記しておく。足繁く顔を見せた甲斐あって、千寿郎は父に抱き上げられても泣かなくなつたし、教えた呼び名で呼んでくれるようになった。これで皆一安心である。

そうやって、季節の螺旋は上へ上へと伸びていく。

半年後には千寿郎が二歳になる。その頃には夕映も七つだ。夫妻は小学校に通うよう勧めてくれた。今は予習と称して溜火から手習いを教わっており、手本のいろは歌を写すのが日課である。時折榎寿郎が顔を出して、「心を落ち着けるのにちょうどいい」と杏寿郎を手招きすることがあるくらいだ。

夕映は、榎寿郎が言っているのは建前で、子供たちや妻と交流するために溜火の部屋を訪れているのではないかと勘繰っていた。少しでも身体を休めたいはずの昼間にわざわざ足を運んでいるのだ、そう思うのも当然だろう。しかし殿方というものは好意の類をおおっぴらにされるのを恥ずかしがる傾向にある。榎寿郎も例に漏れずそうだった。だから夕映は知らんぷりを続けているのだ。もし坊ちゃんに教えたらすぐに顔に出してしまうだろう。いや、もしかしたら「父上は本当に母上が大好きですね！俺も父上と母上が大好きです！」くらい言う。はきはきと話す声が聞こえるほど容易に想像できた。そのため、察したことはちよつとも伝えていない。秘するが花、沈黙は金。だって野暮ではないか！夕映は、宝物は大事に隠す性質／たちである。

日々の頁はめくられる。季節を跨いだら千寿郎は二足歩行を完璧に習得し、会話での意思疎通ができるようになった。溜火の体調も大幅に改善し、今は夕映がこの家に来たときのように家を取り仕切っている。

近頃夕映は彼女に料理を習っていた。と言っても包丁は触らせてもらえず、野菜を洗ったり、きれいな盛り付けの仕方を教わったり……あとはひたすら煉獄家の家庭の味を覚えることに専念している。いつも食べている彼女の作る食事が経験と歴史でできているという

のは不思議な話だ。

自分の母の味もこうやってできていたのだろうか。今の夕映は、もう母の作る味噌汁の味すら明瞭に思い出せなくなってしまった。こうやっていろんなことを忘れていくのだろうか。とてもさみしいことだけれど、枯れない花とあしたの約束は夕映の手を引いて未来に連れていってくれる。千寿郎という新たな宝物が生まれてきたことも大きいのだろう。毎日成長して昨日を塗り替えていく子供を見守ることが楽しくて仕方がない。

夕映が杏寿郎と行う修行も木刀を握ってのものが増え、今は彼のあとに続き榎寿郎から「呼吸」の指南を受けている。これがなかなか難しい。なにせ息を吸って吐くというのは人間が生きていくために必要不可欠なもので、無意識でも行われるものだ。それを意識して行い、制御して、体内の血管一本一本、筋肉の隅々までに力を巡らせるというのは言葉で述べる以上に難しい業である。しかしこれを少しでもやるかやらないかはとても大きなことだった。毎日呼吸の訓練を続けていたら、半月で打ち合いを続けられる時間が大幅に伸びたのだ。「呼吸は基礎だからな」と、榎寿郎は茶目つ氣をにじませて笑った。

「しかし君は身体が柔らかいな！ 関節の可動域も広いし、平衡感覚も優れている！」

「そ、そう、ハア、でしょ、ツゲホゲホ、か？」

夕映は木刀を杖のようにして身体を支え、咳き込む。その顔は熟れた林檎のように真っ赤で、額には大粒の汗が浮かんでいた。榎寿郎はにこつと子息そっくりの笑顔を浮かべ、少女の細い肩を上からぐつと押す。すぐに彼女は尻もちをついた。

「うん、ちゃんと話せるようになるまで、集中して呼吸を整えるように。さて杏寿郎！ 夕映に手本を見せるつもりでかかってこい！ どこから打ち込んできてもいいぞー！」

「はい！」

いつまでも、この幸せが続けば。こんな風に一年を繰り返していけたら。——そう思ったときほど、別れは嘲笑うように顔を覗かせる。

瑠火が病にかかった。夫妻は「少し重い風邪だ」「休んで栄養をたくさんとればすぐに元気になる」と明るく話していたけれど、それが一週間、二週間、一か月、二か月と終わりが見えない状況になれば嫌でも状況に気づく。日に日に瑠火が伏せる時間は長くなり、その喉からは重苦しい咳が吐き出され、髪と肌は色あせていく。処方された薬は気休めになっているかも怪しい。

二人は嘘をついている。杏寿郎も夕映も、おのずとそのことに気づいた。気づいたからといってなにか特別なことができるわけではなくて、一日一日を惜しんでいるせいか日が過ぎるのがやけにのろく感じるのだ。それがかえって焦燥感をあぶる。爪先から冷え込んでいく冬の夜のように、ふと心細くなる。

楽しみだつたはずの明日が急に怖くなった。明日になったら、瑠火がいないかもしれないから。

杏寿郎も、榎寿郎も、瑠火と二人きりになりたがることが増えた。そういうとき夕映は千寿郎を連れて街まで出かけるのだ。瑠火が喜ぶようなきれいなものを探して、甘い飴を買って、家に戻ったら、お土産を渡す任務を託された小さな千寿郎は母親のところにつっ飛んでいく。そのあとをゆっくり追いかけて、夕映は熱いお茶を用意する。四人分の湯呑を盆にのせて襖を開けたら、はしゃぐ千寿郎のおしやべり。それを二人が楽しそうに聞いている。三人が笑っているのを目で見て、耳で聞くと、ようやく夕映も安心して笑うことができた。

だが、この麻酔のような日々もいずれ増していく痛みに追いつかなくなるだろう。誤魔化しが効かないくらい、瑠火は儂く弱つていった。夕暮れのヒグラシが切なく鳴くように。名残の雪が土に染みていくように。その玉の緒が途切れてしまう日は近い。

みんな気づいている。気づいていて、何人がそれを覚悟できているだろうか？ 認められているだろうか？ 夕映はいまだに受け入れられないままだ。まだ瑠火から教わりたいたことはたくさんある。まだ彼女に生きていてほしい。別れたくない。置いていかないでほしい。泣いて縋って駄々をこねて言えるならましだったのだろう。言

えないからこんなに苦しい。

(坊ちゃん方や旦那様を差し置いてそんなこと言えない。奥様を心配させることはできない)

その日も彼女は丁寧茶を淹れて、瑠火の部屋へ運んでいった。

これから話すことをよく考えなさいと前置いてから、彼女はじつと杏寿郎を見つめる。

布団の足元で千寿郎がすっかり寝入っている。当分起きないだろう。母が自分に大切なことを話すのなら、都合がよかつた。きつと彼女も時を見計らっていたのだろう。杏寿郎は一言一句を聞き洩らさないよう、背筋を伸ばしてぎゅつと拳を握り込んだ。

「なぜ自分が人よりも強く生まれたのかわかりますか」

杏寿郎は即答できなかつた。考えてもわからない。答えられない。だから素直にわからないと返す。

弱き人を助けるためだと、厳かに母は言い切つた。

強く生まれた者はその力を正しいことに使わなければならない。人を守ることに、助けることはその最たるものである。それは責任をもつて果たさなければならぬ、天より与えられた使命なのだ。煉獄の家に生まれた以上、鬼殺隊の柱となることは決定事項。たとえ血反吐をまき散らそうが、命を懸けて人を食う鬼と戦い続けなければならない。どんなに強い相手であろうともだ。上弦を倒せば百人単位で人が助けられる。

わかりますか、と瑠火が重ねて問う。杏寿郎は唾を飲みこんで、力いっぱい返事をした。自分の本気が伝わるように、はつきりと。

瑠火は瞑目し、ふうと息を吸う。そして目を開いて、杏寿郎を手招きした。きよとんとしつとも杏寿郎は膝でにじり寄って瑠火の正面に移動する。

ふわり、と。白檀の香りが杏寿郎を抱きしめた。母の手は少しかきかきして、ひんやりと冷たい。このかいな抱かれるのはいつぶりだろうか。煉獄家に子供が増えるのに比例して杏寿郎が母に甘えることは減っていた。近頃は夕映が気を利かせて母と二人にしてく

れることが多かったけれど、それでもこんな風に触れ合うこともしてこなかった。いつもより少しだけ長い時間を過ごすことで、自分は別れの準備をしようとしていたのだ。母の些細な仕草、涼やかで柔らかい声、着物に焼き染められた香りを焼きつけて、いつまでも覚えていられるように。千寿郎が大きくなったときに母の話をたくさんしてやれるように。いっぱいいっぱい考えて、そう決めた。

頭を撫でる母の手。胸がぎゅっと締めつけられる。

「強く優しい子の母になれて幸せでした」

私はもう長く生きられないと母は一筋、涙を流す。杏寿郎も泣き止まらなかった。鼻の奥がツンとして、今すぐにも泣き止めてしまいたかった。けれど杏寿郎は我慢する。今ここで泣いてしまったら、母が心配してしまうからだ。

「あとは頼みます」

歯を食いしばり、顔を真っ赤にして、杏寿郎はコクンと頷いた。

この言葉はこれから彼を導く光であり、明日の彼の血肉と骨子を形作る言葉であり、そして未来の彼を縛る呪いになる。

杏寿郎は長く生きられまい。襖越しに夕映はそう直感した。

強く生まれてきたのは人を救うため、人を助けるために生きろ、なんて。それは本当に人間がやるべきことだろうか。神や仏が見せる所業ではないのだろうか。

鬼はいともたやすく人を殺してその血肉をすする。夕映の父母があっけなく死んでいったように、昨日食われた人がいてもおかしくないし、明日食われる人もきつという。そのときにならなければわからないだけで。しかしその可能性を潰すために榎寿郎は戦い、彼の背中を追うべく杏寿郎も修行をしているのだ。

そして溜火は鬼とはまったく関係ないことで三途の川に足を浸している。なんて歯がゆいのか。

(私に、なにができるだろう)

杏寿郎はこれから多くの人を救うだろう。夕映の心を照らしたときのように、太陽のごとく輝いていくのだろう。その手伝いがした

かった。杏寿郎には味方がいっぱいいるから、その中の一人になれるだけでいい。

気配と音を殺して夕映は立ち上がる。用意した茶はすっかり冷めてしまった。新しいものを淹れてこなくては。細心の注意を払って、彼女は台所へ急いだ。

その間にも、頭はくるくる回った。自分にできることがあるとするなら、今までと同じように家を整理、彼ら親子が帰ってくる場所を守るか——もしくははいつそ、夕映自身が鬼殺の隊士になってしまうか、だろう。

どちらを選ぶにしても、より一層真剣に打ち込んでいかなければなるまい。もうすぐ溜火はいなくなってしまう。しばらくは近隣の親類が手伝ってくれるだろうが、いずれは夕映が一人で家のことを切り盛りしていかなくてはならない。槇寿郎が後妻をとるか、杏寿郎が成人して結婚するまでは、夕映は一家のために身を捧げるつもりだ。

もつとも、前者は空が落ちてくるくらいありえないことだろうが……。夫妻は強く愛し合っている。二人を引き裂けるものは男も女もないに違いない。夕映は、二人の愛をなにより信じていた。

新しく淹れた茶を持って、夕映は襖を開けた。ぺかっとわざとらしくいくらいに明るく笑ってみせる。

「奥様、坊ちゃん！ お茶が入りましたよう！」

二人は、澁刺と笑む夕映につられるようにほんのりと微笑んだ。

（本当につらいときは、人の笑い声も、お天気によさすら鬱陶しくなってしまうからね。でも夕映は明るいままですよ。どんなにさみしくたって。だって、奥様を不安にさせたくないのですもの……）

溜火が逝つたのはその五日後だった。あまりにも短い人生だった。

発見したのは、朝方に帰宅した槇寿郎だ。彼の妻は、眠るようにならなくなっていた。通夜と葬式は淡々と、粛々と進む。もつとも取り乱したのは、溜火の母だった。「親の私より先に死ぬなんて」「なんて親不孝をするんだ」「私が替わってやれたら」「どうして」——彼女が堰き止められない涙を流す一方で、千寿郎は事が理解できていないよう



だったし、榎寿郎はぎりぎりの綱渡りをするような緊張感を全身に纏っている。

杏寿郎と夕映は、お互いの目を見てしっかり頷いた。自分たちがしっかりしなくては。

その誓いはまだ続いている。ある日、糸がぷつぷつ切れた榎寿郎がすっかりふさぎ込んでしまったあとも。炎柱が榎寿郎の後任から杏寿郎へ代替わりした今も、なお。

## 原作時間軸1 出稽古

開いた障子の隙間から差し込む日差しで、杏寿郎の意識は覚醒した。目を開けた先にあるのは見慣れた天井だ。染みの位置も、木目の調子も見飽きるほど見た自分の部屋。腹筋に力を込めてがばっと起き上がり、てきぱき布団を畳む。

長い夢を見ていたように思う。久しぶりに母と会った。あの人は今も自分たちを見守っていてくれるだろう。きつと。

夜着を整えてから部屋を出て、空を見上げた杏寿郎はにつこりと笑った。今日も快晴だ！ 太陽の位置は中天より低い。午後まで寝過ごすことがなくてなによりだ。うむうむと頷きながら、杏寿郎は廊下を歩き出す。すると、角から彼女の気配がした。そのすぐあとにひよっこりと少女が顔を出す。

「あらあ、まだ寝ていらっしやってもよろしかったのに」

ととと、と近づいてきた夕映は口元に手を当てて眉を下げる。杏寿郎はそのぼむぼむと肩を叩いて首を振った。

「いや、充分休んだ！ やはり自分の布団は違うな、よく眠れたぞ。千寿郎は？」

「今は学校の時間ですよ」

「む、そうだった、そうだった。いかなあ、自分が行っていた頃が遠くなるとすぐに忘れてしまう」

「ふふ、坊ちゃんももう十八になられますからね。あんなに小さかった千寿郎坊ちゃんやんが立派に学校に行つて、坊ちゃんは柱になられて……時の流れとは本当に早いものです」

「そうだな……君が来てから十年も経ったか。うん！ 確かに早い！」

十年の間にいろんなことが起きた。夕映が初めて水の呼吸の育手の元に出稽古に行ったときのこと、千寿郎の入学式も、自分が柱になったことも。

不意に杏寿郎は、すつと冷たいものが喉を通り抜けるような感覚を味わう。この少女は十年も自分たちに、この家に尽くしてきてくれ

た。それに対し、己は――

「俺は、君に報いられているだろうか」

ころりと、静かな声が落ちた。足が止まる。

振り返った夕映がきよとんと目を丸くする。それから、ぷつと嘔き出してけらけら笑った。なにを言っているのか、と言わんばかりに肩を震わせている。「ああおかしい」と呟いて、彼女は浮かんだ涙をぬぐった。

「坊ちゃんが健康で、五体満足で、ちゃんと帰ってきてくださるだけで夕映は満足ですよ！」

その言葉に、柔らかく笑い返して。談笑に花を咲かせながら居間へ向かって歩いて。

それでも杏寿郎は胸が詰まる思いだった。陽の下で頬を赤らめて笑う彼女は、美しく育った。そろそろ結婚の世話をしてやらなければならぬのだらう。父が使い物にならない以上、他ならぬ杏寿郎自身が。

(ああ、でも)

あばらの奥に収まった臓器に近いところがつきりと痛む。

(きみが頷いてさえくれれば、いつでも俺の妻にするというのに)

柔らかな風が杏寿郎の頬を撫でた。

十年。子供が結婚適齢期に差し掛かるほどの時間を、側で過ごしてきた。彼女が作る料理は母の味を継承した上で杏寿郎たちの好みに寄り添ったもので、千寿郎を育てたのもほとんど彼女で、もし彼女がいなくなったらこの家の男たちがろくに生活できるかも、とんと怪しいくらいなのに。それなのに杏寿郎は探したくもない彼女の結婚相手を探し、縁談を持ってこなければならぬのだ。主人一家の長男として。そして夕映は間違いなく、「坊ちゃんが選んだ方なら」と嫁いでいってしまう。

杏寿郎が二の足を踏んでいるのは、ひとえに彼女が自分をそういう対象として見ていないからだだった。いつまでたっても「坊ちゃんはお仕える方ですから」の一点張りで、そのくせ浮いた噂もない。どころか人の気も知らずに「坊ちゃんにお見合いの話をいただいたんです

よう！」とにこにこ笑いかけてくるとききた。いくら杏寿郎がズレているとか、鈍いだとかきんぎつぱらなことを同僚に言われているが、ここまで来たら嫌でも気づく。夕映にとって自分は「男」ではないのだ。彼女は杏寿郎の性別に意味を見出していない。彼女が見ている杏寿郎という人間は「仕える相手」で、それ以上でも以下でもない、杏寿郎や柱たちにとってのお館様のように絶対的な存在である。

(俺はきみ以外考えられないのにな?)

当たり前のようにならずと好きだった。そうでもなければ、本人の意思を無視して無理矢理危険から遠ざけたりなどしない。杏寿郎は認めざるを得ない。己を突き動かすエゴには、愛情という名がふさわしいのだということ。

熟成され過ぎた思いは燃える激情を通り越して、凧いだ湖面のように穏やかだ。そのくせ、少し掘り下げればぐつぐつ煮えたぎる独占欲が顔を覗かせる。だから「彼女が幸せならいい」などという薄っぺらな言葉を、うわべだけでも取り繕うことさえできないのだ。本当は俺のものだと宣言して独占したい。気づかないふりを続けているだけで、実際は顔も知らない彼女の文通相手すら憎らしいのだ。

きみが初めて俺に向かって笑った日から、ずっときみに恋をしている。る。

「枯れない花を」と約束したのを覚えているのは俺だけだろうか。どうして、君は俺だけのものになってくれないのだろう。



奥様、ああ、奥様。私、お料理もお裁縫もお習字も、みんなみんな奥様から習いました。私が作る料理はすっかり煉獄家の味です。ふふ、おかしな話ですね？ 自分の親からなんにも受け継げなかったのに、私がこの家の歴史の一端を担うことになるなんて。奥様がいなくなっても、奥様からもらったものを、私は繋いでいきますからね。今の夢は覚えたたくさんのことを坊ちゃんのお嫁さんに伝授すること

です。夕映は立派な姑になりますよう？

奥様はよく坊ちゃんに妻にならないかと言ってくれました、もったいないお言葉です。でも、夕映は坊ちゃんに妻にはなれませんが、だつて命をそっくりそのまま捧げてしまえるから。それは、旦那様と奥様のような関係とは、違うかなと思うのです。夫婦に必要なのは自分を犠牲にすることじゃなくて、「ふたり」をずっと続けることだと夕映は考えています。

ですから、ですから奥様。どうか旦那様と坊ちゃんたちを見守っていてくださいね。奥様の代わりになれる人なんて、この世のどこにもいないんですからね。夕映がいくら頑張ったところで奥様の代わりには決してなれないのですよ。忘れないでくださいね。奥様はこの家の光です。

今だけは、こう呼んでもいいのかな。おねえちゃん。私、生きていくから。これからも。おねえちゃんのいない世界で。おねえちゃんの宝物を守るためなら、私、なんでもするわ。



十五歳になった今も、夕映は年に一度、水の育手のところへ一か月の出稽古に行く。事の始まりは、溜火が亡くなった一年後、夕映が七歳の時分に榎寿郎が言い出したことだった。

「君は今の時点で平均より背が高いし、手足も大きいから、これからどんどん身長が伸びるだろう。身体が大きいのは筋肉量と比例するから非常に有利だ。しかしその柔軟性や平衡感覚を活かすには、炎の呼吸は『剛』の業、ありていに言っただけでいい！」

「えっ」

「そういうことで別の呼吸の使い手のところに修行に出す！ 俺の父上の代の水柱が狭霧山という場所で育手をしているからな、そこで一月ほど稽古をつけてもらいなさい」

「え、え、でも、一月も留守にして大丈夫ですか？ 坊ちゃんたちはどうされるんですか？」

「杏寿郎と千寿郎は義母上たちに見てもらおう。俺もしばらくは鬼狩りの警戒範囲を広くしようと思う！ 君はよくやつてくれている！ たまには家のことから離れてもいいだろう」

「はあ、そういうことでしたら……」

ずいっと迫られると夕映は断れない。勢いに吞まれるまま、彼女はこつくり頷いた。うむ！ と笑って、うんうんと数度首を縦に振る榎寿郎は、いつか見た彼の息子と同じ表情を浮かべている。

（ほんと、坊ちゃんも旦那様は造形がそっくりだわあ。そのまま大きさを変えたみたい）

つられて、夕映もくすりと笑った。そして、こんな風に榎寿郎が笑えることに安心する。

溜火という大きな歯車が欠けて、一年。喪中の、火の消えたかまどのような空気は薄らいだが、それでも煉獄家の噛み合わせは少しずつれてしまったように思う。榎寿郎が無理をしていないか杏寿郎と夕映は心配でならないが、最愛の妻に先立たれて、さらには忘れ形見の幼い子供たちがいて、悲しみに浸り続けるには毎晩無辜の人々を守るために駆け回らなければならぬときたら、無理をするなど願う方が無理だろう。子供たちは父の、主人のもたらす庇護を信じていなければ生きていくことすらままならない。子供と大人を隔てる壁というものはそれだけ絶大だ。「あと五年早く生まれていれば、父上も俺のことをもっと頼ってくれていただろうか……」と漏らした、杏寿郎の寂しげな横顔を、夕映は忘れられない。

あとから思えば、みんなほんの少しずつ無理をして、いつも通りの日常を組み立てていた。いつそれが破綻するとも知れぬ、薄氷の上で成り立つ安らぎを。砂上の楼閣のような日々を壊すまいと、できることは全部やっているけれど、限界は少しずつ近づいているに違いなかったのだ。

「夕映」

「はいっ」

榎寿郎が、真剣な声色で自分の名を呼ぶ。彼女はいつものように顔を上げて、息を呑んだ。癖で背筋がぴんと伸びる。

「君は、鬼殺隊に入るつもりはあるか」

榎寿郎はじつと夕映を見下ろしていた。静かな眼差しは得も言われぬ迫力を醸し出していて、少女は怯んだ。はいと答えたらいいのか、いいえと答えたらいいのか、どちらを望まれているのか——どちらが正解なのか、咄嗟にわからなくて口ごもる。

ひとつひとつ、彼女は整理をして、ゆっくり答えを組み立て始める。己の両親は鬼によって殺された。榎寿郎が助けてくれなければ、夕映も同じように死んでいたことだろう。しかし、鬼への明確な憎しみがあるかという点、少し迷ってしまう。父と母が殺されたことは、間違いない。夕映の人生というものを捻じ曲げた。その元凶は鬼であるから、鬼を恨み鬼殺を志すのが順当なのかもしれない。

だが、夕映は三年前の……心が真っ黒に塗りつぶされて、なにもかもを拒絶していた頃のことをほとんど覚えていない。あのときの感情を引きずり続けていたら、なにもできなくなっていたに違いないから、忘れてしまったこと自体はいいのだ。ただ、両親が死んだ瞬間のことでも遠くなってしまった。衝動のような恨み、憎しみは、この身体にもう残っていない。

杏寿郎も、そんなものは味わったことがないだろう。彼はただ鬼狩りの家に生まれたから鬼狩りになる。もちろん、そこに義憤の類は持ち合わせているだろうが。

「鬼は、殺さなくてはなりません」

噛みしめるように呟いた。

仮に鬼へ抱く感情があるとすれば、「殺さなければならぬ」という義務感だろう。そこに憎しみや悲しみはない。人間として生きていて、隣人を愛し、鬼によってもたらされる死を痛ましく思うなら——鬼はすべて殺さなければならぬだろう。

異様なまでに静かだ。庭先からは鳥の鳴く音すらしない。屋敷のどこかで遊んでいるはずの兄弟たちの声も。なにも。水を打ったような静けさが部屋を覆っている。注がれる眼差しが刺さるようで、夕映はふいつと榎寿郎から目を逸らした。

「鬼によって大切な人を亡くす経験をする人が、いなくなればいいと

思います。いつか鬼殺隊そのものが必要とされなくなるのが、きつと一番いいことです」

ただ、たとえ鬼がいなくなつて人は死んでいく。変わらずこの世のどこかで子殺しを働く親はいるし、逆に親を殺す子や、溜火のように病を患つて死んでいく人間はいて、呆気なく人の命というものは奪われ続けるのだ。だが、人の命を食い物にする化け物たちがいなくなれば……日々死んでいく人々のうちの何割かは、一日を生き延びられるのかもしれない。

幸い夕映には剣の才能がそれなりにあつて、環境にも恵まれていく。勧められるがまま始めた修行だが、それによって人を守れる、救えるのなら、そうするのが正しい力の使い方なのだろう。病床の溜火が杏寿郎に説いていたように。正しく力を振るうのが力あるものの義務のはずだ。本当はただ、そうすべきなのだ。

(でも)

でも、夕映が守りたいのは不特定多数の、顔の見えない弱き人々ではない。今日の前にいる人たちだった。

短い呼吸を二度三度繰り返して、夕映は顔をあげた。

「でも、私は命を煉獄家の皆様に捧げるつもりです。ですから、旦那様や坊ちゃんやんが剣を握れとおっしゃるなら粉骨碎身の覚悟で戦いますし、やめろと命じられるのでしたらそれに従います」

「……そうか。君は、そう答えるのだな」

槇寿郎は顎に手を当て、ひとつ頷いた。穴が開きそうなほどにじつと注がれていた視線が逸らされる。

それきり、問答は終わった。もう槇寿郎は「鬼を倒せ」などと言わない。どころか、柱になった長男に鬼殺隊を辞めろと言いつつ、次男を継子にするつもりもないのだろう。なにも言わない。期待をかけるようなことは、なにも。諦念の沼に足をとられて浮かび上がれなくなつた。彼が柱を辞してからの暮らしぶりは自堕落と言うしかないだろう。毎日毎日、布団の上で横になって歴代炎柱の手記を徒に読み、酒に酔うことなどなんとか眠りにつくような生活を送っている。

一介の女中に過ぎない夕映にできるのは「布団にかびが生えてしま



いますから」と外に行かせたり、将棋や碁に誘ってみたり、健康に配慮した献立を組むことくらいだ。当たり障りのないことしかできない。頻繁に兄弟の面倒を見てくれていた彼らの祖父母も今は亡く、まだ幼い千寿郎には埋まらない寂しさを抱かしていることだろう。

できることを全部やつても、自分の力は全然足りていない。それを悲しく思ったところで現実は何にも変わらなくて、杏寿郎に鬼殺隊への入隊を却下されても未練たらしく年に一度の稽古に出かけ、千寿郎に稽古をつけ、屁理屈をこねて杏寿郎を支えようともがくばかりだ。まさに八方ふさがり。この家の空気は、停滞しきっている。あと少し、なにか嵐のようなきっかけさえあれば、現状の打破はできるだろうが……。そんな希望的観測に頼らざるを得ないほど、家族の間は閉塞感で満ちていた。

（私は家族の「ような」もので、家族にはなれないし。もし姓を煉獄にしていたって、きつとなにかを負い目にしていただろうし。ああ、なにも変わりやしないわあ）

登る山道は慣れた道のもので、考えごとをしても迷うことはない。呼吸を意識しながら走る。徐々に空気が薄くなっていく。時折野生動物の気配を感じながら、踏み固められた道を彼女は疾走する。師範が住んでいる小屋が見えるまでもうすぐだ。自然、気持ちは上向いていく。季節の便りには新しい弟子を取ったと書いてあった。今度の子供はあの試練を抜けるだろうか？ 今は水柱となったかつての男の子を思い出しながら、ただ駆ける。

気配がする。すれ違ってきた野生動物とも、点在する獵師たちとも異なる、特に強く存在を放つ師範の気配。そのすぐ近くにいるのが新しい弟子に違いない。組み手をしているようで、師範に斬りかかっては投げられているようだ。少し懐かしくなって、夕映の口許は緩んだ。

炭治郎は不意に花の香りを嗅ぎ取って動きを止めた。

（誰かが近づいてきている……？）

鱗滝の様子を窺ってみると、彼はもっと早くに気づいていたよう

だ。炭治郎が気づいたことを察知し、「お前の姉弟子だ。今日から一月逗留する」と言つて構えを解いた。それに従い、炭治郎も刀を鞘に納める。ぼたりと汗が落ちて、土に染みを作った。

投げられまくった身体中のそこかしこが痛い。筋肉の一本一本が悲鳴をあげるようだ。息を吸うごとにどこかが痛むので、教わった「呼吸」を実践するのがとても難しい。ともすれば息が上がる。その間にも、匂いは近づいてくる。

(いや、速くないか!?)

その速度に炭治郎はおののいた。まるで崖を駆け下りる鹿のような軽快さと速さ。彼が香りに気づいたときは二十町ほど距離があったはずだが、猛然と駆けてくる彼女（姉弟子だというから、恐らく女性なのだろう）は今や三町先までたどり着いている。なんて速さだ！炭治郎は舌を巻いた。弟子入りの際に試された通り、鱗滝の足の速さも大したものだが、この人はそれを上回るかもしれない。

ドンツ!!

それが踏み込みの音だと気づいたのは、跳躍してくる女性がすぐ近くにひらりと着地したあとだった。深い紅色の小袖がふわりと膨らむ。同時に、梅の香りが広がるのを炭治郎の鼻は感じた。

「お久しぶりです師範！ 不肖の弟子、ただいま到着しました！ 今年もお世話になります〜！」

うむ、と鱗滝がひとつ頷く。

「健勝のようだなにより」

炭治郎の嗅ぎとる匂いが優しいものになった。女性の方もにこにここと笑う。垂れ気味の目が一層垂れて、彼女の愛嬌をより深く表していた。

「あつ、この子が手紙に書いてあった新しいお弟子さんですねえ！」  
彼女はすぐに炭治郎の存在に気づいて、ちよちよつと近づいてくる。正面に立たれると、目線が自分より少し上にあることに気づく。背の高い人だ。

「はっ！ 初めまして！ 竈門炭治郎といいます！」

ペコーツ！ と頭を下げると、「まあ礼儀正しい」と微笑まれた。と

くり。小さく胸が高鳴る。顔がぽつと赤くなるのを感じて、あわあわと顔を伏せる。

彼女は、篝夕映と名乗った。ふわふわ揺れる濡れ羽色の髪と、自分と同じ赤い目の、淡く梅の香りを纏う人だった。

そのあとは彼女も炭治郎の修行に付き合ってくれることになって、鱗滝と交代した夕映に炭治郎はひたすら投げられた。若い女性が相手ならあるいは、と一瞬でも思った自分を炭治郎は強く恥じた。性別や年齢と強さは相関しない。どれだけ力を込めて強く踏み込んでも、頭から突っ込むつもりで斬りかかっても、気づけばふわりと自分の身体は宙に浮いていて、全身と地面が熱く接吻を交わしているのだ。もはやなにが起きているのか脳の理解が追いつかない。するりとその手が触れたかと思えば、炭治郎は転がっている。鱗滝の投げは炭治郎の飛距離がどこまで伸びるか試すようにぶん投げるもののだが、彼女の投げは風にくるむようにぽんと炭治郎を飛ばす。彼女の動きはしなやかで、速く、やわらかい。力で叩きのめすのではなく受け流すことに長けた動きだ。

身体が地面に触れたと認識したらすぐにと飛び起きて、また飛びかかっていくという、「受け」を肉体に叩き込む訓練ではあるが、「箸より重いものは持ったことがありますよ」と言われたら信じてしまいうようなほど洒脱で上品な人に軽々投げ飛ばされるのは頭が非常に混乱する。

それを食事のときに本人の前で漏らすと、彼女はけらけらと軽妙に笑った。

「まあまあ、上品で洒脱！ 炭治郎くんが思うほど、私、いいところの出じやありませんよう」

「えっ！ そうなんですか？ 俺、てつきりどこかのお嬢さんだと……」

だって、いい香りがするし。着物にはどこのほつれだってない。まとめられた髪は都会風でおしゃれだ。手は剣だことあかぎれが多いが、鬼殺の剣士を志しているなら前者は当然のことで、家事をしたら嫌でも手が荒れる。女性ならなおさらそうだろう。

母の手、妹の手を思い出して、炭治郎はぐつと胸が詰まる感触を飲みこんだ。夕映は変わらずおかしそうに笑っているので、気づかれなかったと思う。

「お嬢さんだなんて、うふふ！　うちの家はただの町鍛冶でしたし、私はただの女中勤めですからねえ。今の奉公先にはとてもよくしてもらっているので、行儀作法や所作はそれに見合ったものが身についているとは思うけれど。それにしてもお嬢さん……っふふ……」

ツボにはまってしまったらしい。彼女は箸を止め、肩を震わせている。

(よく笑う人だなあ)

そしてその笑顔はあたたかく、やさしい。お日様の光のようだ。知らず知らず、炭治郎の気持ちもほぐされて、気づいたら口元が緩んでしまう。それは鱗滝も同じなのだろう。面を外した彼は静かに食事を続けているが、彼がくつろいでいることが炭治郎には匂いでわかる。

夕映の存在は潤滑油のようだった。人が一人増えるだけでこんなに違うのか、と炭治郎は驚かざるを得ない。ここに来て修業を始めてから三か月は経つが、食事の時間と団欒は結びつけられていなかった。鱗滝が課す修行についていくことで精いっぱい、舟を漕ぎながら箸を動かすことはままあったし、鱗滝は寡黙な人だ。必要なことだけを話し、無駄なことは言わない。会話が弾むということはほとんどなかった。

それなのに、夕映がそこにいるだけで場の空気がふわふわと和らぎ、あつたかい気持ちに満ちていく。まるで……。炭治郎は唇を噛んだ。

(家に、帰ってきたみたいだ)

彼女の匂いは母のそれとよく似ていた。生活の香り、そして誰かを慈しむ匂いが染みついていて。それに気づくと、ふいに目頭が熱くなった。

(母ちゃん、花子、竹雄、茂、六太……)

炭治郎の箸が止まった。

自分に帰る家はもうない。迎えてくれる家族は、上の妹以外みんな死んでしまった。血の惨劇が克明に頭に浮かび、手が震える。ここに来てから、あのときのことを思い出すことはなかった。修行でいっぱいだったし、疲れ切った身体は泥のような眠りを与えるばかりで悪夢すら見せない。それに、炭治郎の手にはまだ希望があった。妹の禰豆子は、鬼になってしまっても、生きているのだから。鬼を人間に戻す方法がまだ明らかにされていなくても、これから探していけばいい。兄ちゃんが絶対に守ってやるから。そうやって炭治郎は必死に前を向いていた。

(あ、これ、だめだ)

それなのに、ふと思いついてしまった。鼻の奥がツンとして、視界がほんの少しぼやける。たまらず、箸を下ろした。両手で目をこすり、あふれてきた涙をぬぐう。ぐうつと奥歯を噛みしめて耐える。そうでもしないと、悲しみに吞まれてどこまでも沈んでいきそうだった。今はそんな感情に浸っている場合ではないのに。

それに、せっかく食事の時間を楽しんでいたのに、突然泣き出したんじやあ台無しだ。二人を困らせてしまう。次から次へと頭は不安を書き連ねていつて、いつそう瞳が潤む。炭治郎はバシバシ自分の頬を叩いた。

(しつかりしろ、俺はできる、俺はできる……)

「炭治郎くん」

すい、とあたたかなてのひらが頬に触れた。皮の厚い指先がなぞるようにそつと顔を持ち上げていつて、炭治郎はそれに逆らえない。頬を叩こうとする手を止め、隣に座っている彼女を見た。

「……は、い」

喉がカラカラだ。ひりつくように痛む。声はひっくり返っていて情けない。

しかし彼女はなにも気にしていないとばかりににこりと笑い、やわく炭治郎の頬を包み込んだ。それから数度、両手でもにもと揉み、両肩を軽く叩いて、炭治郎の手をとる。

「こつちにおいで。師範、ちよつと席を離れますね」

「ああ」

ぽかんとしている間に、彼女に促されて炭治郎は立ち上がり外へ連れ出されていた。呆然と開かれたまなこからぼたりと雫が伝い落ちる。繋がれた手はゆらゆらと揺れていた。ゆらゆら、ゆらゆら。血の通う手はあつい。

小屋から少し離れた開けた場所で、彼女は足を止めた。ちょうどいい切株に座るよう促される。炭治郎は大人しく従い、二人は並んで座った。肩が触れ合いそうな距離だ。

夕映は視線を上向けて夜空を見上げる。手は、まだ繋がれている。気づけば涙は止まっていた。

「ここは空気が薄いから星がはつきり見えますねえ。炭治郎くんの住んでいたところではどうでしたか？」

「へっ？ え、えつと……俺は山育ちなので、街の灯りにはなじみがなくて……夜明るいのは、星と月だけでした。うち、炭焼き小屋なので」

「まあ、炭焼き。それはその目を喜ばれたでしょう」

「目……？ ですか？」

夕映は自分の目を指差して笑った。

「火仕事をする家では、赤みがかった髪や目の子供が生まれると縁起がいいと喜ばれるのですよう。私の実家も鍛冶屋だったので、火の神に祝福された子だとよく寝物語に聞かされました。もうずいぶんと昔の話ですねえ。思い出したのはいつぶりかしら？」

ふふ、とこぼれた吐息が闇夜に溶けていった。

聞き逃してしまいそうな一言だったけれど、炭治郎の鼻は彼女の哀愁をはつきりと感じとった。声音とは裏腹に、深い悲しみの匂いがする。それはどこからだろう、と違和感を手繰っていく。告げられた言葉がぐるぐると渦巻く。反芻される。

（鍛冶屋“だった”、のか。今、どこかのお屋敷で女中勤めをしているとしても、家族のことを思い出すのがとても久しぶりみたいな……）

彼女が鬼殺の剣士を志して修行をしているのは、もしかして。ごくりと唾を飲みこむ。口が重い。でも、聞きたいと思った。

「あの、夕映さんのご家族は……」

「十年ほど前に死にましたよ。鬼に殺されました。君と同じ」

なんてことのないように彼女は言った。微笑みは保たれたまま。炭治郎は悲しくなった。彼女は、悲しみも怒りも感じていない。香るのは追憶と懐古を孕んだ郷愁だけだ。ひとりになつてしまった寂しさだけが、彼女の心から感じられる。締めつけられる胸の痛みと共に、炭治郎の視線は下がっていった。

ぎゅっ、と手に力を込められる。顔を上げると、夕映は眉を下げて自分を見つめている。赤い瞳が、深く自分を覗き込んでいる。惹きこまれるように、炭治郎はその眼差しを見つめ返した。薄紅色の唇が小さく開き、少しの逡巡をにじませてから、彼女は言葉を紡いでいく。「家族のことを思い出してしまったのでしよう？ お節介を焼きすぎたてしまいましたね。ごめんなさい」

「夕映さんは悪くないです！」  
慌てて炭治郎は食って掛かった。鼻と鼻がくつつきそうなくらい顔を近づけて、はっと正気に返って謝罪する。赤くなる炭治郎とは反対に夕映はコロコロ笑った。面白がっているのがよくわかる。炭治郎は恥ずかしくなつて汗をかいた。

しかし、こういった彼女の気遣いや懐かしさを感じさせる空気は、確かに炭治郎の心にひとときの安寧を与えたのだ。狭霧山に来て以降、妹の禰豆子は眠り込んだまま目覚めない。鱗滝が手配してくれた医者がただ眠っているだけだと困惑しきりで首をひねっていても、それは炭治郎を安心させる材料にはならない。明日起きたら死んでしまつているのではないか、という不安から逃れようと日々の修行に打ち込んで身体を痛めつけ、修行・食事・排泄・睡眠という生活を繰り返しているのは事実なのだ。

夕食の席で会話を楽しんだのは、家族が死んだあの日以来夕映とのそれが初めてで、涙が出てしまったのは緊張の糸がふつりと緩んだから。昨日までの状態が続いていても、自分はずっと追いつめられていくばかりで、日に日にひどい焦燥感に掻き立てられていたことだろう。初対面の女性の前で涙を流したのは男として恥ずかしさを感じてしまうが、がちがちに力みきつていた身体と精神を自然体に近づけ

てもらった。感謝することはあれど怒る筋合いはない。

炭治郎がきつぱり言い切ると、夕映はぱちぱちと瞳をしばたかせ、じいっと炭治郎の顔を覗き込んだ。裏になにが隠れているか探るように、なにひとつ見落とさないように、目を皿のようにして彼女は己を見る。

「悲しみやさみしさをきちんと受け止められるなんて、君はすごい。とても強い。弱さを抱えたまま強くあれる人というのは珍しいわ」

呆然としたように呟かれた言葉に、炭治郎は目を剥いた。

「そんなことは」

「いいえ、すごいことなんですよ。家族を亡くして育手のところに来た子供はたいてい、ふさぎ込んで動けなくなります。最初から修行に打ち込める子は鬼やら、自分の無力さやらに対する怒りに支配されていて手に負えませんからねえ。そういう子はみーんな、師範がぼこぼこに叩きのめしてきたんですよ。怒りの感情そのものは悪鬼滅殺への原動力になるけれど、冷静な判断力を失わせて、結果、無駄に命を散らせることになりますから」

育手は基本的に剣士を育てる役だが、選ぶのは当事者の子供たちだ。剣を執る以外の道を選ぶなら繋ぎをとってどこにでも連れて行ってやれる。若い命をいたずらに終わらせたい人間などいるものか。鱗滝は特にそれが顕著だ。厳格さは優しさに裏打ちされている。子供たちはそれを知っているから彼を親のように慕うし、彼は丁寧に子供たちを育てる。愛しているから。死なせたくないから。

夕映は言葉が続ける。彼女の脳はまぶたの裏に穴色の髪をした子供の像を結んでいた。

「鬼殺隊への入隊希望者というのは、たいていが親兄弟を鬼に殺されています。君を師範に繋いだ人も同じ。そして、その多くが『自分と同じ思いをする人がひとりでも減るように』と身体を極限までいじめ抜いて、それでも彼我の差を埋めきれずに志半ばで死んでいく。まあ、近年は口減らして放り込まれるとか、高収入目当てに飛び込んでくる人間も増えているとかで、上は質が落ちていると嘆いているようですが。まったく、こんな割に合わない仕事をするくらいならやくざ



ものなり炭鋤夫なりになった方が生き延びられますよ。鬼に負けたら身体を食われて、その鬼が余計に強くなってしまいますし……餌を増やすのは本末転倒が過ぎる」

眉を寄せ、忌々しげに彼女は吐き捨てた。明確な怒りの匂い。それと共に、初めてその灼眼に怒りの炎が灯った。ちらりちらりと炎は揺れる。その苛烈さは大地を舐める業火を炭治郎に想起させた。これが彼女を突き動かす衝動だ。原点のひとつだ。膨らんだ怒気に炭治郎は為す術もなく飲みこまれたが、しかし、その焼けつく匂いはしゆるんと消えた。

困ったように彼女は笑っている。そこに嘘はない。外面を取り繕っているのではなくて、正しく彼女は感情を制御していた。優しい声音が耳をくすぐる。

「私も私で未練がましく修行を続けている愚か者ですが、君に教えられることは全部教えましょう。応援していますよ。そして、君のやわらかいところが余人に踏みにじられないことを祈っています」

繋がれたままのてのひらは、彼女が「自分はここにいる」と伝えてくれるようだった。ふ、と愉快的気持ちが込み上げてくる。

「夕映さん、俺の姉ちゃんみたいだ」

「あらあ、こんなかわいい弟ができるなら大歓迎ですよ？ おまけにとつても強くなりそう。鍛え甲斐があるわあ！」

ぽんと優しく背を叩かれ、炭治郎はまた少し泣いた。家族を想って泣く少年の肩を彼女は抱いて、ただ側にいた。

帰ってきた弟子たちは二人ともすつきりした顔をしていたので、鱗滝は黙って迎え入れた。弟弟子の方は目を赤くしていたが、わざわざ指摘するほど野暮ではない。彼は冷めてしまった食事をペロりと平らげ、日課の日記を書いたあとすこんと眠った。

その一方で、姉弟子の方は話があると鱗滝のところへやってくる。だいたいなんの話かは察していた。前置きとして展開される彼女の周囲の近況に耳を傾けつつ、鱗滝はただ待った。彼女が決定的なことを口にするまでは自分から話すことはなにもない。なにも、だ。気づ

かきのなら、それまでの話。すっかり一人前の女となった目の前の彼女もわかつているのだろう。頭痛をこらえるように頭を抑え、ため息を吐いた。

「師範。鬼を匿っていますね？」

「ああ。しかし事情がある。義勇から炭治郎と共に預けられた」

「はあ、義勇から？ 確かにちよつと妙な気配ですが……だからと言つてよりによつて柱が？ どういうおつもりです？」

するりと後ろ手が握っているものが明らかにされる。鱗滝の肝はちよつと冷えた。

「なにを考えていらつしやるのか、一から十まできつかり説明してもらわないと……お館様には当然報告されていますよねえ？」

据わつた目、きらりと輝く出刃包丁。彼には正直に話すという選択肢だけが提示されていたのだった。

翌日から、夕映は自分の修行をしつつ鱗滝の補佐に入った。弟子が師匠の世話をするのは当然のことだ。人手が増えれば薪割りや炊事、洗濯などを任せて自分は指導に集中できる。それが巡り巡つて炭治郎を強くし、彼を生き残らせるのだから、喜んで彼女は引き受けた。それに、夕映は家事を職業としているため、普段一人で暮らしている老人の鱗滝よりも、若い子供が好む味をよくわかっている。炭治郎はさらによく食べるようになった。

瓶の水を移すように、とはいかないが彼は着実に技術を身につけていつている。投げられたときに飛び起きる速度はだんだん早くなつてきているし、刀が手からすつぽ抜けることはなくなった。なにがなんでも刀を手にして敵に向かつていく基礎が、しつかりついてきていると言えるだろう。夕映が帰る頃には型や呼吸の指導に移行するはずだ。

固く絞つた着物の皺をぱんぱんと伸ばす。もう滞在期間の半分を過ぎてしまった。この山は今日も霧が深い。

炭治郎の妹のことは、産屋敷家現当主である産屋敷耀哉が様子を見ると決めた以上、正式な鬼殺隊関係者ですらない夕映に言えることは

なにもない。ただ、もし彌豆子が人を傷つけたら即刻炭治郎が腹を切り、彼らを鬼殺隊へ手引きした鱗滝と義勇も連座で死ぬというのは、感情の面でも納得できなかった。彼らが死んだところで失われた命は返ってこないではないかという冷静な自分と、師範に加えて数少ない今も生きている兄弟弟子を一度に失いかねない可能性に耐えられない自分がいる。

そもそも柱となれば五十人、百人単位で鬼から人を守る力を有している。十二鬼月との戦いで戦死以外でその命が失われるというのは、鬼殺隊に多大な損失を与えこそすれなにも得をさせない。要は脅迫だ。義勇は頭領を脅しているのだ。それだけ炭治郎と彌豆子に特別なものを感じ取ったのだろうが、柱がそんな命の懸け方をするなど腹を立てても許されるはずだ。

なにを考えているのかわからない仏頂面と深い色の目を思い浮かべると、つい夕映はため息を吐いてしまう。今すぐ胸ぐらをつかんで文句を言いたい。怒りの手紙を飛ばす準備をしようか。返事は端から期待していない、これは自分を落ち着けるための自己満足だ。

(昔はあんなにかわいかったのに、錆兎が死んでからすっかり唐変木になってしまったて……いえ、笑顔が極端になくなっただけで言葉足らずで報告が極端にできないのはなにも変わってないのだけれど……) 考えれば考えるほど気が重くなる。どうか彌豆子が人を食わない鬼になりますように。そんな白い鴉のような矛盾の権化が誕生するとはとても思えないが、炭治郎の人柄がすっかり好きになってしまった夕映は一縷の望みに縋ることしかできない。

それにしても、鬼が眠るとは変な話だ。あれらには切り落とされた手足を一瞬で回復させるだけの蘇生能力があり、無限の体力を有しているのだから“疲労を回復させるために眠る”という行為は必要ないはずなのだ。おそらく彌豆子から普通の鬼とは違う気配がするの、彼女が「眠る鬼」だからだろう。今この瞬間にも、彼女は変質して進化しているのかもしれない。それが吉と出るか凶と出るかまったく読めないのが恐ろしくて、お館様の決断は博打に過ぎると洩面を

作ってしまうのだが。

夕映はすっかり炭治郎の人柄を好きになつてしまつたから、彼が死んでしまうようなことがなければいいのにと願わずにはいられない。たとえ心の優しい人から食い物にされて死んでいつてしまうような法則がこの世にあつたとしても。だから夕映は熱心に炭治郎を鍛えるのだ。少しでも彼が生き残れるように経験を積ませる。

これで炭治郎が最終選別を超えられなかったら、きつと、鱗滝はもう立ち続けられない。育手を引退して、鬼殺隊からも遠ざかるだろう。そして好い人と一緒に余生を過ごすのだ。今まで送り出してきた子供たちは、一人を除いてみんな死んでしまつた。あれから鱗滝は弟子を取つていなかったのだ。かつての自分と同じように水柱まで登り詰めた義勇が「越えられるかもしれない」と寄越さなければ、炭治郎のことを弟子に迎えなかったかもしれない。

自分が斬つた岩を前に、夕映はうつむく。

(私、のうのうと生き延びてしまつているわ)

杏寿郎が彼女を戦わせないと固く誓つている限り、いくら修行をしたところでそれが結果を出すことはない。種のない植木鉢に水をやり続けたつて花は咲かず、実を結ぶこともないのだから。

大切な人に死んでほしくないのはみんな同じだ。だから杏寿郎は、頑なに夕映を家に閉じ込めようとする。隠の真似事をするのも、未だに修行をしようと鱗滝のところへ通うのも、蝶屋敷で行う傷ついた隊士への看護も、本当は全部やめさせたいのだろう。だが、優しい杏寿郎は横暴になりきれない。彼が夕映に強制した命令は、この十年の中でたつたひとつ。最終選別を生き残つて帰つた夕映に対し、まったく笑つていない目を伴つた底冷えのする笑顔で「辞退しなさい」と迫つたあのときだけだ。

自分が正しく剣を握り、荒れ狂う死の暴風へ飛び込んでいくのがいつになるか、夕映は理解している。杏寿郎が死んだあとだ。それが明日ではありませんように。いつもそう願つて、夕映は眠りに就く。物言わぬ亡骸となつた杏寿郎が帰ってくる夢を見た回数は、両手の指の数では到底足りない。朝目覚めて、鴉の伝令を待っているとき、不安

は常につきまとっている。隊士が下弦を斬って柱になり、柱が上弦に殺されるという歴史を繰り返している以上、どれだけ杏寿郎が強くなっても真に夕映が安心できる日は来ない。

「待っていてくれ」「家を守ってくれ」と彼は太陽のように笑うけれど。待つ側の歯がゆさ、自己嫌悪、苦しさを、彼は理解できないに違いない。今までも、これからも。彼が前線で戦い続ける限りは。そしていつか、戦場で散るときが来たとしても。彼は本質的に「置いていく」人間なのだ。彼を愛する人々がいくら懇願しても、止めようとしても、絶対に杏寿郎は止まらない。「そうすべきことをするだけ」だからだ。自分が丈夫な身体に生まれ、剣技の才能を有し、鬼狩りの家の長男として誕生した以上、その力を正しく使い、大衆を守る道に殉じるのがすべてだと、本気で思っている。母の遺言によるところもあるだろうが、あの駄目押しがなくても、彼はいずれその境地に至っていたらう。

彼は太陽だ。人を照らす光だ。己の命を燃やし尽くして衆生を守ろうとする姿に、明王を重ねる人物は多いはずだ。

彼は英雄の器だ。人を助け、悪を滅すために今日も刃を振るい続ける。そして、英雄の物語はいつも、非業の死で終わるのだ。そうやって鬼殺の剣士たちの大半は死んでいった。

はあ、とため息を吐いて夕映は座り込む。

「できることを全部やっているつもりでも、坊ちゃんは私が盾になることを許してくださらないから、結局なにもできていないんじゃないかって思うわあ」

ぺたり。触れた岩は冷たい。霧の湿気が髪の毛のうねりを強くする。

「ねえ、錆兎。君、まだここに居るの?」

年上の友達のことを思い浮かべる。彼の年齢を追い越して、まだ夕映は生きている。もう、あの子は大人になれない。何度も夢枕に立つ子供のつむじを見下ろせるようになったと気づいたとき、夕映は悲しくてしようがなかった。

「どうしたらいいかって聞いても、君のことだから、『知るか、自分で考えろ』ってそっぽ向くのよねえ」

かすかに風が吹く。霧の向こうに目を凝らしたら、そこにみんながいるのではないかと夢想する。だって、明らかに気配はあるのだ。網膜には映らないのに、誰かがそこにいる。

「炭治郎くんのこと、お願いね。師範、きつと死なせたくないがために、無理難題吹っ掛けるから」

でも、あの子、強くなるわ。溶けるように眩いて、夕映は立ち上がった。

明日にはこの山を去らなければならない。そうしたら、また来年だ。どれだけ未練がましかろうが、通例となった年に一度の滞在をやる気はさらさらなかった。

## 原作時間軸2 秘密

一日一日を重ねているだけで時間は過ぎていく。杏寿郎は二十に、夕映は十七になった。その間に柱が何人か入れ替わり、杏寿郎の継子だった甘露寺も見事柱となった。蝶屋敷の娘は一人減り、蟲柱は鬼を死に至らしめる毒を完成させた。相も変わらず隊士が増えては死に、産屋敷邸の墓は増え続けている。さらに言うところには、耀哉の病はひどくなるばかりで、とうとう彼は光を失った。

炭治郎は半年かけて型と呼吸をものにした。案の定、途中から鱗滝は彼を放置していたらしい。心のどこかで炭治郎が諦めることを期待していたのだろう。最終選別のあとに送られてきた手紙には、「突然鱗滝さんはなにも教えてくれなくなったのでとてもびつくりしました。教わったことをどれだけ繰り返しても岩は斬れなくて、俺はとも焦っていたと思います。ですが、山の他の子供たちが実戦形式で助けてくれたんです！ 夕映さんは、錆兎と真菰のことを知っていますか？」と楽しげに文字が躍っていた。返事に突破への祝い、今後の任務への激励をしたため、「二人は友達だ」と書いてくれた。

禰豆子が目を覚ました、という知らせには、「とうとう」という思いが身体を駆け巡った。山の頂上の小石が転がり始めたような、なにかが変わる瞬間というものに夕映は対面していた。相も変わらず杏寿郎にこのことは報告していない。鬼殺隊の頭領から口止めされているのだから、言えなくて当然だ。自分が案外秘密を守れていることで、「私ってうそつきだったのねえ」と夕映は嘆息する。禰豆子のことが衆目にさらされたあとの柱合会議で、彼らの処遇は決まるだろう。それまでに耀哉の見極めが間に合うよう祈るだけだ。

ついでに、義勇に宛てた怒りの手紙には返事が一切来ていない。彼がまともにやりとりするのは報告書だけなので、夕映は匙を投げた。一方的に季節の便りを送り続けるのはいつものことだ。「便りが無いのは元気な証拠」と考えていなければ、あの筆不精と口下手はいいように捉えられはしない。

自分はまだ、のうのうと女中を続けている。なにかが動き出した感

覚があっても、停滞した家の中の空気はそう簡単には変わらないようだった。

柱合会議の知らせを受け取った杏寿郎は、ぎゅううつとその太い眉を寄せた。「どうされました」と彼の前に湯呑を置く。すると彼は、よく聞いてくれた！と言わんばかりにぱつと顔を上げた。あまりの勢いに夕映はたじろぐ。

「なんと鬼を連れてきている新人隊士がいたとか！ 柱とお館様の前で裁判をするようだが、そんなものを開く必要性を感じられない、鬼もろとも斬首して終わりだろう！ 夕映もそう思わないか？」

ああ、見つかったのか。そう思いつつ、考えはおくびにも出さない。一度嘘をつくと決めたのならば通さなくては。せめてお館様が杏寿郎に事情を説明するまでは。

荒っぽい動作ながらも丁寧かつきれいに手紙を畳んだ杏寿郎の前に、夕映はゆるりと首をかしげる。

「そうですねえ、そもそもなんで鬼を連れようと思ったのかしら。家族？ 恋人？ 鬼殺を志すなら鬼の危険性はわかっていてしょうに。人を食った前例はあるのですか？」

「今のところ向かっていった隊士から逃げ回るばかりで反撃をしなかった、口枷をしていて血や脂の気配はなかったと聞いたが……ううむ。しかし鬼は鬼だからな。そうだ夕映」

「はい？」

杏寿郎は口角を上げたまま、じいっと夕映の目を覗きこんだ。彼の虹彩に自分の顔が映っている。年頃になってからこんな近くに近くで瞳を見るのは初めてだな。そんな的外れなことを考えながら、彼の言葉を待った。

「くだんの隊士は水の呼吸の使い手だというが、君の兄弟弟子か？」

少し黙り込む。そして、夕映は困り果てた顔を作った。杏寿郎は、自分が義勇や炭治郎と手紙のやり取りをしていることを知っている。下手な誤魔化しは効くまい。

「……ううん、あの子はそんなことしないとと思うんですけどねえ……」



鬼による一家惨殺の憂き目に遭っていますし……」

数秒、見つめ合う。沈黙のあと、杏寿郎はぱつと姿勢を正し、にこりと笑った。

「……そうか！　なら、君を信じよう」

いつも通りの笑顔だ。自分もいつも通り、笑っているはずだ。

そのまま、半年に一度の柱合会議に向けて、杏寿郎は意気揚々と出発していった。

お館様がおなりになつてすぐに、彼女の嘘は明らかになった。

問題の隊士、竈門炭治郎は富岡と同じく元水柱・鱗滝左近次の弟子であつたし、少年は彼の元で二年修行を行ったという。夕映は相も変わらず毎年狭霧山を訪れているし、彼女は藤襲山の試練を乗り越えている。鬼の気配を知っている。これらの情報を組み合わせれば、彼女が「竈門禰豆子」を見逃していたのは明白だ。爪に刺さった小さな棘のように、その事実を杏寿郎を苛んだ。

「杏寿郎、夕映を責めてはいけないよ」

他の柱が解散したあと、柔らかい声で耀哉は言った。

「あの子は私のお願いを聞いてくれただけなんだ。子供たちの中で私から頼まれて断ることができる子は少ない。すべては私の我儘のせい。だから、君もあの子も、なにも悪くないんだよ」

お館様、俺は怒つてなどいませんよ。怒つてはいけません。お館様の意向は未だ全面的に賛成できませんが、あの鬼はよりによって不死川の血から顔を背けた。人を襲わないよう、理性を働かせていることは認めざるを得ません。夕映を責めるつもりもない。仮に俺が夕映の立場にあつたとしたら、俺は誰にも口を割らなかつたでしょう。

ただ、悲しい。我が家の女中は、俺がもつとも信頼する人間の一人です。それに嘘をつかれていたというのは——裏切られたと感じてしまうのは——とても悲しいことです。

ふ、と耀哉は眉を下げて微笑んだ。

「そうだね。大切な人に嘘をつかれるのは、悲しいことだ」

落ち着いた声音は母を思い出させる。杏寿郎は、そつと瞑目した。

「おかえりなさいませ」

「ああ、今戻った」

草履を脱ぎ、羽織を夕映に渡す。「お疲れでしょう、湯の準備ができてしますよ」と笑う彼女は、憎らしいくらいいつも通りだ。杏寿郎はもう知っているのに。彼女が嘘をついたことを。

そのことを考えると、カツと腹の底が熱くなって、止められなかった。杏寿郎の居室に向かおうとした彼女の手首をつかみ、勢いよく彼女の身体を壁に押しつける。そして空いていた左手を、もちろん加減をしながら——その顔の横に叩きつけた。みしりと壁が軋む。

ぱちぱちと目を瞬かせる彼女は不思議そうな顔こそすれ、怯えの色をかけらにもじませない。杏寿郎が自分に害を加えることはないと言っている。その信頼が、今は目障りだ。握った手首に指を食いこませる。

「竈門隊士は君の弟弟子だな。君は二年もの間、俺に嘘をついていた」「ああ、もうバレてしまいましたか。それで、坊ちゃんはどうなさったと？ 怒りました？ 甘んじて受けるしかないですねえ」

壁際に追い詰められ、杏寿郎にぎりぎりと言首を握りしめられていても、いつも通りだ。彼女はこんなに強かだっただろうか。今も、杏寿郎の感情を探ろうと瞳の奥を覗き込んでいる。甘露寺や胡蝶よりも上にある赤い目が自分を見つめている。その虹彩に映る己は真顔だ。怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えない。感情を読み取ることはできない。

淡々と、押し殺すように、杏寿郎は口を開く。

「怒ることはできない。お館様にも、君を責めるのは間違いだと釘を刺されている」

「まあ、お館様ったら。私のようなものにまでお心を砕いてくださるなんて……じゃあ、坊ちゃんはどうしたと言うんです？ ちよつと指先がしびれてきました。離して……くれなさそうですねえ」

きゆう、と彼女の眉が寄る。

ああ、困らせている。こんなことがしたいわけではないのに。それ

なのに、荒れ狂う感情は理性の制御を離れている。

痛みを感じているのは本当だろう。こんなところでまで腹芸ができるようになっていたら、なんと強かに育ったものかと天を仰ぐほかない。ため息を吐き、杏寿郎は渋々握る力を弱めた。自分より一回り細い手首には、くつきりと指の痕が残っていた。それをなぞりながら、もう一度杏寿郎は嘆息する。鉛でも飲んだような心地だ。

壁につけていた手を、沿わせて下ろして、白いうなじに触れる。ぴくりと彼女のなで肩が跳ねる。いい気味だ、と思った。そのまま、杏寿郎は夕映の頭を自分の胸に押しつける。背中に両腕を回し、絶対逃げられないように絡みつかせる。不思議と彼女は無抵抗だ。それをいいことに、彼は彼女の肩に顔をうずめた。

「君に内緒事をされていたという事実には、胸が張り裂けそうだ」

くぐもった音が肉を伝い、骨を伝い、内側に入ってくる。夕映は一瞬瞠目し、そして目を伏せた。

苦渋に満ちた声だった。明確な悲しみが、寂しさが、寂莫がそこにはあった。

骨が軋むくらい、痛いほど抱きしめられている。こんなに近づいているのに、ふたりの境界は消えないし、空虚は埋まらない。ひとりとひとりのまま、たださみしいばかりだ。

夕映は眉間に皺を寄せ、ゆつくりと唇を動かす。彼を突き放す言葉を撃つ。

「坊ちゃんに言えないことのひとつやふたつ、私にだってありますよ。それは坊ちゃんも同じじゃあないですか」

——死ななくてくれ、置いて逝かないでくれと縋って、あなたがそうしてくれたらどんなに楽か。でも一人で死んでいってしまうでしょう？ 連れていってなんて、くれやしないでしよう。

「きみのせいだろう」

——共に生きてくれと言ったところで、決してうなずいてくれないくせに。俺の隣に立ってくれないくせに。

苦しげに、杏寿郎はうめいた。喉がかすれる。

「今だって、どうして暴れない？ その気になれば君は俺を投げ飛ば

せる。嫌なら抵抗すればいいんだ」

「しているでしょう。私がこうべを垂れることはあつても、あなたを抱き返すことはないのだから。それは、別の方のお役目です」

たとえば今は亡い溜火や、未来の奥方がそうだ。間違つても一女中の己ではない。この道を選んだ以上、夕映が杏寿郎の隣に立つことはあり得ないのだ。剣を握っていけば、また別だったのかもしれないが、そんなもしもは語るだけ無駄だろう。仮定の話は虚しくなるだけだから嫌いだ。溜火は死んだし、楨寿郎の心は折れたし、夕映は鬼殺の剣士ではない。もう、どうにもならない。

されるがままでいると、やがて杏寿郎の拘束はほどけ、肩にうずめられていた頭も離れていった。くしゃくしゃに歪められた黄金の太陽が、自分を見つめていた。

「——ああ、非道い女だ……」

目を逸らせなかった。言葉は何一つ形にならなかった。ただ、魅入られたように、ゆらゆら揺れる水面の月を見ていた。

杏寿郎はきゅつと唇を噛み、踵を返す。距離が開き、背中が見えなくなり、足音が遠ざかっていく。夕映は壁にもたれかかり、ずるずるとへたり込んだ。彼が触れていた部分が燃えるように熱い。それなのに、思考は霧がかかったようにぼんやりとしていた。

あんなに弱々しい坊ちゃんは初めてだなあ。太陽が翳ることもあるのだなあ。私が日輪を曇らせたのか。ああ、罪深いことだ。わたしのかみさまを、わたしがなかせてしまった。

「……ままならないことばかりだわ」

ずきずき痛む胸に手を当てる。この心臓が止まってしまえば、鼓動のたびに軋む痛みもなくなるだろうか。

はあ……と夕映は深いため息を吐いた。そして、ややふらつきながら、それでも足の裏に力を入れて立ち上がる。見下ろした手のひらはかすかに震えていた。

「洗濯もの、取り込まなくちゃ」

杏寿郎は、どんな顔で夕飯の席に着くつもりなのだろう。夕映と違つて嘘も碌につけないくせに。

おぼつかない足で、女は非日常の境界を越え、日常に戻っていく。  
(こういうところをひどいって言うのかしら)  
差し込む日差しが、長い影法師を作っていた。

事前に蝶屋敷宛てに手紙を出し、情報は頭に入れていたが、いざ炭治郎のぼろぼろ具合を見ると夕映の顔はぎゆうつと歪んだ。炭治郎は痛みを引きつめた笑みを浮かべている。

「はあ……なんて痛ましい……入隊して数か月で下弦の伍と対するなんて、運がいいのか悪いのか」

「あはは……」

見える範囲であちこちに切り刻まれた傷があり、顎は変色していて、さらには全身筋肉痛と肉離れが起きているという。なにをやったらそうなるのかと夕映は呆れた。呼吸を正しく使っていれば訓練した身体は正しく機能し、どれだけ動いても息切れひとつしないはずなのだ。今回炭治郎が散々なことになってしまったのは正しく呼吸が使えていなかったか、もしくは限界ぎりぎりまで戦い続けたかのどちらかだろう。腕を揉みほぐしながら尋ねると、彼は眉を下げた。

「なんでなのかはよくわからないんですけど、うちに伝わる神楽を再現したら急に技の精度が上がって。呼吸を切り替えたら、反動でこれです」

「は？ 神楽？ それでどうして」

「うーん……前提として、神楽を継承していた父は、晩年一日のほとんどもを布団で過ごすくらい病弱だったんですが」

「はいはい」

「肺が凍るような雪の中で神楽を舞い続けても息切れひとつしなかったんですね」

「あー……それで、お父様が呼吸を習得していたと」

「はい。『正しい動き、正しい呼吸が大事』だと父も言っていました。でも、うちは先祖代々ただの炭焼きなので、どうしてそんな技術が継承されているかが不思議で」

ううんと炭治郎は首をひねる。その間にも夕映は彼の手や腕を揉

み続ける。

「ちなみにその神楽の名前はなんと？」

「ヒノカミ神楽です。だから、火の呼吸があるのかなあ……？」

「あ、炭治郎くん、それあまり人の前で言わない方がいいです」

きよとんと炭治郎は目を瞬き、さつきとは逆向きに首をかしげた。耳飾りが揺れる。

「基本の呼吸は炎、水、風、雷、岩の五つで、その他の呼吸はすべて派生です。呼吸の誕生自体は戦国前後と言われていますが……特に炎と水は始まりの頃から一度も柱が途切れたことがないほど歴史があるので、間違っても『火の呼吸』と呼んではいけないんですよ。その辺りとても厳しいです。めちやくちや怒られます」

「めちやくちや怒られるんですか」

炭治郎はぎよつと目を剥いた。神妙に夕映がうなずく。

「はい、ものすごい剣幕で怒られます。ぼこぼこにされます。炎の呼吸の歴史は一族の歴史同然ですからね、少しでもなにかと混ぜられるのは我慢ならないでしょう」

「一族？」

「ああ、歴代炎柱はそのほとんどが煉獄家から輩出されているんですよ。当代炎柱の煉獄杏寿郎さんもそうです」

「へえ〜！ 俺、柱がなんなのかも知らなかつたです……」

「まあ〜！ 師範ったら、剣技を仕込むのに忙しくて碌にものを教えていませんでしたねえ!? あの人たち、どうしてこう、言葉足らずというか寡黙というか！ 義勇もそんなだから嫌われるんですよ！

しかもまったく弁明をしないものだから！ もう!! その様子だと、錆兎の指導も言葉や理屈とは真逆だったでしょう」

錆兎の名誉のために笑って誤魔化すしかなかった。しかし彼女には通用していないらしい。再び「もう」と口をとがらせて、肩を竦めている。炭治郎は眉を下げながら夕映を見上げた。

「その、教えるのは真菰がやってくれたので」

「あの子は観察眼がありますし、思考を言語化するのが得意ですからね。浮世離れしているところに反して、理論立てて話すのも上手い。

わかりやすかったでしょう」

「すぐく」

「ほらア。強さと指導力は必ずしも一致しないですよ。当代の柱でまともに継子を育てられているのはしのぶだけですからね。優れた元柱の育手というものがどれだけ貴重か察せられるものです」

「夕映さんも、教えるのお上手ですよ」

「まあ嬉しい」

炭治郎が照れをにじませながら言うと、夕映はコロコロ笑った。

「そういえば、富岡さんとも親しいんですか？」

「あら、錆兎から聞いてませんか？ あの二人、一緒に修行した仲間なんですよ。私が山で同じ時間を過ごしたのは二か月くらいですけど、錆兎とはしょっちゅう手紙のやり取りをしていましたねえ。懐かしいわ」

「そうなんですか……」

「ちなみに義勇は筆不精なので、常にうんともすんとも言いません。報告書以外書いてないんじゃないかしらあ」

「あはは。確かに、俺も返事が来たことないです」

「さて、そろそろお暇します」

「あつ、はい！ お見舞いありがとうございます！」

「かわいい弟弟子のことはいつも心配ですからねえ！ うふふ」

ぽふぽふと頭を撫でられて、炭治郎は赤面する。二年前に「姉のようだ」と言ったのを彼女は覚えているようだった。楽しそうに笑っている。

「次に来る頃は機能回復訓練が始まっているかしら？ そのときはちよつとお手伝いさせてもらいますよう。カナヲは十分強いけれど、指導はまた別の話です」

「そ、そうなんですか……」

「機能回復訓練がなにかは、アオイやなほちゃんたちに聞いてください。あとはしっかりと食べて、きっかりお薬を飲んで、よく眠るように。いい子にしていなさいねえ？ そうしたら、お土産も奮発してあげます」

そつと、優しく頬を撫でて、夕映は目を細めた。なんにも言えず、ただこくと頷く。

そして、梅の香りは遠ざかっていった。

「炭治郎！ なに！ あの人のどういう知り合い!? 超かわいいお姉さんじゃん、すらつとして愛嬌があつて優しくて、なんでお前ばかり!?」

「あれ、善逸、起きてたのか」

「起きてましたよ!! お前らが目と鼻の先でイツチャイツチャ、イツチャイツチャしてるから空気読んで存在感消してたのオウウウ!! 感謝しろ!! 俺の気遣いに感謝しろ!!」

「いちやいちやなんてしてないぞ。興奮したら身体に障るから、落ちて着いてくれ。それに夕映さんは姉弟子だよ」

「姉弟子!? 姉〃弟子イ!? おつっつまえあんな美人と一緒に修行してたのか!? ずるいずるい!! 優しく指導されてたんだろ!? 俺なんて爺ちゃんにはぼこすか頭叩かれてたし兄弟子には存在を疎まれてたよ!! なにこの差!? どうなつてんの!? この世つてこんなに理不尽なの!? 俺の前世の罪が原因なの!?」

「善逸、静かに……」

おろおろと手をさまよわせていると、葉草とシャボンの匂い。次いでキビキビと床を踏みしめる足音。その直後に雷が落ちる。

「我妻さん!! またですか!!」

「ヒヤイイッ！ すみません！ 静かにします！」

「すみません、すみません」

二人に挟まれた伊之助は静かだ。眠っているわけではないようだし、まだ元気がないのだろう。アオイに頭を下げながら、どうやったら彼を励ませるのかと思いを馳せる。

そして炭治郎は、早速アオイに機能回復訓練について尋ねたのだつた。

機能回復訓練開始から約一月。泣くほど痛い柔軟から始まり、鬼



ごつこと、反射訓練の薬湯かけ。間に全集中の呼吸・常中の習得のため  
の鍛錬を挟み、耳から心臓が飛び出るかと思うほど炭治郎は走り込  
んで、ひたすら呼吸の訓練をした。

つまり、炭治郎がカナヲに勝つまで、おおよそ一月かかったのだ。  
これが継子と一般隊士の差か、と驚くほかなかった。それほどまでに  
カナヲは速く、身軽で、そして不思議な目を持っていたのである。ア  
オイも常中習得前の炭治郎より速かったし、夕映が言っていた通りし  
のぶの指導力には舌を巻く。やはり強くなる近道は階級が上の人に  
教えを乞うことなのだろう。

「花の呼吸と蟲の呼吸は水から派生して、さらに小柄な女性が身軽さ  
を活かせるように作られましたから。柔軟性、速度、手数が揃ってい  
ます。カナヲやアオイの身のこなしが速いのはそれを特化して鍛え  
たのと……あと、カナヲは洞察力かしら。あの子はよく見ているか  
ら。花の呼吸は真菰にも合っていたでしょうねえ」

土産の茶を淹れながら、彼女は微笑んだ。

夕映は言っていた通り、週に一度ほどの頻度で蝶屋敷に顔を出し、  
なにくれと世話を焼いてくれた。全集中・常中の習得が求められると  
早めに教えてくれたのも彼女だ。善逸は彼女が来る日だけ露骨にや  
る気を出した。炭治郎にはその理由がよくわからなかったが、やる気  
になってくれるのは嬉しかったので、一緒に裏山を走って往復してい  
たのだ。その最中に伊之助を見つけ、連れ戻したこともあった。負  
け慣れていない彼は相変わらず拗ねていたが、偶然居合わせたしのぶ  
に「まあ常中は基本ですから！ できないなら仕方ないですね！」と  
煽られると、生来の負けず嫌いを發揮して修行に取り組むようになっ  
た。善逸も伊之助も努力を継続させるのが苦手なので、しのぶや夕映  
が彼らをうまく乗せてくれるのはとても助かった。炭治郎はそうい  
う、人をおだてて調子に乗せるというのが得意ではない。教えるのも  
爆裂に下手だ。彼に自覚はなかったが。

その頃には屋敷の女の子たちとも仲良くなり、瓢箪を吹く訓練、水  
の中での息止めを取り入れて、あとはどんどん右肩上がり。呼吸の常  
中をすればするほど体力は増していき、長時間全力で身体を動かせる

ようになっていく。手応えがあった。強くなっている実感を持てた。  
(早く日輪刀を振りたい！)

そう思っていたときは、担当の刀鍛冶に包丁を持って突撃されるとは思いもしなかった。さらに一時間追いかけて回された。当然鋼鐵塚は出刃包丁を握ったまま。怒られるとは想定していたが、まさかここまでとは。鋼鐵塚の気性の激しさを見誤っていた。

もう絶対に刀は折らないようにしよう。逃げ回りながら、炭治郎は堅く誓った。

身体の傷は癒えきり、次の目標もできた。となれば、あとは行動あるのみである。まずは炎柱・煉獄に話を聞きたい。しのぶにヒノカミ神楽のことを聞いたが、夕映に尋ねたときと同じように芳しい結果は得られなかった。しかし彼女はすぐ煉獄に繋ぎを取ってくれたので、とても気が回る。頭が下がる思いだ。

それを、出立の直前に会いに来てくれた夕映に話すと、彼女はぱちぱちと目を瞬かせた。

「あら、しのぶに坊ちゃんを紹介されたんですか。柱あるところ恐ろしく強い鬼ありますよ？　くれぐれも気を付けてくださいね」

「はい！……坊ちゃん？」

「……言ってませんでしたっけ？　私の勤め先、煉獄家です。今年でざっと十三年ほどでしょうか」

「……？……?!？」

驚きすぎて顎が外れた。わなわなと手が震える。不格好な盆踊りを炭治郎は無言で踊った。

「つまり夕映さんは炎柱の継子……？」

「うーん……まあ実質……？　公的ななにかは一切ありませんよ、ええ、一切。私の日輪刀は反射光で赤く光るので、炎の呼吸自体に適性はあるとは思いますが」

首をこてんとかしげる彼女は今日も普通の着物姿だ。隊服ではない。

彼女が隊服を着ていたことは一度もないし、帯刀していたのは山に來ていたときだけだ。さすがの炭治郎も気づいている。夕映は、鬼殺

隊の隊士ではない。そして、夕映も、炭治郎が気付いたことに気づいている。

彼女はくしゃりと笑った。今にも泣きそうに眉が歪められている。唇は不格好に引きつっていて、笑うのに失敗したのは明らかだった。

「出奔してでも、隊士になった方がよかったかしら」

たまらず、炭治郎は彼女の手を握った。自分と同じように剣だことあかぎれに満ちた、ごつごつと固い手だった。

「――俺。おれ、頑張りますから。夕映さんの分まで戦ってきます。あなたの思いは連れていきます」

「……きみに陽の光が降り注ぎますように」

炭治郎は、頬を染めてにっこりと笑った。夕映も、彼の手をぎゅつと握りしめて笑い返した。

「例の少年と任務に当たることになった！ 自分の目で見極めてくる！ 次の夕飯は焼き魚がいい！ では、いつも通り父上と千寿郎のこととは任せた。行ってくる！」

「はあい、いつてらっしゃいませ。帰ってきたときにお弁当の感想聞かせてくださいねえ」

杏寿郎の好物をたんまり詰めた重箱を渡し、いつも通り、夕映は彼を見送った。

日常というものは容易く崩壊する。だからこそ人は、我々は、退屈な平穏を尊ぶのだ。

## 終 無限列車乗車

これは現実ではない。そう杏寿郎が認識したのは、彼女が自分そっくりの赤ん坊を抱いていたからだ。

「どうされました？」

知っている通りの顔で、知っている通りの仕草で、知っている笑みを浮かべ、知らない赤子を抱いている。ぶわつと全身から汗が噴き出た。身の毛がよだつ。

（なんだ？ 鬼による攻撃か？ なにが目的だ？ ——いつから？）

手が腰の刀に向かう。指先がかたかたと震えた。粘ついた感情が喉に張りつき、呼吸が乱れる。ヒュウヒュウと呼気が鳴く。

「君は誰だ」

喘ぐように杏寿郎は言葉を発した。目の前にいる女は、きよとんと目を丸くして、不思議そうに己を見つめる。憎らしいことにそんなところまで同じだ。困ったように女は弟に話しかけた。

「これは異なことを仰る。三々九度の契りをお忘れに？ あらあ、なんて薄情な旦那さま。ねえ千寿郎さん」

「そうですよ兄上。夕映とやつと結ばれて、ついこの間この子が産まれたばかりなのに」

ざあつと血の気が下がった。びきびきと青筋が立つ。柄を固く握りしめる。すぐにでも抜刀できるように。

杏寿郎は吼えた。

「そんな馬鹿なことがあるか！ 俺は想いを伝えることもできていないだぞ!! 自分の意気地のなさにいつも腹を立てて、夕映の意図した鈍感が恨めしくて、それでも向けられる信頼を失うことを怖がるせいで今の関係を壊せない！ こんなに矮小で臆病者の俺が、祝言を挙げて子を設けるなど天地がひっくり返っても——」

怒りと狼狽が混ざった混沌が叫びになってあふれていく。千寿郎は困惑しきりで二人を見比べていたが、女は笑った。おっとりとした。何度も反芻した、杏寿郎が一番好きな笑顔で。

「まあよかった、ちゃんと自己分析ができていらつしやる」

花の嵐。花卉の一片一片が杏寿郎の目を覆い、そしてそれらはごおつと燃え上がる。焼け落ちるように景色が塗り替わった。声もなく千寿郎が、抱かれていた子供が掻き消える。

杏寿郎はいよいよすらりと刀を抜き、構える。鬼の気配は四方からする。目の前の、愛しい女の顔をしたものからではない。ならば、今の己はなにを斬るべきか。厳しい目で、彼は女を見つめる。

「精神に作用する血鬼術なんて珍しいですよねえ。この鬼はずいぶんと用心深いように見受けられます。ついでに陰湿。性格の悪さがにじんでるわあ」

「思考を読むな」

「ごめんなさい、私はあなたと接続しているので、勝手に流れてきてしまふんですよ。再現体の悲しいところですね」

杏寿郎は油断なく構えたまま、眉をひそめた。彼女は微笑みを携えたまま、彼の抱いた疑問に答える。

「ええ、ここはあなたの深層心理。望みが反映される場所。心の海とも言えるところ。だから私は、あなたの妻となった篝夕映を模して作られたわけです。ずいぶんご執心ですねえ！こつちが照れてしまいますよう。十年熟成されたらみんなそんなものかしら？ふふ」

「……君、夕映よりも生意気じゃないか？」

「あなたが自覚していないだけで、気心知れた友達にはみーんなこうですよ。富岡義勇と話しているところに居合わせて、強烈な嫉妬心を抱いたことをお忘れですか？」

皮肉を言つたつもりが、ぐうつと黙り込む羽目になった。藪蛇をつついてしまった気がする。顔がカツカと熱くて仕方がないし、だらだら汗が流れてきた。反論しようにも夕映への独占欲をこじらせているのは事実だし、さらに言うとは好いた女の顔と声で自分の心を説明されるのは——ものすごく恥ずかしい!! 杏寿郎は今、穴があつたら入りたかった。ないなら掘る。掘って入って、気が済むまでうずくまっている。

「うーん、まあ、篝夕映はともかく富岡義勇が彼女を憎からず思っているのは事実ですからねえ。嫉妬するのはあながち見当外れというわ

けでもないのですよ？ うかうかしていたらトンビに油揚げを、こ  
う、ね？」

「……なぜ俺の一部である君が、他人の心を知っているんだ」

「人の無意識とは繋がっているものなのです。私は意識と無意識の  
狭間にいる存在が形を持つているだけです。あなたが無意識で感  
じ取ったものも言語化して話せる。要はもう一人のあなたというこ  
とです。今は篝夕映の姿をしていますけどね。本来私は不定形です。  
あなたが認識した姿で、あなたの意識に映り込む」

彼女は肩を竦め、ふわりと距離を詰めた。杏寿郎が握っていたはず  
の刀がない。どころか、間合いから絶妙に逃れていたはずの女が目の  
前にいて、自分の手を握っていた。ドツと心臓が跳ねる。

女は愛しそうに杏寿郎の手を撫で、指先を絡めた。そして、熱が離  
れていく。

「さあ、そろそろお行きなさい。彼女が手ごわいのはわかっているで  
しょう。腹を括りなさい。想いを伝えるのなら、生きて帰らなく  
ちや。あなたがこの程度の鬼に手こずるとは思っていませんが、ま、  
何事にも例外というものはありますからね。どうかご武運を」

とん、と胸を軽く押されて。それだけの動作で杏寿郎の足は地面か  
ら離れた。そのまま身体が宙に浮き、天地が反転する。ぐいと引つ  
張られていく感覚は、夢から覚めるときのとよく似ていた。目の  
前がにじむ。溶けていく。ぐるぐると渦を巻く。それでも、ひらひら  
と手を振る女が、焼き付いて消えなかった。

どくどくとうるさいくらいに脈打つ心臓を抱えて、少女は身をひそ  
めていた。

早くこの男の無意識領域に入り、精神の核を壊さなければならな  
い。そうしないと幸せな夢を見せてもらえない。それなのに、いくら  
行き止まりの壁を錐で裂いても核の元へたどり着けない！ 焦りの  
あまり呼吸が荒れる。心臓が早鐘を打つ。汗が次から次へと吹き出  
てくる。

夢の端が崩壊していつているのを感じる。まだ大丈夫のはずだ。

まだ自分は間に合うはずだ。はっ、はっ、はっ、と犬のように短い呼吸を繰り返しながら、少女は走る。現実から逃げられるならなにをしたって構わなかった。

崩壊していく。隠れる場所がなくなる。核にはたどり着けない。どうしてこんな、迷路のような空間が出来上がっているのだ？

「あ、見つけた」

天から降ってきた声に、ヒツと彼女は息を呑んだ。

「残念ですが時間切れです」

襟首を猫のように摘み上げられて、じたばたと少女はもがく。青年に持たされていた錐はひよいと奪われてしまった。恐ろしきで脂汗がにじみ、ぼたぼたと涙が落ちてくる。

「無粋なお客様にはお帰りいただきます。私はこの人を守るためにここにいますので。わかるでしょう」

血のように真っ赤な目が、自分を見下ろしていた。柔らかい、上品ぶった嫌味な声が降り注ぐ。その女が怒りに燃えているのはすぐに分かった。

「私欲で他人を殺そうとするなんて、ひどいひとですね？ まさか、自分がかわいそうだから人を傷つけてもいい」だとか、本気で思っているのかしら？」

引つ張られた襟が首を絞める。苦しくて喉を掻いた。やめて。ゆるして。たすけて。どれを言おうとしたのだろう。きつと全部だ。

ずるりと、底なし沼に沈む込む感触を少女は味わった。もがけばもがくほど沈んでいく。ぎゃあ。恐怖のあまり、引き攣れた声が喉から飛び出した。

「お前のような弱い人間が、鬼にそそのかされて、私の大切な人を殺すの。あんなに守られているくせに。許すわけないじゃない。ああ、凡愚の弱さが憎い。私の大切な人たちはみんなみーんな、お前みたいな存在のために命を張っているのに。人のために力を尽くせる人々のなんてうつくしいこと——そしてお前の、なんて醜いこと」

涙が止まらない。身体が沈んでいく。もう顔も鼻から上しか出ていない。こわい。怖くて仕方がない。赤い瞳は自分を射殺さんばか

りに見つめている。声は炎の熱を孕んで身体中を焼く。叫び声は粘着質な響きを伴ってぼくぼくと泡を立てるばかり。

「ゆるさないわ。これに懲りたら、もうこんなことはやめておくのね？ 〴〵いい子にして〴〵いなさい」

呪いは、耳元で囁きと共に脳を揺らした。殺されると思った。悲観していた人生より、わけのわからない異能を使う青年より、目の前の女が怖い。少女は失神した。

それと共に、杏寿郎の夢は終わる。夕映の姿をしていた彼の防衛本能もほどけて消えていく。

炭治郎は涙が止まらなかった。なんで、どうして、と思う心が悲しみを生んで、涙になってぼたぼた落ちていく。横転による負傷者はいても、誰も死んでいないはずだし、下弦の壺は倒したのに。なんの脈絡もなく上弦の参が来たばかりに、炭治郎たちを守ったばかりに杏寿郎は死んでいく。左目は潰れてしまったし、右脇腹は血が止まらない。さらに鳩尾に開いた穴が貫通している。呼吸による止血を教えてもらったのはついさっきなのに、彼が言った「なんでもできるわけではない」状況が彼を襲っている。

自分の弱さが憎かった。やっと前に進めたと思ったのに、前より強くなったと思ったのに、今なんの役にも立っていないのならそこに意味なんてないだろう。悔しい。悔しくてどうしようもない！心が張り裂けそうだった。この短い期間で杏寿郎はその強さ、頼もしさを遺憾なく見せつけ、「俺の継子になるといい」とまで言ってくれたのに、死ぬ。死んでしまう。

遺される側の感情とはあべこべに、穏やかな表情で杏寿郎は遺言を述べていく。弟には自分の信じる正しい道を進むように。父には身体を大切にしてくれと。そして、鬼の禰豆子を鬼殺隊の仲間と認め、炭治郎たちを信じる、と。

「夕映には――」

少しの間を置いて、すらすらしゃべっていたさつきまでとは正反対



に、歯切れ悪く杏寿郎は言う。

「ううん、手紙と日記を見るように言っておいてくれ。本当は直接伝えなかったが」

そして彼は、虚空を見つめ、子供のように笑って、かくりと息絶えた。

「坊ちゃん？」

杏寿郎の訃報が届いた。

手紙の内容を理解すると同時に千寿郎は泣き崩れ、慟哭がうららかな日差しを切り裂いていく。槇寿郎はいつものように部屋から出てこない。夕映はうずくまって泣く千寿郎を抱き起こし、ぎゅうっと抱きしめた。

「ゆえ、ゆえ、どうしよう、兄上が……」

「……………。大丈夫です。大丈夫ではないですが大丈夫です。姉やに任せてください」

身体を離し、強く肩をつかんだ。兄そっくりの目からぼろりと涙の粒が落ちる。激しい動揺に陥っているこの子供は、これからのことに碌に対処できないだろう。それは槇寿郎にも言えたことだ。ならば、自分がしっかりしなくては。

夕映はきゅつと唇を引き結ぶと、屋敷を飛び出した。

今回の任務の場所と、杏寿郎が死に至るほどの傷を推測する限り、埋葬ではなく火葬になるだろう。通夜はきつと無理だ。その間に彼の肉体が傷んでしまう。火葬場の算段をつけながら、彼女は近隣の親戚の家へ飛び込んだ。語られるままに地主の長男の死はあつという間に村中に広がっていき、多くの住民が葬式の手伝いを買って出てくれた。それに安堵しながら、喪主の代理として夕映は采配を振るっていく。役場への手配、火葬場への連絡、買い物、蒔銭の準備、住職への経の依頼……と、準備は着々と進んでいく。

葬列は、彼の生きざまに見合った豪勢なものにしくは。その思いが夕映の背中を押す。走らせる。うずくまる暇も与えず、寝る間を惜しんで働き倒した。榎寿郎には葬列の位牌を持つことだけは最低限やってくださいと念押ししてある。お膳を持つのは千寿郎がやる。夕映はその後ろで、願掛けをほどこくために彼の羽織を振って続く予定だ。

隅から隅まで磨き上げられた屋敷に、鯨幕が垂らされる。

葬式には多くの鬼殺隊士が参列してくれた。かつて杏寿郎の継子であったものから、彼に助けられたという一般隊士、さらには柱や、耀哉の名代として彼の妻・あまねまで、杏寿郎に別れを告げるために煉獄家の門をくぐった。

みんな、泣いていた。悲しみに顔を伏せ、涙を流さない人々は鬼への怒りで顔を歪めている。柱の面々は焼香に向かうたび、煮える怒りを押し殺そうと努めていた。彼らの憤怒がありのままにまき散らされていたなら、心臓の弱い年寄りが追加で死んでいてもおかしくなかった。気遣いに感謝する。

特に彼から剣術の基礎を習った蜜璃の泣きようはひどく、必死に声を我慢しながら大粒の涙をぼろぼろと流していた。感情表現が豊かな彼女のことで、本当は大声をあげて泣きわめきたかっただろう。隣に座したしのぶが背をさすり、手を握っている。その彼女の顔にも、いつも浮かべられている姉そっくりの微笑みはなく、深い悲しみと燃える怒りが燻っているのを夕映は感じていた。それは柱の面々すべてに言えることだった。時透だけは相変わらずぼんやりしていて、感情は読みきれなかったけれど。そして、この場にはいない義勇もそうだった。

葬列の準備中に、しのぶは夕映に声をかけた。

「こんなときまで富岡さんが来ないとは思いませんでした。夕映もひどいと思いませんか？」

むすつとしてしのぶは柳眉を寄せる。夕映は頬を掻きながら、くたびれた様子で笑った。

「そうねえ……義勇のことだから、『悲しみに浸っている暇があるなら

素振りの一回でもしている』って、今頃修行しているんじゃないかしら。あの人、一度悲しみにはまると浮き上がったてこれないのよう。上弦の参に怒ることで目を逸らしているのかも」

「本当にそうですかねえ……」

ひよい、と片方の眉だけ持ち上げるといふ器用な芸当をしのぶは見せた。かすれた吐息が相對している女の赤い唇から漏れる。

「ふふ、四十九日中に手を合わせには来るでしょう。来ないなら呼びつけに行くわ。そのとき数発殴ればチャラよ」

「……あなた、あの人には遠慮つてもありませんね……」

「だって、義勇はお友だちだもの」

彼は私のかみさまではないもの。寒々しい笑顔を浮かべるひとつ下の女に、しのぶは黙して目を伏せた。

葬列が始まる。損傷の激しかった遺体はすでに焼かれ、輿に乗った棺には骨壺が入っている。

ひどい傷だった。左目は潰され、右脇腹はえぐれ、鳩尾には穴が開いて内臓がでろりと垂れていた。それなのに、杏寿郎は幸せな夢を見るように、微笑みをその口元に刷いていた。それを焼いて、家族、縁者が箸で摘まんだ骨が、あの中に入っているのだ。

喪主の榎寿郎を先頭にして、参列者を連れて屋敷を出発する。彼が旅立てるように、彼の茶碗を榎寿郎が割った。村の男衆が輿を運び、夕映は逆さにした羽織を振って、皆、ぞろぞろ歩く。榎寿郎の顔は紙のように白く、千寿郎の目は赤く腫れていた。

こうして、煉獄杏寿郎は送り出された。生者と死者の断絶は為った。香典の数を数え、名簿をまとめ、親類一同で食事をして。葬式は、終わったのだ。

それなのに夕映はまだ夜明けと共に起きて、朝食を用意している。杏寿郎が帰ってくるのを待っている。いつも通り割烹着を着て、包丁を握ったところで気づくのだ。「坊ちゃん、もう骨になっちゃったから、帰ってこないわ」と。

帰ってきたらお弁当の感想を聞かせてくれと言ったのに、返事は未来永劫聞けない。それを五日繰り返して、ようやく夕映は泣いた。

「う、うう、ぐうう……どうして……どうして……？ うあああああ  
あ……！ ぼっちゃん、ぼっちゃん……!! これからだつた、のに」  
何度も畳を殴った。拳が裂けて血が流れても構わなかった。

三冊しかない指南書から型を覚えて。在りし日の父から受けた指導を反復して、子供だけでなんとか生活を回して。柱まで登り詰めて、新しい柱の師匠にまでなったのに、もう杏寿郎はどこにもいない。あんまりだ。あんまりだった。

これから、夕映よりずっと素敵な女性を妻にもらって、その人と愛し合っていくはずだったのに。それを見届けてから、夕映は嫁に行くつもりだったのに。坊ちゃんが私を好きだと言うのは、私しか女の例を知らないからだとずっとごまかしてきたのに。全部、意味がなくなってしまうた。

鏢と羽織を抱いて、うずくまって泣いた。泣いても意味がないことはわかってしている。この涙は全部自分のためだ。涙を流すと快樂物質が出る。そうやって人は立ち直る。かつて炭治郎の涙を止めず、そのまま流させた理由を思い出した。

炎の意匠の羽織を抱くと、杏寿郎の香りがする。いつかこれも消えるだろう。忘れてしまうのだろう。枯れない花なんてどこにもない。そんなもの、この世のどこを探しても存在しない。永遠は都合のいい夢だ。

(これから、私に、なにができるだろうか)

涙に濡れながら、何度繰り返したかわからない問いを再び投げる。あの人の生きざまに報いるためには、殉じるためには、やはり鬼殺を志すべきなのだろう。想いを繋げていくとはそういうことだ。そうやって、鬼殺隊は壊滅の危機に陥りながらも決して滅ばず、今に繋がってきたのだから。

それでも、遺された宝物を思うと走り出すことができない。ためらいを抱いてしまう。夕映が往く側へ行ったら、今度こそ千寿郎は取り残される。色が変わらない日輪刀を抱いて、ぐずぐずに腐った父を一人で支えなくてはいけなくなる。まだ十五にもなっていないあの子に、そんなことを背負わせたくない。

楨寿郎はいつそう酒に浸るようになった。千寿郎と夕映は機械的に日常の動作を繰り返すだけだ。煉獄家にはまた暗雲が立ち込めている。杏寿郎の鴉は帰ってこない。産屋敷邸で休んでいるのだろう。今こそ、剣を執って戦いに身を投じるべきなのだ。己が上弦の参の首級をあげてやる、と気焰を吐くべきなのだ。葬式に顔を出さなかった水柱のように、一回でも多く刀を振り、一体でも多く鬼を屠ればいい。なんのために修行をしてきたのだ。力があるのに闘わないのか。いたずらに才能を腐らせるのか。種々様々な叱責が頭をめぐる。喉は慟哭を吐き続ける。

ずっと目を逸らしてきた。彼は夕映に「家を守ってくれ」と願ったけれど、じゃあ、あなたのことには誰が守るのかと。選別のあとの通告に泣いて暴れて、「私に背中では任せられませんか」と口に出しかけて、結局彼の懇願に折れたのだ。

しかし、約束は杏寿郎が生きていなければ無効だ。黎明、嵐のように泣きわめいたあと、素知らぬ顔で千寿郎を送り出す。そして、彼女は一通の手紙を書きあげた。いつでも出すことができる。けれど、喪失を喪失として認識した日から、それは未だ鴉に預けられてはいない。

なにやら家の付近が騒がしいような……？　そう首をかしげたと、夕映は食材を包んだ風呂敷を抱えていた。買い出しの帰りだったのだ。食欲が減退している主人親子のために精のつく、食べやすいものを作ってやらなければと思って、ちよつと買いきってしまった。

その「元気がない」はずの旦那様が、息子の頬を固く握り込んだ拳でぶって、弟弟子に襲いかかっているのを見てしまった。目の前が真っ赤になった。すぐさま夕映の身体は機能を切り替え、血が酸素を全力で取り込んでいく。シィィ……と鋭い呼吸音が空気を裂いた。風呂敷を放り投げて深く踏み込む。そして、弾丸のように彼女は飛びかかった。裾が豪快にはだけける。

殴り合う二人の間に滑り込み、水の型を応用した動きでまず炭治郎を投げる。ぽーんと放り投げられた彼は「えっ」と目と口を丸くし、空

中で体勢を整えて着地した。ちゃんと鍛えられているようでないよ。弟弟子の成長にふつと口許を緩め、すぐにきりりと引き締めた。「無礼!」

そう腹から叫んで、強かに拳を放った。榎寿郎の腹を殴り抜くことには成功したが、そこまで効いてはいないだろう。なにせ彼は柱だったのだから。しかし動きを止められれば充分である。尻もちをついた彼を前に、夕映は腰に手を当てて吼えた。

「なにをしているんですか!! 十も半ばの手負いの少年にむきになって! ちい坊ちゃんのこと殴ったのですか! 旦那様の武芸は人を傷つけるために身につけたものではないでしょう!! もうっ……ばか! ばか! 旦那様のばか!! 自分がどれだけ強いか知っているくせに!!」

半泣きになりながら頬を連続で張った。ばか! のたびに一打撃。ばちんばちんと平手打ちの音が響く。終いには襟をつかんで乗り上げ、平手の速度が増していったので、炭治郎は青ざめながらはわわ……と口に手を当てていた。

真っ先にはっ! と立ち直ったのは、頬を腫らして口の端を切った千寿郎である。がくがくと父の首根っこをつかんで揺さぶっている女中に駆け寄り、その肩をつかんだ。

「姉や! 姉や! 父上、もう目を回しています!!」  
「……あら?」

額に汗を浮かばせてふうふう息を荒げていた彼女が、構えた腕をひたりと止めた。きれいにまとめられていた髪が乱れている。その下で榎寿郎は白目を剥いていた。おかめのように頬がおたふく状態になっている。持ち上げられていた榎寿郎の上半身がゆっくりと地面に横たえられ、夕映は千寿郎に向き直った。

「ああ坊ちゃん、大丈夫ですか? 歯は折れていませんか?」  
「うん、大丈夫。ちよつと口の中は切ったかもしれないけれど……」

ぺたぺたと頬を触られると口の中がひりひりと痛んだ。顔をしかめたくなるところを意地だけで我慢して、姉やを安心させようと千寿郎は微笑む。それに目を見開いた彼女が、片手で頭を抑えてため息を

吐く。頭痛がするのだろう。

女の人ってこういうときものすごく強いな。母ちゃんの頭突きも彌豆子の指弾もすごかったし。呆然と炭治郎は現実逃避していた。

「いらつしゃい、炭治郎くん。どうしたんですか？　というか身体は大丈夫なんですか？　腹を刺されたと聞いていますよ？　そもそも蝶屋敷を抜け出してきましたね？」

「えっ」

「うっ！　その、いてもたってもいられなくて……」

ぴきぴきと夕映のこめかみに青筋が浮いているのが見えた。笑っているのに怒っている。しのぶを前にしたときのような。炭治郎はばつが悪くて、もじもじと身体を縮こまらせる。赤い唇から、特大のため息が吐き出された。

「は……男の人ってみんな勝手だわあ……しのぶが笑顔で激怒しているでしょうに。坊ちゃん、上がっていつてもらってもよろしいですか？」

千寿郎は朗らかにうなずいた。

「うん。お茶の用意は俺がやるよ」

「ま！　ありがとうございます。じゃあ私は旦那様を戻してきますね。寝かせておけばそのうち起きるでしょう」

「ははは……」

花が咲くように笑った女性が、同じ顔で三十路をゆうに超えた男性を担いで屋敷の中へ消えていく。姉弟子がものすごく強い。炭治郎はほあく……と感嘆のため息を吐いた。俺もあなりたい。そう思わずにはいられない。きらきらと目を輝かせる炭治郎を見て、千寿郎は苦笑が微笑みに変わるのを感じた。

「すみません、うちの女中が。あんなに怒っているのは久しぶりに見ました」

「いや、俺もあのままだと思いきり頭突きしていたと思うので……」

茶を差し出すと彼はわたわたと両手を動かして否定する。頭突き、頭突きか！　千寿郎はこみあげてくる笑いを抑えきれない。剣士で

あるのに咄嗟に出てくるのが頭から突っ込む突貫というのは面白すぎる。くすくす肩を震わせていると、炭治郎は頬を赤らめて「俺、すぐく石頭で……」と身体を小さくした。柱にも鬼にも頭突きをしたと聞いたら千寿郎の笑いは引っ込んでいたと思う。無謀が過ぎる。

炭治郎が勧められるままに熱い茶をすすっていると、すくと襖が開いた。夕映が顔を出している。

「お待たせしました！ 同席してもよろしいですか？」

千寿郎は鷹揚にうなづく。

「もちろん。父上は？」

「濡らした手拭いでお顔を冷やしてみたらすぐに起きられましたよ。お酒を買いに出していられました。体裁として止めてみましたが無駄でしたね……あんなに飲んで身体に毒だと言ってもまるで聞きやしない。お酒がないと正気でいられないのはわかりますけどね」

「そう……姉や、まだ怒ってる？」

「当然でしょう！ 忘れ形見に手をあげて、自分は自傷行為に浸るなんて言語道断ですよ！」

ふん！ と鼻息荒く、夕映は脇を締めて拳を固めた。これには炭治郎も千寿郎も苦笑するしかない。自分より怒っている人がいるとかえって冷静になるものである。

しかしこのままではいつまでも本題に入れまい。すつと姿勢を正し、千寿郎は静かに口火を切った。

「それで、炭治郎さん。兄から言伝を預かっていると仰いましたが……兄は、どのような最期を迎えられましたか？」

ぴりつと炭治郎の背に電流が走った。じいつと、兄の写し身のような金の目と、夕映の赤い瞳がこちらを見ている。思い出すだけで怒りと悲しみの渦に放り込まれそうなあの朝日を思い出す。炭治郎は一度目を閉じ、すうーつと息を吸った。そして語るのだ。如何に杏寿郎が人のために戦ったかを。

千寿郎は、兄の生きざまを聞いてぼろぼろと涙を流した。炭治郎は絞り出すような声で「力及ばず申し訳ない」と唇を噛んだが、二人が炭治郎を責めるわけがないのだ。千寿郎は彼の手を握って頭を上げ



てくれと頼んだし、夕映は炭治郎の涙を指の腹で拭った。

(責めてくれた方が楽だった。俺の弱さをなじってくれたら、俺は俺を許さなくて済んだのに)

そんなことを考えながら、炭治郎は二人の血の通うあたたかさを享受した。

——しかし、そんな静寂とは別に夕映の眉がぴくりと跳ねあがった。

「……ちよつと待ちなさい。炭治郎くん、君、熱がありますね!？」

「ええ!？」

「へえっ!？」

ぱつと押しつぶすような勢いで両手が頬を挟む。変な声が出た。その横では千寿郎が目を剥いている。炭治郎は慌てて取り繕った。

「いえ、そんなことは」

確かに三人娘が体温計なるもので体温を測ったときに熱が出ているから安静にするようにと言っていたが、炭治郎は今貧血を起こしている感覚はあっても発熱は感じていない。だから大丈夫だしなにも問題ないはずだ。しかし、その理屈は夕映には通用しないようだった。

ぴしやりと小規模な雷が落ちる。

「馬鹿を仰い! 38度はあります! ああもう、しのぶには鴉を飛ばしますから、今夜は泊まっていつてちようだい! こんな状態で放り出すなんてありえないわ、無理よう!!」

慌てきつた彼女が「ええと客間の用意と、お布団干して、あと着替えね!」と指をぱぱ折、「坊ちゃんたちはご歓談を続けてくださいねえ!」と残して部屋を飛び出していった。炭治郎が口を挟む暇もない。取り残された当人は呆然と夕映の背中を見送っていた。はつとして千寿郎の方を向いても、彼ははにかんで女中の行動を肯定した。「その、よければ泊まっていつてください。ああなったら止めるのは無理ですし、それに、私はもつと炭治郎さんとお話したいです……姉やと一緒に修行していたときの話も、聞けるものなら聞きたかったの……」

「ご迷惑でしょうか？」と、この世の愛されて育った弟すべてが有する甘え攻撃が炸裂する。長男であり兄である炭治郎にはものすごく効く。

逃げられない!! 炭治郎は悟った。もう折れるしかなかった。うなだれながら、ぽそぽそと「一晩お世話になります……。」と呟く。千寿郎は嬉しそうに笑った。

夕飯をご馳走になり、千寿郎とたくさん話をした。父親の槇寿郎は終ぞ食卓に姿を現さなかったが、汗を飛ばす炭治郎とは正反対に二人は「まあ決まりが悪いでしょうからね」とどこ吹く風だ。家族ならではの信頼と無遠慮を垣間見て、少し前までは杏寿郎もここにいたのだろうなというのをぼんやり思った。

「炭治郎くん、まだ起きてます?。」

「はい! どうしたんですか?。」

煉獄家の香りでいっぱい布団の上に座って、月を見ていた頃だ。難しい顔をした夕映が訪ねてきた。頬は桃色に色づいていて、炭治郎よりも熱があるように見える。心配する言葉をかけると、彼女は困ったようにへにやりと笑った。

「ちよつと吐き出させてほしくて……千寿郎坊ちゃんや旦那様にはとても言えないんだもの……。」

きよとんと目を丸くしている炭治郎のすぐ側に、彼女が座る。「坊ちゃんの遺言のこと」と付け加えられてようやく合点がいった。

杏寿郎の「手紙と日記を読むように」という言葉通り、彼女は彼の部屋の机の引き出しから遺品となったそれらを読んだようだった。内容を尋ねるといふ野暮な真似をしなくても、ゆでだこのように赤く染まった夕映の顔を見たら、なにが書いてあったかはだいたい察せられる。簡潔に遺言を述べていった杏寿郎が、夕映に向けた言葉だけは言いよんだのだ。遺されたものには、それはそれは、万感の思いが詰まっていたことだろう。

眉をひそめて、夕映は火照る頬を両手で覆う。

「読んでいて恥ずかしくなるくらい、歯が浮くような言葉が大量に並

んでいましたよう!! あれを直接食らっていたら勢いに吞まれて嫁入り確定でした、いやはや、坊ちゃんが私の気持ちを尊重してくれていたと思うべきか、意気地なしと責めるべきなのか。まったくもう。大事なことはなアんにも口にしてくれない男しか、私の周りにはいないのかしらあ? やんなっちゃうわね! 炭治郎くんも苦勞するわけだわ!」

ぶんぶんといっそう顔を赤くする夕映を前にして、炭治郎の頭にはすぐ兄弟子の顔が浮かんだ。鱗滝も口下手だし、錆兎の言葉の足りなさもどっこいどっこいだ。否定できない。

そうかもしれない……。彼は深く夕映に同情した。

はあー……。つと重いため息が唇から落ちる。

「きみが生きていて、本当によかったと思うの。坊ちゃんが乗客の皆さんを守り切ったことを誇りにも思うの。でも、それでも、坊ちゃんが死んでしまったことが悲しくって仕方がないのよう。お葬式から一週間以上経って、やっと受け止められたのだけど」

横髪を耳にかけながら、彼女は続ける。その目は欠けた月を見ていた。

「坊ちゃんは、坊ちゃんの命だけは天秤に乗せてくれなかったわ。私に戦うなってわがままは言うのに、自分のことはポンと犠牲に差し出してしまふんだもの。やさしくって、そのやさしさがどうしようもなくひどいひと。あの人は私をひどいと言ったけど、どっちもどっちよねえ……」

溶けるような独白が宙に舞う。炭治郎は、その彫像のような横顔から目を離せなかった。胸が締めつけられる。しかし、その痛みは悲しみとは違う形をしている気がした。

「でも、もう約束を守る相手がいないのだから、あれは無効だわ」

「え」

ぽかんと炭治郎は口を開けた。その反面、夕映はたいそう美しく微笑む。

「私、鬼殺隊に復帰することに決めたの。力があるのだから、有効に使わなくちゃ。千寿郎坊ちゃんが剣への未練を捨てられるなら、私が拾

うまでよ。だって私は戦えますからね。なら、戦うしかないじゃない？」

そんなことは。そう言おうとして、炭治郎はぐつと口をつぐんだ。これは相談ではない。宣誓だ。そもそも炭治郎には止める権利などないのだ。どうしてか、それを歯がゆいと思う。

ふつと、吐息が空気を揺らした。彼女は眉を下げ、炭治郎を見つめている。

「ごめんね、ずるいことを言ったわ。君なら否定しないでくれるってわかっていて言いに来たんだから、私も卑怯よねえ」

一拍、間を置いて、彼女の両手が炭治郎の手を握る。赤い双眸がやっと彼を正面から見つめた。

「だけど——ようやく決心がついたの。……坊ちゃんに負けなくらい強い柱になるって言ってくれて、嬉しかったわ。それでも頭突きはやめておきなさいね。君の立場が悪くなってしまおうでしょう」  
「うっ！」

ぽんぽんと肩を叩かれると顔を赤くするほかない。炭治郎は少しだけ、自分の導火線の短さを恥じた。少年らしい年相応の顔を見ることができたからか、夕映はコロコロ笑う。

「話を聞いてくれてありがとう。それじゃあ、ゆっくりお眠り。明日も熱があつたら、禰豆子ちゃんごとおんぶしていつてあげるからねえ」

「え、いや、さすがにそれはっ……！」

「ふふ、冗談冗談！——またね。次は同じ志を抱くものとして会いましょう」

そう言い残して、彼女は部屋を去っていった。梅の香りは変わらずに炭治郎の近くを漂っていた。

真新しい隊服に袖を通す。採寸通りに作られたそれに大ききの過不足はない。洋服の類を着るのは初めてだから、おかしくないだろうかと何度も姿見を確認した。ボタンを留めるといふ行為が案外難しいものだということも、初めて知った。平隊士の藤色のボタンを見て

いると、今まで死んでいった柱たちの金に輝くボタンを思い出す。

(遠いわねえ……)

ひとつため息を吐き、そのままベルトと脚絆を整えた。最後に刀を差し、**滅**の文字を羽織で隠す。

やっと、己も同じ開始地点に立った。何年も前に入隊を辞退した女を拾い上げてくれたお館様には頭が上がらない。よりいっそう精進し、産屋敷家に尽くすことを改めて彼女は誓った。

「それでは、坊ちゃん、行つて参ります！」

女は笑い、修羅の道へと身を投げる。